公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(10)

南九州西回り自動車道（出水阿久根道路）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

中郡遺跡群Ⅱ
（出水市野田町）

中尾遺跡
（出水市福ノ江町）

前原遺跡
（出水市下知識町）

２０１６年３月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

前原遺跡遠景

前原遺跡出土の西平式土器

序　文

この報告書は，南九州西回り自動車道（出水阿久根道路）建設に伴い，平成25年度から26年度にかけて実施した中郡遺跡群，中尾遺跡，前原遺跡の発掘調査の記録です。

中郡遺跡群は，出水市野田町下名の西端に位置し，東側の野田川，西側の岩下川に挟まれた標高約20メートルの台地上に立地しています。調査の結果，主に中世の遺構・遺物が発見されました。

中尾遺跡は，薩摩半島北端の出水市に所在し，扇状地の扇端にあります。調査の結果，縄文時代晩期の遺構・遺物が発見されました。

中尾遺跡に隣接する前原遺跡では，縄文時代から近世の遺構・遺物が発見されました。特に，縄文時代中期前半期の東海系の土器が県内で初めて発見され，これらは，南九州における当該期の研究を進める上で貴重な資料を提供したものと考えています。

本報告書が，県民の皆様はじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査に当たり御協力いただいた国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所，出水市教育委員会，関係各機関及び発掘調査・整理作業に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成28年３月

公益財団法人　鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長　　堂込　秀人

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかごおりいせきぐん　なかおいせき　まえばらいせき
書　名	中郡遺跡群Ⅱ　中尾遺跡　前原遺跡
副　書　名	南九州西回り自動車道（出水阿久根道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第 10 集
編集者名	吉岡康弘　江神めぐみ
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL　0995-70-0574 FAX　0995-70-0576
発行年月	2016年3月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市長村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
中郡遺跡群（なかごおりいせきぐん）	鹿児島県（かごしまけん）出水市（いずみし）野田町下名（のだちょうしもみょう）	46208	48-1	32°04′25″	130°15′56″	本調査 2013.05.13 ～ 2013.09.13（今回報告分）2014.07.01 ～ 2014.07.24	260	南九州西回り自動車道建設に伴う記録保存調査
中尾遺跡（なかおいせき）	鹿児島県（かごしまけん）出水市（いずみし）福ノ江町中尾（ふくのえちょうなかお）	46208	208-362	32°05′47″	130°19′24″	本調査 2013.05.13 ～ 2013.09.13	2,600	
前原遺跡（まえばらいせき）	鹿児島県（かごしまけん）出水市（いずみし）下知識町（しもちしきちょう）	46208	208-361	32°05′51″	130°19′30″	本調査 2013.07.01 ～ 2013.09.13 2014.05.12 ～ 2014.10.10	5,500	

所収遺跡名	種別	主な時代	主要な遺構	主要な遺物	特記事項
中郡遺跡群	散布地	中世	溝状遺構4条　土坑2基　ピット3基	土師器，瓦質土器，白磁，青磁，国産陶器ほか	
中尾遺跡	散布地	縄文時代晩期	土坑１基	入佐式土器，黒川式土器，石鏃，楔形石器，原礫	
前原遺跡	散布地	縄文時代晩期	土坑４基　集石2基　中世土坑墓1基 掘立柱建物跡1棟　溝状遺構6条 ピット43基	中原式・押型文土器，阿高式，船元式，北裏ＣⅡ式，南福寺式，北久根山式，轟崎式，西平式，市来式，入佐式，黒川式，石鏃，楔形石器，石斧，磨石・石皿 入来式土器，成川式土器，土師器・須恵器・土師甕 青磁・白磁・陶磁器ほか	

要約

中郡遺跡群は平成21年度と平成24年度に発掘調査を実施した。今回の調査区域は平成21年度の調査で検出された堀跡1号の未調査部分にあたることから，遺構検出を主な目的として調査を行った。遺構は，溝状遺構4条，ピット3基，土坑2基が検出された。遺物のほとんどは土師器で，そのほかに縄文土器，石鏃，国産陶器，青磁，白磁等が確認された。平成21年度で検出された堀跡1号に関して，積極的に補強する成果はなかった。

中尾遺跡は平成25年度に発掘調査を実施した。本遺跡は縄文時代晩期の遺跡である。土坑が１基確認され，埋土中から黒川式土器の浅鉢や深鉢が出土した。

前原遺跡は平成25・26年度に発掘調査を実施した。遺構は土坑４基，集石２基，中世土坑墓1基，掘立柱建物跡1棟，溝状遺構6条，ピット43基が検出された。遺物は縄文中期から縄文晩期にかけての土器，磨石，石皿，磨製石斧，弥生土器，成川式土器，土師器，須恵器，青磁，白磁，瓦質土器，陶磁器ほかが出土した。特に縄文時代中期の近畿・瀬戸内からの搬入品の船元式土器と岐阜県，静岡県で多く見られる東海系の北裏ＣⅡ式土器が出土した。縄文時代中期前半期の東海系の土器は県内では初めての出土となった。

遺跡位置図（1:25,000）

例　言

1　本書は，南九州西回り自動車道（出水阿久根道路）建設に伴う中郡遺跡群・中尾遺跡・前原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本報告書に収録した各遺跡の所在地は，以下のとおりである。

　中郡遺跡群　鹿児島県出水市野田町下名

　中尾遺跡　　鹿児島県出水市福ノ江町中尾

　前原遺跡　　鹿児島県出水市下知識町

3　発掘調査は，国土交通省鹿児島国道事務所から，鹿児島県が受託し，鹿児島県教育委員会の監理のもと公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。

4　中郡遺跡群の発掘調査は，平成 26 年度に実施し，整理作業・報告書作成は，平成 27 年度に実施した。

5　中尾遺跡の発掘調査は，平成 25 年度に実施し，整理作業・報告書作成は，平成 26・27 年度に実施した。

6　前原遺跡の発掘調査は，平成 25・26 年度に実施し，整理作業・報告書作成は，平成 26・27 年度に実施した。

7　掲載遺物番号は通し番号であり，本文，挿図，表，図版の遺物番号は一致する。

8　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。

9　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。

10　各遺跡の遺物注記等で用いた遺跡記号は以下のとおりである。

　中郡遺跡群　「ナカゴ」　中尾遺跡　「イ・ナカ」　　前原遺跡　「イ・マエ」

11　本書で使用した方位は，全て磁北である。

12　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，調査担当者が行った。

13　遺構図，遺物分布図の作成及びトレースは，吉岡康弘が整理作業員の協力を得て行った。

14　出土遺物の実測・トレースは，江神めぐみが整理作業員の協力を得て行った。

15　出土遺物の写真撮影は，吉岡康弘が行った。

16　本報告書に係る自然科学分析は，放射性炭素年代測定を㈱パリノ・サーヴェイに委託した。

17　本書の編集は吉岡康弘が担当し，執筆者は以下のとおりである。

　第１章　吉岡康弘

　第２章　吉岡康弘

　第３章　吉岡康弘

　第４章　川俣唱子　吉岡康弘

　第５章　江神めぐみ　吉岡康弘

18　出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

目　次

巻頃カラー
序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言
第１章　発掘調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯 …… 1
　第２節　調査組織 …… 1
　第３節　整理・報告書作成 …… 2
第２章　遺跡の位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　中郡遺跡群の調査 …… 11
　第１節　調査の経過（日誌抄） …… 11
　第２節　調査の方法 …… 11
　第３節　層序 …… 11
　第４節　調査の成果 …… 14
　　1　調査の概要 …… 14
　　2　遺構 …… 14
　　3　遺物 …… 20
　第５節　総括 …… 22
　　1　遺構 …… 22
　　2　遺物 …… 22
第４章　中尾遺跡の調査 …… 23
　第１節　調査の経過（日誌抄） …… 23
　第２節　調査の方法 …… 23
　第３節　層序 …… 23
　第４節　調査の成果 …… 25
　第５節　自然科学分析 …… 31
　第６節　総括 …… 33
第５章　前原遺跡の調査 …… 35
　第１節　調査の経過（日誌抄） …… 35
　第２節　調査の方法 …… 35
　第３節　層序 …… 35
　第４節　縄文時代の調査 …… 39
　　1　調査の概要 …… 39
　　2　遺構 …… 39
　　3　遺物 …… 43
　第５節　弥生時代の調査 …… 67
　　1　調査の概要 …… 67
　　2　遺物 …… 67
　第６節　古墳時代の調査 …… 68
　　1　調査の概要 …… 68
　　2　遺構 …… 68
　　3　遺物 …… 72
　第７節　古代の調査 …… 76
　　1　調査の概要 …… 76
　　2　遺物 …… 76
　第８節　中・近世の調査 …… 78
　　1　調査の概要 …… 78
　　2　遺構 …… 78
　　3　遺物 …… 79
　第９節　時代・時期不明遺構 …… 81
　第10節　自然科学分析 …… 88
　第11節　総括 …… 90

挿図目次

中郡遺跡群周辺遺跡１ …… 7
中尾・前原遺跡周辺遺跡２ …… 9
中郡遺跡群
第１図　グリッド配置図及び遺跡位置図 …… 12
第２図　周辺地形図及び遺構配置図 …… 13
第３図　基本層序 …… 14
第４図　中郡遺跡土層断面図 …… 15
第５図　遺構配置図 …… 16
第６図　溝状遺構１～４ …… 17
第７図　土坑１号・２号及びピットNo.１～No.３ …… 18
第８図　縄文時代の遺物 …… 18
第９図　中・近世の遺物（１） …… 19
第10図　中・近世の遺物（２） …… 20
中尾遺跡
第１図　調査区及びグリッド配置図 …… 23
第２図　中尾遺跡土層断面図 …… 24
第３図　遺構配置図 …… 25
第４図　縄文時代の土坑１号及び出土遺物 …… 25
第５図　縄文時代の遺物（１） …… 26
第６図　縄文時代の遺物（２） …… 27
第７図　縄文時代の石器（１） …… 28
第８図　縄文時代の石器（２） …… 29
前原遺跡
第１図　調査範囲図 …… 36
第２図　前原遺跡土層断面図（１） …… 37
第３図　前原遺跡土層断面図（２） …… 38
第４図　グリッド配置図 …… 39
第５図　縄文時代の遺構配置図 …… 40
第６図　集石１号・２号 …… 41
第７図　土坑１号及び出土遺物 …… 42
第８図　縄文時代の遺物（１） …… 43
第９図　縄文時代の遺物（２） …… 44
第10図　縄文時代の遺物（３） …… 45

第11図　縄文時代の遺物（４）…… 46
第12図　縄文時代の遺物（５）…… 47
第13図　縄文時代の遺物（６）…… 48
第14図　縄文時代の遺物（７）…… 49
第15図　縄文時代の遺物（８）…… 50
第16図　縄文時代の遺物（９）…… 51
第17図　縄文時代の遺物（10）…… 52
第18図　縄文時代の遺物（11）…… 53
第19図　縄文時代の遺物（12）…… 54
第20図　縄文時代の遺物（13）…… 55
第21図　縄文時代の遺物（14）…… 56
第22図　縄文時代の石器（１）…… 58
第23図　縄文時代の石器（２）…… 59
第24図　縄文時代の石器（３）…… 60
第25図　縄文時代の石器（４）…… 61
第26図　縄文時代の石器（５）…… 63
第27図　縄文時代の石器（６）…… 64
第28図　縄文時代の石器（７）…… 65
第29図　弥生時代の遺物 …… 67
第30図　古墳時代の遺構配置図及び土坑２号 …… 68
第31図　土坑２号出土遺物 …… 69
第32図　土坑３号及び出土遺物 …… 70
第33図　土坑３号出土遺物 …… 71
第34図　古墳時代の遺物（１）…… 72
第35図　古墳時代の遺物（２）…… 73
第36図　古墳時代の遺物（３）…… 74
第37図　古墳時代の遺物（４）…… 75
第38図　古代の遺物（１）…… 76
第39図　古代の遺物（２）…… 77
第40図　中世の遺構配置図及び土坑墓・出土遺物 … 78
第41図　中・近世の遺物（１）…… 79
第42図　中・近世の遺物（２）…… 80
第43図　時期不明の遺構配置図 …… 81
第44図　掘立柱建物跡 …… 82
第45図　土坑４号及び出土遺物 …… 83
第46図　溝状遺構１号 …… 84
第47図　溝状遺構２号 …… 85
第48図　溝状遺構３号 …… 86
第49図　溝状遺構４号 …… 86
第50図　溝状遺構５号・６号 …… 87
第51図　ピット配置図 …… 87

表目次

中郡遺跡群
第１表　中郡遺跡石器観察表 …… 21
第２表　中郡遺跡遺物観察表 …… 21
中尾遺跡
第１表　中尾遺跡土器観察表 …… 27
第２表　中尾遺跡石器観察表 …… 29
前原遺跡
第１表　縄文時代の土器観察表（１）…… 43
第２表　縄文時代の土器観察表（２）…… 48
第３表　縄文時代の土器観察表（３）…… 56
第４表　縄文時代の土器観察表（４）…… 57
第５表　縄文時代の石器観察表 …… 66
第６表　弥生時代の土器観察表 …… 67
第７表　土坑内遺物観察表 …… 71
第８表　古墳時代の土器観察表（１）…… 73
第９表　古墳時代の土器観察表（２）…… 74
第10表　古墳時代の土器観察表（３）…… 75
第11表　古代の遺物観察表（１）…… 76
第12表　古代の遺物観察表（２）…… 77
第13表　土坑墓観察表 …… 78
第14表　中・近世の遺物観察表（１）…… 79
第15表　中・近世の遺物観察表（２）…… 80
第16表　掘立柱建物跡計測表 …… 82
第17表　掘立柱建物跡規模表 …… 82
第18表　土坑内遺物観察表 …… 83
第19表　溝内遺物観察表 …… 85
第20表　ピット計測表 …… 87

図版目次

巻頭カラー１　前原遺跡遠景
巻頭カラー２　前原遺跡出土の西平式土器
中郡遺跡群
図版１　中郡遺跡群 …… 93
図版２　中郡遺跡群 …… 94
図版３　中尾遺跡 …… 95
図版４　中尾遺跡 …… 96
図版５　前原遺跡 …… 97
図版６　前原遺跡 …… 98
図版７　前原遺跡 …… 99
図版８　前原遺跡 …… 100
図版９　前原遺跡 …… 101
図版10　前原遺跡 …… 102
図版11　前原遺跡 …… 103
図版12　前原遺跡 …… 104
図版13　前原遺跡 …… 105
図版14　前原遺跡 …… 106
図版15　前原遺跡 …… 107
図版16　前原遺跡 …… 108

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（以下，「鹿児島国道事務所」という。）は，南九州西回り自動車道（出水阿久根道路）建設の施工計画に基づき，事業区内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育庁文化財課（以下，「県文化財課」という。）に照会した。

これを受けて，県文化財課及び鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，「埋文センター」という。）が平成18年度に阿久根～野田IC間の分布調査を実施し，中郡遺跡群等６遺跡の所在を確認した。この分布調査の結果を受けて鹿児島国道事務所，県文化財課，埋文センターの三者で協議を行い，埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため事業着手前に発掘調査を実施することとした。

中郡遺跡群の発掘調査は，平成21年度及び平成24年度に埋文センターが実施した。両年度の調査面積は，調査対象面積21,000㎡に対して用地買収等の関係で20,910㎡であった。平成21年度及び平成24年度の実施した発掘調査の成果は，平成25年度に県から委託を受け，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下，「埋文調査センター」という。）が「中郡遺跡群」《埋文調査センター発掘調査報告書（1）》としてまとめ，刊行した。

平成26年度に入り，鹿児島国道事務所と県文化財課は用地買収等の課題が解決した部分と工事区内を南北に延びる農道部分の取り扱いについての協議を行った。その結果，発掘調査は，県文化財課の委託を受け埋文調査センターが実施することとなった。発掘調査は，平成26年7月1日（火）から7月24日（木）までの期間で実施した。なお，調査面積は前回の調査区域との重複部分を含め260㎡であった。

中尾遺跡，前原遺跡の試掘調査は，県文化財課が主体となり，埋文センターとともに出水市教育委員会の協力を受けて事業着手前の平成24年度に中尾遺跡，前原遺跡，平成25年度に前原遺跡を実施することとした。中尾遺跡は総面積13,700㎡，前原遺跡は総面積14,900㎡であった。

試掘調査の結果を受けて，平成25年度に中尾遺跡の本調査が必要と判断された2,600㎡と前原遺跡の本調査が必要と判断された5,500㎡のうちの1,650㎡の本調査を行った。期間は平成25年5月13日（月）～9月13日（金）で実働69日であった。また，前原遺跡は平成26年度に3,850㎡の調査を行った。調査は平成26年5月12日（月）から平成26年10月10日（金）の期間に実働80日間で実施した。

第２節　調査組織

分布調査（平成18年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県教育庁文化財課	
	課　　長	木原　俊孝
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課	
	課 長 補 佐	福山　徳治
	主任文化財主事兼	
	埋蔵文化財係長	青崎　和憲
調査担当	鹿児島県教育庁文化財課	
	文化財主事	堂込　秀人
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	文化財主事	日髙　勝博
	〃	羽嶋　敦洋
立 会 者	九州地方整備局鹿児島国道事務所	
	調査計画係長	松尾　和敏
	技　　官	祝迫　龍一

中郡遺跡群（平成26年度）

本調査

事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団	
	埋蔵文化財調査センター	
	セ ン タ ー 長	堂込　秀人
調査企画	総務課長兼総務係長	山方　直幸
	調 査 課 長	八木澤一郎
	調査第三係長	宗岡　克英
調査担当	文化財専門員	倉元　良文
事務担当	主　　査	岡村　信吾
	事業推進員	川崎　麻衣

中尾遺跡・前原遺跡

試掘調査（平成24年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調 査 者	鹿児島県教育庁文化財課	
	文化財主事	中村　和美
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	調査第二課長	冨田　逸郎
	文化財主事	長野　眞一
	文化財主事	西園　勝彦

立 会 者　九州地方整備局鹿児島国道事務所
計画課企画係長　酒井　和明
梶原三希郎
調査協力　出水市教育委員会生涯学習課
主　　査　岩崎　新輔
主　　査　橋元　邦和

平成25年度本調査

事業主体　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　冨田　逸郎
調査企画　総務課長兼総務係長　山方　直幸
調査課長　鶴田　静彦
調査第二係長　寺原　徹
調査担当　文化財専門員　抜水　茂樹
文化財調査員　川俣　唱子
文化財調査員　稲垣　友裕
事務担当　主　　査　岡村　信吾
事業推進員　川﨑　麻衣

平成26年度本調査

事業主体　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　堂込　秀人
調査企画　総務課長兼総務係長　山方　直幸
調査課長　八木澤一郎
調査第三係長　宗岡　克英
調査担当　文化財専門員　吉岡　康弘
文化財調査員　中村　有希
文化財調査員　江神めぐみ
事務担当　主　　査　岡村　信吾
事業推進員　川﨑　麻衣

第３節　整理・報告書作成

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，埋文調査センターで行った。

出土遺物の水洗い，注記，遺物の仕分け，遺物の実測及び拓本，図面のトレース・レイアウト，原稿執筆等の整理作業を行った。整理・報告作成作業に関する調査組織及び整理作業の経過は以下のとおりである。

調査組織

平成25年度中尾遺跡

事業主体　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　冨田　逸郎
調査企画　総務課長兼総務係長　山方　直幸
調査課長　鶴田　静彦
調査第二係長　寺原　徹
調査担当　文化財専門員　抜水　茂樹
文化財調査員　川俣　唱子
文化財調査員　稲垣　友裕
事務担当　主　　査　岡村　信吾
事業推進員　川﨑　麻衣

平成26年度前原遺跡

事業主体　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　堂込　秀人
調査企画　総務課長兼総務係長　山方　直幸
調査課長　八木澤一郎
調査第三係長　宗岡　克英
調査担当　文化財専門員　吉岡　康弘
文化財調査員　中村　有希
文化財調査員　江神めぐみ
事務担当　主　　査　岡村　信吾
事業推進員　川﨑　麻衣

平成27年度前原遺跡・中郡遺跡群・中尾遺跡

事業主体　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　堂込　秀人
調査企画　総務課長兼総務係長　有村　貢
調査課長　八木澤一郎
調査第三係長　宗岡　克英
調査担当　文化財専門員　吉岡　康弘
文化財調査員　江神めぐみ
事務担当　主　　査　荒瀬　勝己
事業推進員　川﨑　麻衣

整理作業の経過

整理作業の経過は以下のとおりである。

平成25年度（中尾遺跡）

9月16日～9月30日　遺物分類，図面整理，写真整理
10月1日～24日　遺物の洗浄，注記，接合
10月25日～12月3日　石器選別，土器接合
12月4日～3月31日　実測，拓本，原稿執筆

平成26年度（前原遺跡）

10月14日～10月17日　遺物の洗浄・選別・注記
10月20日～10月24日　遺物の洗浄・選別・注記，図面整理
10月27日～10月31日　遺物の選別・注記，土器分類，図

面整理，写真整理
12月1日～12月5日
　土器分類・接合（縄文～古代・中世）
12月8日～12月12日
　土器分類・接合（縄文～古代・中世）
12月15日～12月19日
　土器分類・接合（縄文～古代・中世）
12月22日～12月26日
　土器分類・接合・実測選別（縄文～古代・中世）
平成27年1月5日～1月9日
　土器実測選別（縄文～古代・中世），土器実測・復元，科学分析委託
1月13日～1月16日
　土器実測・復元，写真撮影・整理
1月19日～1月23日
　土器実測，図面整理
1月26日～1月30日
　土器実測・分類・実測図チェック，図面整理，遺構配置図作成
2月2日～2月6日
　土器復元・実測（縄文後期・晩期）
2月9日～2月13日
　土器復元（縄文後期），土器実測（縄文後期，古代・中世）
2月16日～2月20日
　土器復元，土器実測（中・近世）
2月23日～2月27日
　土器復元，土器実測（中・近世），石器実測図チェック
3月2日～3月6日
　土器実測（中・近世），原稿執筆（縄文），石器実測委託
3月9日～3月13日
　土器実測，トレース，原稿執筆，図面チェック，レイアウト（土器・石器）

平成27年度（中都遺跡群）

5月　出土遺物の洗浄・実測・拓本，原稿執筆，レイアウト

平成27年度（前原遺跡・中尾遺跡）

8月3日～9月11日
　土器復元，図面整理，石器トレース
9月14日～11月6日
　観察表作成，レイアウト，写真撮影，遺構トレース
11月9日～12月25日
　レイアウト，原稿執筆
1月～3月
　遺物図面等の整理，遺物の収納，写真整理

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

中郡遺跡群は出水市野田町，中尾遺跡は出水市福ノ江町，前原遺跡は出水市下知識町にそれぞれ所在する。出水市は出水平野の東北部，矢筈岳（687m）を主峰とする肥薩山系を境界として熊本県水俣市と接する県境の町である。肥薩山系は，新第三紀鮮新世（520万～170万年前）に噴火した火山岩類から構成されており，「肥薩火山区」と呼ばれている。出水平野の南には四万十層群と一部花崗閃緑岩よりなる紫尾山塊が東西にのび，西側はなだらかな丘陵地帯となって阿久根市の背後に迫り，三面を山地に囲まれる。紫尾山（1,067m）は，北薩一の高峰である。この紫尾山地と出水平野との境の断層崖下には，シラス台地と高位段丘がある。これに続く大野原一帯は，洪積台地の扇状地で広大に広がっている。このあたりは扇央部にあたり，地下水位が低いために，現在では果樹園や造園用樹木の栽培が盛んである。扇頂部は出水市松山，出水市高尾野町野添付近で，中尾遺跡の所在する福ノ江町周辺は扇端部付近にあたり，標高は海抜10m弱で，一帯は平坦な地形である。扇端部付近では扇央部で伏流水となっていた地下水が地表近くに上がってくるため，湧水が見られる。このため調査中も湧水が随所にみられた。出水平野ではこのような扇端部付近の砂礫台地縁辺の湧水地点で古くから集落が発達している。この扇状地の東北部を，矢筈山地に源を発した広瀬川と，紫尾山地を源とする平良川が中流域で合流して米ノ津川となり北流して，八代海に注ぐ。また，南東部の紫尾山系を源とする高尾野川と野田川が北流して八代海に注ぐ。平良川及び米ノ津川の左岸には，知識面と呼ばれる河岸段丘が扇状地を取り巻くように細長く形成され，中流域では米ノ津面と呼ばれる沖積地が発達する。この付近は錦江湾奥部の姶良カルデラ噴出起源のシラスを主体とするローム層地帯の一部を除けば上流からの流水作用によって堆積した砂礫層が構成されており，その下層にローム層が堆積している。また，一部にはいわゆる黒ボク土のひろがりが表層付近にみられ，中尾遺跡付近がこれにあたる。なお，下流域では，氾濫原により沖積低地が発達しており，県内でも有数の穀倉地帯となっている。河口付近には三角州や海岸平野がみられる。遠浅な海岸部は江戸時代以降干拓が行われ，水田が広がり現在の地形を呈している。

このなかで荒崎地区は鶴の越冬のための渡来地があり，毎年10月下旬から３月上旬まで，近年では毎年1万羽を超える鶴が飛来して，全国的にその名を知られている。現在，「鹿児島県の鶴及びその渡来地」として，国の特別天然記念物に指定されている。出水市の市街地は，前述の平良川と広瀬川の合流地点付近を中心に拡がっており，ここは北薩地域の政治経済の中心地である。人口は55,627人（平成22年），４つの国道が集まる。平成23年３月12日には九州新幹線が全線開業されたことにより，出水市は鹿児島市方面と九州北部方面が一層近くなった。「人」「物」「情報」の流通量は今後増える可能性を持っている。

第２節　歴史的環境

旧石器時代・縄文時代

出水平野は早くから考古学・歴史学の重要な研究対象地域として，注目されてきた。出水市の東部，伊佐市，水俣市と接する標高約500mの上場高原一帯は，上場遺跡，狸山遺跡，大久保遺跡，郷田遺跡，池ノ段遺跡等の旧石器時代の遺跡が存在する。特に上場遺跡は，県内で初めて発掘調査された旧石器時代の遺跡であり，爪形文土器と細石器の供出や，姶良カルデラ噴出起源のシラス（約2.9万年前）の上下でナイフ形石器，台形石器等を包含する７時期の文化層の存在が明らかとなり，竪穴住居跡も発見された。これに関しては，再検討を求める意見も出されている。縄文時代の遺跡は主に高原から平野部の扇頂部及び扇端部の河岸段丘や山麓縁辺，裾部に多く見られ，縄文早期・前期・後期の牟田尻遺跡やカラン遺跡，前期の往貝塚，中期の江内貝塚や柿内遺跡，後期の出水貝塚，晩期の大坪遺跡等がある。出水平野は県内で最も貝塚の発掘調査数が多い地区であり，その貴重な資料は鹿児島のみならず，全国の研究者から注目されている。

縄文時代前期の往貝塚は，中学校の敷地で昭和43（1968）年偶然発見された縄文時代前期の貝塚で，昭和48（1973）年から昭和63（1988）年までの間に４次調査までおこなわれている。調査の結果，比較的小規模な貝層の上位に複数の文化層が確認され，轟式土器や獣骨のほかに双角状石器や方形状石器などこれまで比較的高い標高に位置する遺跡には見られない石器も確認された。江内貝塚は阿高式・南福寺式・出水式土器が出土しており，中期から後期にわたって貝塚が形成されたことを示している。縄文時代後期前半に位置づけられ，出水式土器の標式遺跡である出水貝塚は，大正９（1920）年に京都大学によって本県で最初の貝塚遺跡調査が行われており，また戦後の調査によって貝塚下から縄文早期の押型文土器が出土し，貝層中及び貝層上部から縄文後期の南福寺式土器・出水式土器などが出土している。また，埋葬人骨も７体確認されている。縄文後期から晩期の遺跡は沖田岩戸遺跡・中里遺跡・大坪遺跡などが知られる。この中で大坪遺跡では縄文後期終末期から晩期にかけての上加世田式土器，入佐式土器，黒川式土器の埋設土器が37基検出されている。また同時期の玉類も100点以上

出土している。

なお，上場一帯から隣接する伊佐市日東及び下青木一帯には，黒曜石原産地が複数所在し，これらの黒曜石は旧石器時代から縄文時代の出水平野一帯の石材供給の役目を果たしている。

弥生時代・古墳時代

弥生時代の遺跡はこの地域は数が少なく，集落跡の発見例もない。代表的なものとして，中期の覆石墓から後期の葺石土壙墓，古墳時代の地下式板石積石室墓へと移行する埋葬形態の変遷を知ることができる堂前遺跡や，洪積台地縁辺にあり，地下式板石積石室墓に伴い短甲や金環等の副葬品が出土した５～６世紀に築かれた溝下古墳群，海岸沿いに位置し，箱式石棺墓がある切通古墳群がある。その他，長島には，５～７世紀の箱式石棺墓や高塚古墳が多数存在する。

古代

出水の文献での初見は『続日本記』である。宝亀９（778）年11月の条に遣唐使船が薩摩国出水郡に漂着したとされている。また『和名抄』には「伊豆美」とあり，山内（やまと），勢戸（せと），借家（かしくり），大家（おおやけ），国形（にしかた）の五郷から構成されていると記載されている。山内郷は，現在の野田や高尾野，勢戸は長島，借家は米ノ津，大家は出水，国形は阿久根辺りで人口は7000人程度であったと考えられている。また，この時期『延喜式』兵部省の諸国駅伝馬条によれば，薩摩国内には，市来・英祢・網津・田後・樋野・高来の六駅に駅馬各五疋がおかれていた。このうち市来駅は出水市武本の市来付近に，英祢駅を阿久根市山下付近に比定する説がある。当時の南九州には肥後国府・日向国府を直接結ぶ駅路（肥後日向路）と，日向国府から大隅国府を経て（西海道東路），薩摩国府さらに肥後国府に至る（西海道西路）駅路があった。平安時代後期に入り全国で荘園が開墾されるようになった。南九州は中央政権から遠いこともあり，最も荘園の多い地方となり，出水でも山門院や和泉荘といった荘園が形成される。これらは万寿年間（1024～28年）に平季基によって開発され，摂関家に寄進された島津荘の成立と共にここに吸収される。島津荘は日向国島津院（都城市）を中心に薩，隅，日にまたがる大荘園であった。

中世

元暦２（1185）年，近衛家の家司であり，源頼朝の御家人でもある惟宗忠久が島津荘下司職に補任され，初代島津氏になる。諸説あるが，忠久は守護被官の本田貞親を島津荘に入部させた。貞親は山門院内に本牟礼城を築き，以後ここは５代貞久まで薩摩国守護所として守護勢力の拠点となる。木牟礼城に隣接する出水市野田町屋地に所在する中都遺跡群では中世前半期の掘立柱建物跡や堅穴建物跡等が検出されている。また，同時期の貿易陶磁も出土し，その中には全国にも出土例の少ない青白磁の龍首水注が出土している。このため，本田貞親の築いた本牟礼城との関連が指摘されている。しかし，和泉荘を領有していた在地土豪はこの時期反目しており，南北朝期になると島津氏が北朝側に着くと，和泉荘の領主たちは南朝側に着いて島津氏と戦っているが，正平９（1354）年の本牟礼城攻防の戦いを境に和泉一族らの在地土豪の組織だった抵抗は減っていることから，北朝と島津氏に制圧されたものと考えられる。その後，島津氏は総州家（薩摩守護職）と奥州家（大隅守護職）に分裂し内部抗争が始まり，総州家の滅亡と同時に本牟礼城も廃城となる。この中からやがて島津忠国・用久兄弟が争いを平定し，用久は1425年に薩州家を興し，以後約130年間出水地方を領有することになる。この頃から荘園の勢力は衰退し，徐々に消滅していく。

近世

薩州島津家は豊臣秀吉の時代に改易となり，出水地方は一時秀吉の直轄領となるが，慶長４（1599）年には朝鮮出兵時の功績で島津本家に返還される。この時代の遺跡としては，主に中世城郭があげられる。出水市内でも松尾城などが調査されて，成果があがっている。江戸時代の藩政期に入ると，薩摩藩は徳川幕府の統制に服することになるが，関ヶ原の戦いで不本意ながら西軍に属したこともあり，軍事的な緊張を強いられた。このため，陸上及び海上からの外敵侵入に対して厳重な防備体制を整えるため外城制度を定め，外城（天明三（1783）年改称されて郷に）ごとに一つの戦闘単位の組織を完備した。外城は，鹿児島城を中心として鱗状に配置された。藩境，特に北方の守りとして出水・高尾野など，東部の都城・志布志などには最も信頼する武将を配置し，第二線である宮之城・蒲生・第三線の伊集院・指宿・垂水等には更に島津氏直属の家老を配置し，間に無数の外城を配置した。出水郷にはまた，薩摩藩の中で第一の比重を持った「野間関」が主要街道の一つである出水筋にあった。武士は外城内の武士集落である麓に集められ，農民は門割制度によって，単位毎に新しい村に編成されていく。この頃，周辺は大規模な開田事業も行われていく。出水の外城衆中（天明三年改称されて郷士）の数は寛政元（1789）年で，麓1707名，支城郷士1136名で，郷の石高は２万２千石で，これは113カ所ある藩内の外城では最大規模である。出水市の麓地区は平成5年度以降出水市により発掘調査が行われている。また，平成７（1996）年に国の重要伝統的建造物群保存地区に指定された。麓時代の仮屋の建物が現地に残存しているのは旧

藩内で出水だけである。

近代・現代

明治維新により，藩の封建的家臣団は維新後数年もたたないうちに解体した。明治10年２月に西南戦争が勃発すると，出水地方でも激戦が繰り広げられた。陸軍が矢筈山系と米ノ津の二方面から進出し，海軍が米ノ津・阿久根に入港し砲撃，上陸したため，薩軍は出水郷の青壮年士族を主とする郷士部隊と強制徴募された在郷士族らが戦った。６月には麓で攻防戦が行われたが敗れ，名地頃山田嚴以来，出水兵児の名をもって謳われた薩摩藩最大，最強の出水外城もついえ去り，この地域は政府軍の支配下となる。大坪遺跡ではこのとき使用されたと考えられる鉛の球形弾が出土している。交通面では近世までの出水筋は県道になり，新たに海岸線に沿って国道37号（現3号）が明治23年に開通した。大正12（1923）年，鹿児島・米ノ津間に鉄道が敷かれ，昭和２（1927）年，米ノ津・八代間の鉄道が開通，これが鹿児島本線となった。それ以前の鹿児島本線は軍事的理由から明治42（1909）年に，鹿児島→国分・吉松→人吉・八代という内陸ルート（現在の肥薩線）を通っていたが，米ノ津八代間の鉄道が開通したことで，こちらが鹿児島本線となった。一方，明治５（1872）年に発布された学制により，出水地方でも教育が普及していき，知識水準が高まり，経済も発展していく。昭和に入ると，海軍は出水から高尾野にかけての水田地帯を収用し，15年に出水飛行場を造った。18年には練習部隊である出水海軍航空隊が開隊し，20年には戦況の悪化で特攻隊基地となるも，本土空襲によりこの基地も空襲を受ける。当時の遺構として滑走路跡の一部や司令部豪，掩体豪等が現在も残るが，平成25年出水市が掩体豪の調査・実測を行い，これらの活用を計画している。戦後は復興と共に経済成長と農地の圃場整備が行われ，工場誘致もおこなわれ，地元の雇用拡大につながった。行政区画の変遷として，昭和29（1954）年出水町・米ノ津町が出水市に，昭和34（1959）年高尾野町・江内村が高尾野町に，昭和50（1975）年野田村が野田町に，平成18（2006）年出水市・高尾野町・野田町が合併して新しい出水市となり現在に至る。

主要参考文献

出水市教育委員会1979『荏貝塚』出水市文化財調査報告書1
出水市教育委員会2000『出水貝塚』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書11
鹿児島県立埋蔵文化財センター2005『大坪遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（79）
鹿児島県教育委員会1998『北薩・伊佐地区埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅶ）』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書No. 73
出水市郷土史編集委員会2005『出水郷土史』上巻・下巻
野田町郷土誌編さん委員会 平成15年『野田町郷土誌』
高尾野町郷土誌編集委員会 平成17年『高尾野町郷土誌』
新人物往来社 昭和54年『日本域郡体系第18巻福岡・熊本・鹿児島』
山川出版社 2007年『県史46　鹿児島県の歴史』
角川書店 昭和58年『角川日本地名大辞典46鹿児島県』
鹿児島県企画部土地対策課1979年『土地分類調査北薩地域出水』

中郡遺跡群周辺遺跡１（1:25,000）

中都遺跡群周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	備考
1	竹林城跡	出水市高尾野町江内大牟礼	台地	中世	
2	川骨	出水市高尾野町江内	台地	縄文，古墳	H7分布調査
3	大牟礼	出水市高尾野町江内大牟礼	台地	弥生	
4	大牟礼城跡	出水市高尾野町江内尾崎	台地	中世	
5	東笠掛	出水市野田町下名屋地	台地	古墳～中世	
6	中林	出水市野田町下名中林	丘陵地	中世	
7	北山田	出水市野田町下名	台地	近世	
8	六枝	出水市野田町下名六枝	丘陵地	中世，近世	
9	中郡	出水市野田町下名中郡	台地	弥生	H21発掘調査　本報告
10	木牟礼城屋形跡	出水市野田町下名屋地ほか	丘陵地	中世	
11	大園	出水市野田町下名大園	台地	中世	
12	山内寺跡	出水市野田町下名中郡	台地	中世	
13	木ノ上城跡	出水市野田町下名中郡	丘陵地	中世	
14	堀上城跡	出水市野田町下名中郡	丘陵地	中世	
15	感応寺跡	出水市野田町下名八幡	台地	中世	
16	大島	出水市野田町下名瀬戸大島	台地	縄文，中世	
17	獅之城跡	出水市野田町下名獅之城	丘陵地	中世	
18	松ヶ迫A	出水市野田町下名松ヶ迫	丘陵地	縄文，近世	
19	野田島	出水市野田町下名田多園	台地	縄文～中世	H17発掘調査
20	春	出水市野田町下名下田多園	台地	古墳～中世	
21	松ヶ迫B	出水市野田町上名松ヶ迫	丘陵地	中世，近世	
22	桜ヶ城跡	出水市野田町上名桜ヶ城	丘陵地	中世	
23	茅迫	出水市野田町下名茅迫	丘陵地	縄文	
24	城内貝塚	出水市野田町上名城内	山麓緩斜面	縄文，中世	
25	亀井山城跡	出水市野田町上名本城	丘陵地	中世	H19～23発掘調査
26	新城跡	出水市野田町上名新城	丘陵地	中世	
27	上名遺跡群	出水市野田町上名	低地	中世	
28	下名遺跡群	出水市野田町下名	低地	縄文～中世	
29	湯ノ谷	出水市野田町上名湯ノ谷	丘陵地	縄文，古墳	
30	藤原	出水市野田町上名藤原	台地	縄文，近世	
31	荘貝塚	出水市荘下	台地	縄文，古代，中世	S48, S53, S63, H8発掘調査
32	荘下	出水市荘下	台地	縄文，古代，中世	
33	西下	出水市荘下	扇状地縁辺	古代，中世	
34	寺ノ下	出水市荘下	扇状地縁辺	古代，中世	
35	京牟礼	出水市野田町下名	丘陵地	古代～中世	
36	六田多	出水市野田町下名六田多	丘陵地	古墳，中世	
37	涼松	出水市野田町上名涼松	台地	近世	
38	大尾	出水市荘下	扇状地縁辺	縄文，中世	
39	桑水流	出水市荘下	扇状地縁辺	古代，中世	
40	荘上	出水市荘下	台地	中世	
41	荘上II	出水市荘下	台地	古代	
42	田洲	出水市荘下	扇状地縁辺	縄文，古墳	H9分布調査
43	堀ノ内	出水市荘下	扇状地	古代，中世	
44	下高尾野	出水市高尾野町下高尾野	台地	弥生	
45	外島	出水市荘下	台地	古墳～中世	H22発掘調査
46	宮田	出水市荘下	扇状地縁辺	平安，中世	
47	松ヶ角	出水市高尾野町唐笠木笠木	台地	古代	
48	小村	出水市荘上	扇状地	古代，中世	
49	松ヶ野	出水市高尾野町下高尾野	台地	縄文，古墳，中世	H7分布調査
50	出し道	出水市高尾野町唐笠木	台地	縄文，中世	H7分布調査
51	諏訪下	出水市高尾野町唐笠木	台地	縄文，中世	H7分布調査
52	放光寺	出水市高尾野町下高尾野放光寺	扇状地	縄文～古墳，中世	S49発掘調査
53	新城跡	出水市高尾野町下高尾野新城	河岸段丘	中世	H9測量実測調査
54	船迫	出水市高尾野町下高尾野高松	台地	縄文～弥生	
55	諏訪	出水市高尾野町唐笠木	台地	縄文～弥生	
56	横馬場	出水市高尾野町柴引・唐笠木	台地	縄文～弥生	
57	上石坂	出水市高尾野町下高尾野上石坂	丘陵地	近世	
58	柴引遺跡群 a	出水市高尾野町下高尾野・柴引	台地	縄文～弥生	H18発掘調査
59	芥田	出水市高尾野町下高尾野芥田	台地	古代，近世	
60	本迫	出水市高尾野町下高尾野本迫	台地	縄文，古墳，近世	
61	浦上	出水市高尾野町下高尾野浦上	台地	近世	
62	水天原	出水市高尾野町下高尾野水天原	台地	古墳，近世	
63	本城跡	出水市高尾野町下高尾野高城	台地	中世	
64	高尾野焼窯跡	出水市高尾野町下高尾野内野ノ下	山麓緩斜面	近世	
65	硬真瀬	出水市高尾野町下高尾野硬真瀬	台地	古墳，近世	
66	段の原	出水市高尾野町下高尾野段の原	山腹緩斜面	縄文，近世	
67	青木	出水市野田町上名青木	神積地	縄文，古代，近世	
68	上平田	出水市野田町上名上平田	神積地	古代，中世，近代	
69	受口A	出水市野田町上名	丘陵地	縄文	
70	受口獲	出水市野田町上名	丘陵地	縄文，近世	
71	大角鹿倉	出水市野田町上名	丘陵地	近世	
72	田神丸	出水市野田町上名	丘陵地	縄文	
73	野田川骨	出水市野田町下名	丘陵地	古墳，中世	
74	関木	出水市高尾野町江内	台地	古墳	
75	諏訪迫	出水市高尾野町江内	丘陵地	縄文	
76	諏訪山	出水市高尾野町江角南方	山腹緩斜面	古墳	
77	上冷鶴	出水市高尾野町上冷鶴	山腹緩斜面	縄文	
78	上殿	出水市高尾野町江内	山腹緩斜面	中世	

中尾・前原遺跡周辺遺跡２（1:25,000）

中尾・前原遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	備考
1	早松	出水市下鶴町早松東	丘陵	縄文古墳, 古代	
2	六反ヶ丸	出水市六月田町六月田下	低地	古代	
3	西神牟田	出水市浦田町西福ノ江		縄文, 近世	
4	新蔵	出水市福ノ江町新蔵上	台地	縄文	
5	西福ノ江	出水市福ノ江町福ノ江	海岸平野	縄文	
6	東福ノ江	出水市福ノ江町福ノ江	海岸平野	縄文	
7	長松寺	出水市福ノ江町福ノ江	低地	縄文	
8	中尾・前原	出水市福ノ江町福ノ江	平地	縄文	本報告
9	穴水	出水市下知識町津山		縄文	
10	西宮ノ脇	出水市下知識町津山	河岸段丘	古墳	
11	御堂	出水市下知識町上村西	台地	古墳, 中世	
12	桜穴	出水市平和町上村		縄文, 近世	
13	龍木園	出水市知識町上村東	台地	縄文, 古墳	
14	谷城跡	出水市下知識町上村西	台地	中世	
15	川原	出水市文化町上村東	台地	古墳, 古代	H24発掘調査
16	下都山	出水市文化町濃下	台地	縄文, 古墳	H24発掘調査
17	拝松	出水市下知識町上村		古墳	
18	濃下古墳群	出水市文化町399	台地	古墳	H12発掘調査
19	上松	出水市文化町上松	台地	縄文	
20	下藤川	出水市文化町濃下		古墳	
21	堀込	出水市知識町鹿島		中世	
22	北苫子	出水市平和町鹿島		縄文, 古代	
23	堀込	出水市知識町鹿島		縄文, 古代	
24	正八幡	出水市文化町山下	台地	縄文～古代	
25	西瀬	出水市文化町山下	台地	古代	
26	慶頭原	出水市文化町横尾	台地	古代	
27	山下	出水市文化町山下	台地	古代, 中世	
28	野中田	出水市文化町山下	台地	古代	
29	尾崎B	出水市中央町麦郷西	台地	縄文(後・晩), 古代～近世	H8報告
30	新村A	出水市文化町横尾	台地	古代	
31	尾崎A	出水市中央町麦郷西	台地	縄文(後・晩), 古代～近世	H8報告
32	新村B	出水市文化町横尾	台地	古代	
33	出水貝塚	出水市中央町尾崎	台地	縄文(早・中・後), 中世	T9, S29, H8～10発掘調査
34	尾崎城跡	出水市中央町尾崎	台地	中世	
35	西茶園堀	出水市上知識町茶園堀		古代	
36	八幡	出水市上知識町八幡	台地	古墳, 中世	
37	表郷東	出水市中央町表郷東	台地	中世	
38	堀込	出水市中央町西町	台地	古墳	
39	西瀧フリ	出水市西出水町政所		縄文	
40	山王西	出水市五万石町石坂	台地	古墳	
41	政所	出水市西出水町政所	台地	縄文, 古墳	
42	西堀	出水市西出水町西町		古代	
43	東野添	出水市武本野添		古代～中世	
44	田部町	出水市武本野添		縄文, 古代	
45	武本大坪B	出水市武本下中		縄文, 古代	
46	砂山	出水市武本下中・上屋		縄文, 古代	
47	岩重町	出水市西出水町花立西		縄文	
48	西牟田	出水市西出水町政所	台地	古墳	
49	並木ノ下西	出水市大野原町上大野原		縄文, 古代	
50	並木下	出水市大野原町上大野原	台地	古墳, 古代	
51	中通ノ上	出水市大野原町上大野原			
52	供養塚	出水市大野原町上大野原		古代, 近世	
53	休次郎町	出水市大野原町上大野原		古代	
54	下大野原下	出水市浦田町掛樋		近世	
55	金松	出水市平和町ゴルフ場北	台地	縄文(前), 古代～近世	
56	高見下	出水市平和町ゴルフ場内	台地	縄文	
57	兄玉迫	出水市大野原町下大野原		近世	
58	正論山	出水市大野原町西大野原		縄文, 古代	
59	会所	出水市大野原町東大野原		古代, 近世	
60	会所前	出水市大野原町東大野原		縄文	
61	論山	出水市大野原町下大野原		縄文, 古代	
62	丸岡	出水市大野原町下大野原	台地	縄文	
63	濃西	出水市高尾野町大久保字濃西ほか	台地	古代, 中世	
64	二百塚	出水市大野原町上大野原		古代, 近世	
65	太鼓橋	出水市大野原町太鼓橋	台地	縄文	
66	黒木迫	出水市高尾野町下水流字黒木迫ほか	低地	古墳, 中世	
67	三文路	出水市高尾野町下水流字三文路ほか	台地	縄文, 中世	
68	伊勢屋敷	出水市高尾野町上水流字伊勢屋敷ほか	台地	縄文（晩）	
69	早熟	出水市高尾野町上水流字早熟ほか	台地	古墳, 中世	
70	伊豆前	出水市高尾野町上水流字伊豆前ほか	台地	古墳, 中世	
71	焼山	出水市高尾野町上水流字焼山ほか	台地	古墳, 中世	
72	萬田山	出水市大野原町字萬田山ほか	台地	中世	
73	上大野	出水市高尾野町柴引字上大野ほか	台地	古代～中世	
74	ロノ坪	出水市高尾野町大久保字ロノ坪ほか	台地, 低地	古墳, 中世	
75	中里	出水市高尾野町柴引中里	河岸段丘	縄文, 弥生, 古墳, 近世	H5報告
76	下終迫	出水市高尾野町大久保	台地	縄文～古代, 近世	H17報告
77	甚ヶ下	出水市高尾野町大久保字甚ヶ下ほか	台地	縄文, 中世	

中郡遺跡群Ⅱ

第３章　中郡遺跡群の調査

第１節　調査の経過（日誌抄）

７月１日　調査区南側，重機による表土剥ぎ。プレハブ設置。
７月２日　発掘調査器材搬入。Ｄ－13・14区，人力による残土処理。
７月３日　雨天のため作業中止。
７月４日　Ｄ－13・14区，人力による掘り下げ。溝状遺構検出。
７月７日　雨天のため作業中止。
７月８日　Ｄ－13・14区，人力による掘り下げ。
７月９・10日　台風接近のため作業中止。
７月11日　Ｄ－13・14区，土坑検出。
７月14日　Ｄ－13・14区，人力による掘り下げ。
７月15日　Ｄ－13・14区，土層断面実測。
７月16日　Ｄ－13・14区，遺構検出。遺構写真撮影。
７月17日　Ｄ－13・14区，遺構検出及び実測。
７月18日　調査区北側，重機による表土剥ぎ。人力による残土処理と遺構検出。
７月22日　調査区北側，重機による表土剥ぎ。遺構検出。Ｄ－13・14区，Ｅ－13区掘り下げ。溝状遺構及び土坑検出。
７月23日　Ｄ－13・14区，Ｅ－13区掘り下げ。ピット検出。遺構写真撮影及び実測。
７月24日　Ｄ－13・14区，Ｅ－13区掘り下げ。遺構実測。調査区北側土層断面実測。発掘調査器材片付け。発掘調査終了。

第２節　調査の方法

１　調査の方法

今回は，平成21年度の調査の際に発掘調査ができなかった農道部分と未買収部分を調査対象区域とし，当時設定したグリッドを踏襲し調査を実施した。調査面積はＤ－13・14区，Ｅ－13・14区にわたる260㎡である。なお，今回の調査区域の北側には既に側道が建設されており，側道直近まで調査を実施したが，側道部分の調査は不可能であった。調査区域の南側については掘削深度が地表から３ｍに及んだことと湧水のための崩落の危険を回避するために段掘りを行った。また，今回の調査区域の西側部分は，平成21年度の発掘調査区域との間で未調査区域が生じないように農道部分よりも広く調査を実施した。

発掘調査は，道路建設工事と併行して行ったため，工事用道路の確保が必要となった。そこで，調査区域の南側半分の発掘調査を終了し，工事用道路の付け替えを行った後に北側半分の発掘調査を実施するように建設現場担当者と協議しながら進めた。

「中郡遺跡群」報告書の第３章第２節には「・・・遺跡内での地形に起伏が多く，一部には湧水のある低湿地も存在する・・・」とあり，第５章第５節では「・・・層堆積あの状況が不安定であり，また，造成や撹乱等が地山であるシラス まで至っている地点が多く，遺物包含層が残存しない箇所が多い。」と記述してある。今回の発掘調査の対象区域の大部分を農道が占めることや先の調査結果から遺物包含層の残存状況が悪いことから基本的に遺構検出を主な目的として調査を行った。特に，平成21年の調査で南北に走る堀跡１号の未調査部分が今回の調査区域となることから，堀跡１号の検出を主眼に調査を実施した。

まず，調査区域の南側半分は重機を使い，地山のシラスを目標に掘り進めた。重機でシラス上面まで掘り下げた後，人力で残土処理を行い，遺構検出を行った。重機で掘り進めるにあたっては，調査員が重機のバケットの動きを注意深く監視すると同時に土層の堆積状況を確認するための深掘りを併用しながら慎重に行った。調査区域の南半分が終了した後，北側半分の調査を実施した。

遺物については出土量が少なく，摩耗しているものが多かった。また，農道直下からもシラス直上からも土師器が出土したり，土師器と同レベルで現代の陶器が出土したりするなど出土遺物が原位置を保っていない可能性も考えられたため，遺物は層毎に一括で取り上げた。

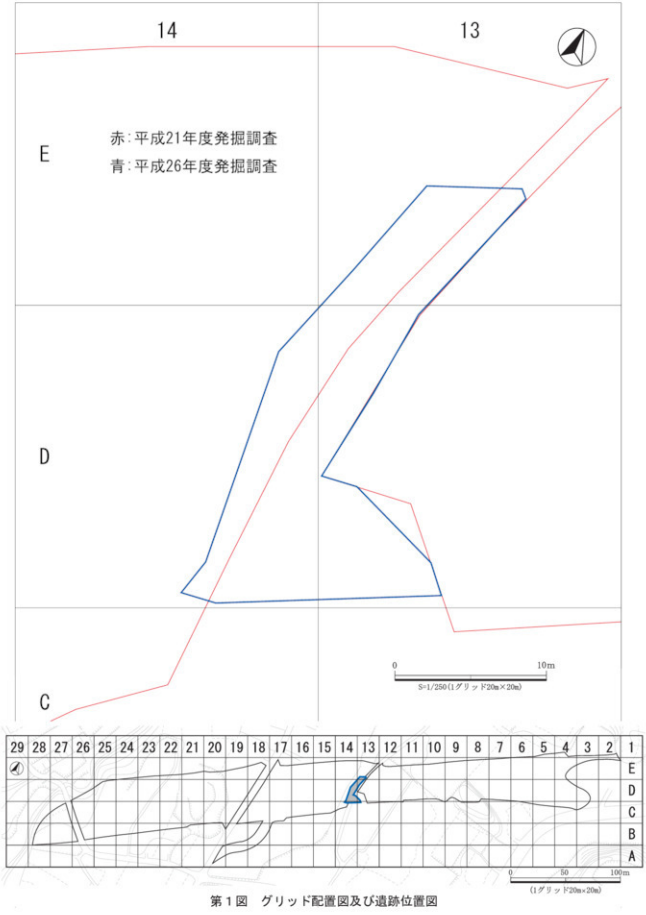
Ｄ－13区の南端部分では，シラス上面付近からの湧水と溜まった雨水を水中ポンプでくみ上げながら調査を行ったが，一部分は水没のため人力による掘り下げや遺構検出，地形測量は不可能であった。

２　遺構の認定と調査方法

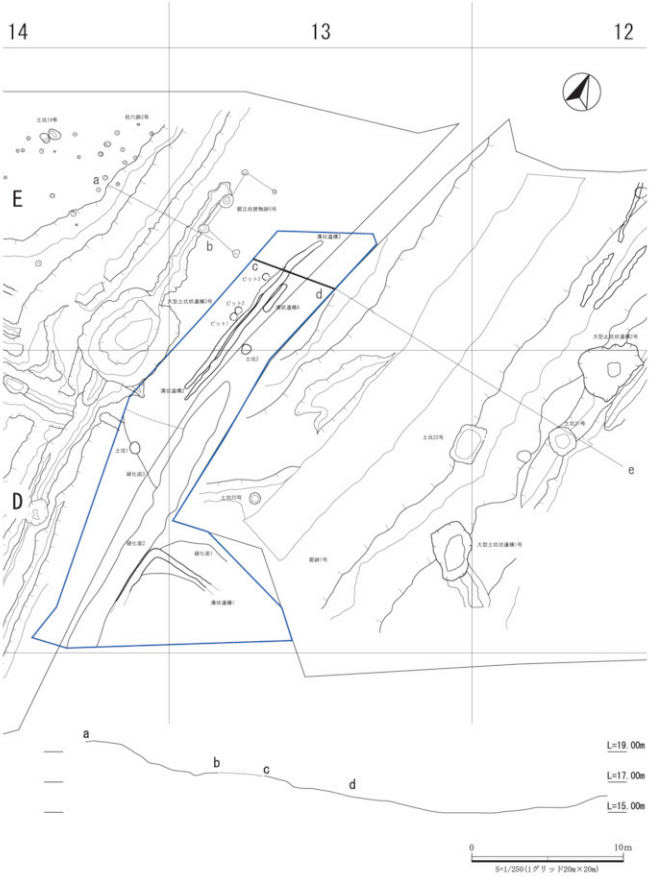
遺構の検出は，平成21年度の調査成果に基づきⅦ層（シラス）上面で行った。シラス上面まで重機で掘り下げた後，人力で残土処理及び精査を行い，シラス上面に黒茶褐色土が残る部分とシラス上面が堅く締まった部分を確認しながら行った。遺構の判定が困難なものについては，半裁したり遺構に直行するミニトレンチを設定したりして判断した。遺構名については「中郡遺跡群」報告書を参考にし，溝状遺構，ピット，土坑とした。遺構については，検出状況の写真を撮影，実測を行った。

第３節　層序

層序については「中郡遺跡群」報告書に示してある「堀跡・傾斜地等」の基本層序を参考とした。しかし，本遺跡を含む周辺の地形は全体的に西から東へ低くなる傾斜地であること，発掘調査区域が撹乱を受けた可能性の大きい農道の下面であること，さらに調査区域の一部からは湧水があることから発掘調査区域内には安定した地層が形成されていない。したがって，本遺跡の層序の全体像をつかむことは難しく「中郡遺跡群」報告書にあ



第１図　グリッド配置図及び遺跡位置図



第２図　周辺地形図及び遺構配置図

るような分層ができなかったことから，基本層序は第３図のとおりとした。

全体的には，表土下には褐色土（Ⅱ層）があり，その下はシラス（Ⅶ層）となる。土層断面で観察するとⅡ層は下位に行くほど色調が暗くなる傾向にあるが，その色調を明確に捉えられる程の差はなかった。また，Ⅱ層の褐色土の色調は場所により様々で，不規則に存在する。Ⅶ層のシラスは部分的に褐色土が混じる箇所もある。「中郡遺跡群」報告書で示されているⅡc層の黒色土に関しては，部分的に観察されるが，Ｄ－13区南側の湧水付近でシラスの上位層の黒色化が進む印象であった。シラス上面で検出した硬化面の下から黒曜石製の石鏃が出土したり，地山であるシラスに褐色土が混じる状況が見られたりするなど表層からシラス上面までが撹乱であったり造成が行われていたりした可能性がある。なお，調査区域の南側土層断面は，安全確保のために行った段堀により下部分のみ実測を行った。

第４節　調査の成果

１　調査の概要

本年度調査を実施した区域は，平成21年度に実施した中郡遺跡群の調査成果からすると南北に長軸が延びる堀跡１号の未調査部分にあたる。報告書では堀跡１号が何層検出なのかは記述がないが，周辺の遺構や直交する堀跡２号からⅦ層上面での検出と想定される。そこで，今回の発掘調査は調査期間や道路建設工事との調整を考慮して堀跡１号の検出を主な目的とした。堀跡を含めた遺構の検出はⅦ層のシラス上面で行い，遺物は一括で取り上げた。遺構としては，溝状遺構４条，ピット３基，土坑２基を検出した。遺物は44点を図化した。

２　遺構（第５図～第７図）

溝状遺構

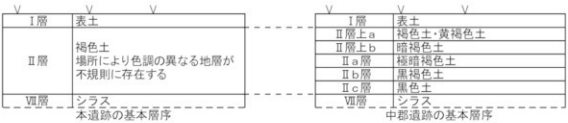
溝状遺構１は，Ｄ－13・14区で検出した。形状は，南北方向に約４ｍ北側で西方向へほぼ直角に折れ，約４ｍ延びる。南端と東端は湧水のため不明であるが，南北方向については，硬化面２の縁辺部を意識したかのように延び，東西方向は硬化面１を切っている。南北方向の幅は50～60㎝，深さ約20㎝で，東西方向では幅20～40㎝，深さ約15㎝となるが，東端では10㎝程度と浅くなる。埋土は黒褐色より少し暗い色調で，黒色土混じりのシラスであった。なお，埋土中から糸切り底の土師器が出土している。

溝状遺構２～４は，Ｅ－13区からＤ－13区で検出され，斜面にあるわずかな平坦面をほぼ南北に並行して延びる。埋土はいずれも黒褐色より若干白っぽい色調であった。

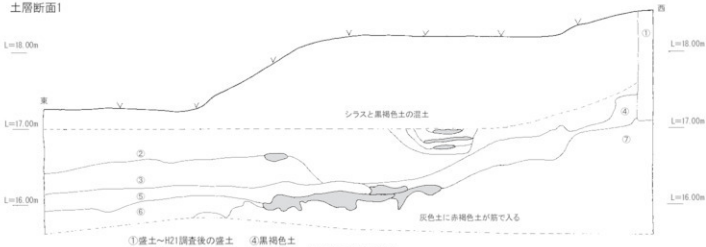
溝状遺構２はほぼ南北に10.４ｍ延び，幅は20～50㎝，深さ５～10㎝程度である。北側は溝状遺構３に切られていることから本来はもう少し延びていたと思われる。南端に近づくほど深さがなくなり，溝状遺構は周りの地形と同化していく。溝状遺構３の形状は，ほぼ南北に13.７ｍ延び，幅40～60㎝，深さ５～10㎝程度であった。埋土中から土師器の皿等の小片４点が出土した。溝状遺構３は溝状遺構２を切っており溝状遺構３の方が新しいが，形状や延びる方向等からそれほど時期差はないと思われる。溝状遺構４は長さ2.３ｍ，幅40～50㎝，深さ20㎝程度であった。ほかの溝状遺構と比較すると長さが短く，深さがあるが，溝状遺構３の縁を意識して造られ，形状が近いことから溝状遺構とした。

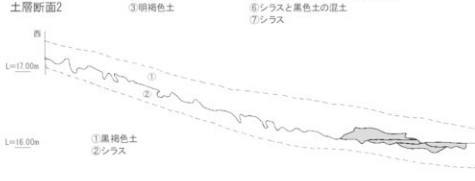
硬化面

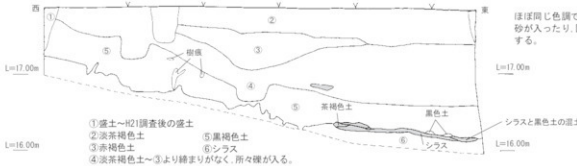
３条の硬化面を検出した。硬化面１・２は土を盛っているが，硬化面３は地山であるシラス上面が硬化している状況であった。硬化面２はＤ－14区からＤ－13区にかけて検出された。ほぼ南北に20ｍ，幅は1.５ｍから２ｍ程度であった。周辺と比較して色調が暗くなるか，黒褐色土が所々に残り，固く締まっている。北端部は徐々に細くなり消滅するが，南端部は調査区外に延びていく。土層断面からはシラスの上に数回土を盛ってあり，その後硬化していったことが伺える。硬化面１の下面とシラス上面に挟まれるように安山岩製の石鏃が出土した。硬化面３はＤ－14区で検出された。東西方向に５ｍ，幅が２ｍ程度であった。硬化面の周辺は黒色を呈する土であるが，その上に薄く盛ったシラスが硬化している状況である。硬化面１と比較すると周辺の水はけが悪いため硬化の度合いは低い。硬化面１と硬化面２の切り合い関係については，溝状遺構１が間に介在することと周辺の水はけが悪く十分観察できないことから断定できない。硬化面３は硬化面２の西側にかけて見られた。硬化面３は土を盛って硬化面を造り出しているのではなく，シラス上面が伝統的な民家の土間に似た感じで多少凹凸を持ちながら硬化している。硬化面３は硬化面１から更に地形

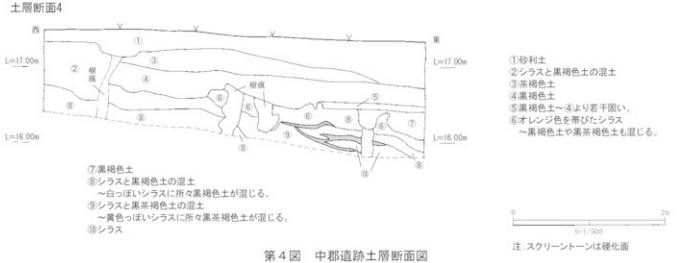


第３図　基本層序



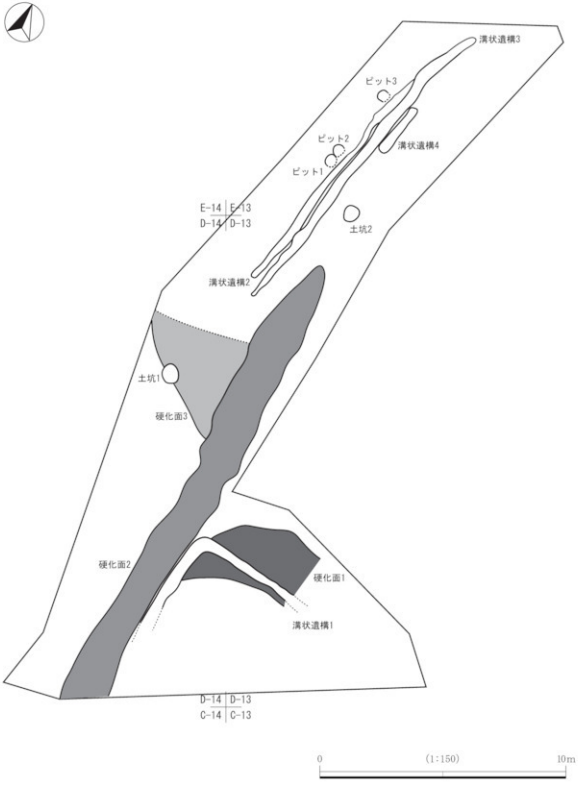




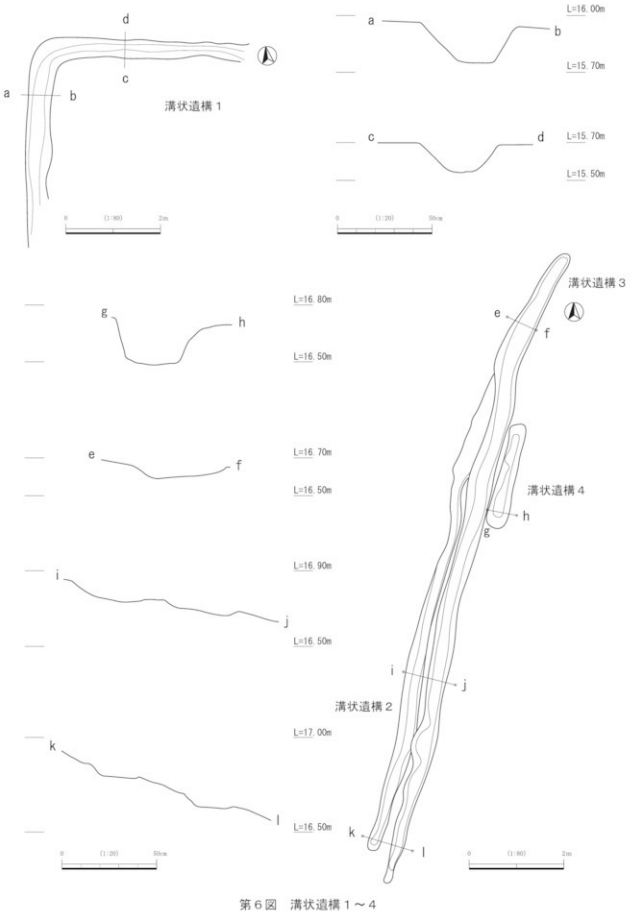


注：スクリーントーンは硬化面

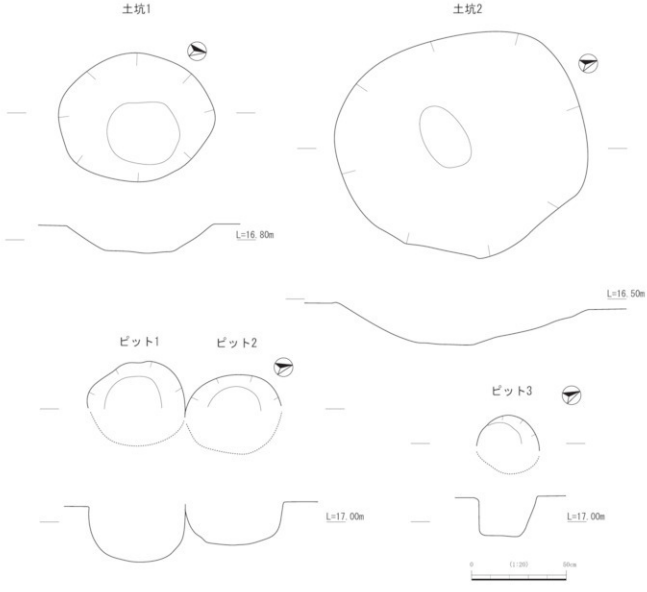
第４図　中郡遺跡土層断面図


溝状遺構3
ピット3
ピット2
溝状遺構4
ピット1
E-14 E-13
D-14 D-13
土坑2
溝状遺構2
土坑1
硬化面3
硬化面2
硬化面1
溝状遺構1
D-14 D-13
C-14 C-13
0
(1:150)
10m

第５図　遺構配置図


溝状遺構１
溝状遺構２
溝状遺構３
溝状遺構４
a
b
c
d
e
f
g
h
i
j
k
l
L=16.00m
L=15.70m
L=15.70m
L=15.50m
L=16.80m
L=16.50m
L=16.70m
L=16.50m
L=16.90m
L=16.50m
L=17.00m
L=16.50m
0 (1:80) 2m
0 (1:20) 50cm

第６図　溝状遺構１～４

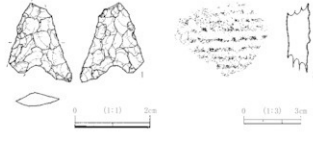


第７図　土坑１号・２号及びピットNo.１～No.３

の高い所へ同じ場所を日常的に通路として使っていたために一定の範囲が硬化したものと思われる。ただ，この硬化面３の北側のラインについては事前の地層確認の深掘り部分と重複したため確認できなかった。

ピット

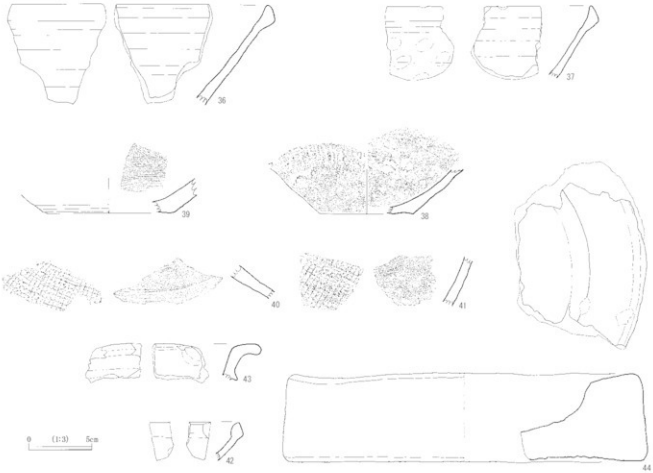
３基のピットがＥ－13区の地形が段状になっている縁辺部で検出されたため，上部が半裁された形での検出となった。ピット１・２の径は50cm程度，ピット３は35cm，深さは20～30cm程度であった。埋土は黒褐色より白っぽい色調であった。ピット２からは土師器の皿と思われる小片が４点出土した。ピット３の埋土中からは白磁の小



第８図　縄文時代の遺物

3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
0 (1:3) 5cm

第９図　中・近世の遺物（１）



第10図　中・近世の遺物（２）

片が出土した。ピット１と２は隣り合わせて検出され，ピット１がピット２を切っている。

土坑１

土坑１はD－14区，土坑２はE－13区とD－13区をまたいで検出された。土坑１は長径85cm，短径70cm，深さ15cmで，土坑２は長径1.35m，短径1.2m，深さ20cmを測る。埋土はいずれも黒褐色土で，埋土中からの遺物は確認されなかった。

３　遺物（第８図～第10図）

本遺跡からは主に中世の遺物が出土し，その中で44点を図化した。土師器の出土が多かったが，ほとんどが小片で磨耗している。図化した遺物以外に黒曜石の剥片が4点，青磁が10数点，常滑焼きの陶器片の出土があった。そのほか瀧摩焼や現代の陶器等も出土した。また，厚い錆に覆われた鉄製品も４点及び鉄滓１点も出土した。鉄製品はX線写真を撮影したが，時代等の特定までは至らなかった。１は基部に抉りが入る打製石鏃でD－13区の硬化面１と下層のシラス面に挟まれるように出土した。石材は安山岩で先端部と片足を欠損している。２は磨耗が激しく，部位等も明確ではないが，貝殻腹縁部による押し引きを施した縄文時代早期の中原式土器と思われる。３～７は，体部を短く引き出した土師器の皿である。３は体部が丸みを帯び立ち上がる。底部切り離しの糸切り痕が残り，内面に煤が付着している。溝状遺構１から出土した。４は体部が直線的に立ち上がり，回転ナデにより見込み周辺部と中央部が凹む。糸切り痕が残り，器面調整は丁寧である。５は回転ナデにより見込み周辺部が凹み，糸切り痕が残る。体部下端に段がある。６の体部はやや直線的に延び，回転ナデより見込み周辺部が若干凹む。体部下端に段があり，切り離しの糸切り痕が残る。７の体部はやや外反する。底部の切り離しは判然としないが，糸切りと思われる。８～26は，体部の形状等が不明なものがあるが，坏として扱った。８の体部は丸みをもって立ち上がる。切り離しの糸切り痕が残る。内外面の一部に煤が付着している。９の底部切り離しは糸切りによるものである。10の体部はやや丸みをもって立ち上がり，体部と底部の境も丁寧な調整が施されている。底部外面の磨耗が激しいが，糸切り痕が微かに残る11・12・15・18・23・25は糸切り痕が確認できる。13の底部は厚く，体部は内湾気味に立ち上がる。14の底部切

り離しは糸切りによるものであるが，調整が極めて雑である。内面見込み中央部が凹む。16は磨耗しているが糸切り痕が残り，体部下端の調整は粗い。17の外面には煤が付着し，内面見込み中央部が幾分凹む。19は体部が丸味をもって立ち上がる。20は磨耗しているが，内面見込みの調整痕，切り離しの糸切り痕が残る。24の底部切り離しは磨耗により明確ではないが，糸切りによるものと思われる。26の体部は直線的に立ち上がる。27～31は龍泉窯系青磁碗である。27～30は口縁部で，外面に鎬連弁文がある。28は溝状遺構3から出土し，29はピット3から出土した。31は高台が方形状で，畳付及び高台内面は露胎する。32～35は口禿口縁をもつ白磁の皿である。34の胎土は他のものより若干青みがかり，器面も粗い。36～39は瓦質土器である。36・37は東播系の捏鉢で，口縁部が肥厚し，黒灰色を呈し，口唇部は若干内湾する。内外面とも刷毛目状の調整で，37には指頭圧痕も観察される。38も捏鉢であるが，鈍い黄橙色を呈し，内外面とも調整が粗い。39は擂鉢で，灰色を呈し，外面調整は磨耗しているため不明である。40・41は樺方丈系の須恵器である。いずれも外面に格子目状のタタキ痕を，内面にはナデ調整痕が残るが，41には刷毛目状の調整痕も観察できる。42・43は中国陶器の口縁部である。42は口縁部を肥厚させ，内面に黄釉を施した擂鉢である。灰色の胎土で白色粒を含む。43は口縁部が強く外反し，口縁部の下に三角状の突帯をもつ。オリーブ灰の釉を施釉しているが，口縁内部は口縁に沿って釉を掻き取っている。44は砂岩製石臼の一部である。復元口径は29cmを測る。底部には磨面による溝が残る。

第１表　中都遺跡石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	取上番号	種別	器種	部位	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
8	1	D-13	Ⅱ		打製石斧			安山岩	2.2	1.7	3.1	0.8	
10	44	－	Ⅱ		石臼			砂岩	10.0	15.0	7.0	1100.0	復元径　29cm

第２表　中都遺跡遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	取上番号	種別	器種	部位	器面調整		色調		法量(cm)			胎土				備考
								外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃石	他	
8	2	－	Ⅱ	－1区	縄文土器	－	－	貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	－	－	－	－	○		雲母	中期式
9	3	D-14	溝状遺構1	－	土師器	皿	口縁～底部	回転横ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	9.3	7.3	1.7	－	○	○		糸切り　煤付着
	4	－	Ⅱ	－	土師器	皿	口縁～底部	回転横ナデ	回転横ナデ	灰褐	灰褐	8.4	7.4	1.4		○	○	雲母	糸切り
	5	－	Ⅱ	－	土師器	皿	口縁～底部	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	9.3	7.8	1.2	○	○	○	雲母	糸切り
	6	－	表土	－	土師器	皿	口縁～底部	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	7.2	6.6	1.6	○	○	○	雲母	糸切り
	7	－	Ⅱ	－	土師器	皿	口縁～底部	回転横ナデ	回転横ナデ	灰褐	灰褐	7.6	6.4	1.9	○	○	○		糸切り
	8	－	Ⅱ	－1区	土師器	坏	胴部～底部	回転横ナデ	回転横ナデ	灰褐	灰褐	－	10.2	－	○			火山ガラス　黒曜石	糸切り　煤付着
	9	－	Ⅱ	－	土師器	坏	底部	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	－	10.6	－	○	○	○	茶粒	糸切り
	10	－	Ⅱ	－1区	土師器	坏	底部	回転横ナデ	回転横ナデ	橙	橙	－	9.2	－	○			火山ガラス　茶粒	糸切り
	11	－	Ⅱ	－	土師器	坏	底部	回転横ナデ	回転横ナデ	橙	橙	－	9.6	－	○		○		糸切り
	12	－	Ⅱ	－1区	土師器	坏	底部	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	－	9.4	－	○		○		糸切り
	13	－	Ⅱ	－	土師器	坏	底部	回転横ナデ	回転横ナデ	橙	橙	－	7.0	－	○		○	茶粒	糸切り
	14	D-13	Ⅱ	－1区	土師器	坏	底部	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	－	8.6	－	○		○		糸切り
	15	－	Ⅱ	－	土師器	坏	底部	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	－	9.0	－	○			火山ガラス	糸切り
	16	－	Ⅱ	－	土師器	坏	底部	回転横ナデ	回転横ナデ	橙	橙	－	8.6	－	○		○	火山ガラス　雲母	糸切り
	17	－	Ⅱ	－1区	土師器	坏	底部	回転横ナデ	ナデ	橙	橙	－	8.0	－	○		○	火山ガラス　雲母	糸切り　煤付着
	18	－	Ⅱ	－1区	土師器	坏	底部	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	－	8.0	－	○		○	火山ガラス	糸切り
	19	－	Ⅱ	－	土師器	坏	底部	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	－	8.8	－	○		○	チャート　赤色鉱物	糸切り
	20	－	Ⅱ	－	土師器	坏	底部	回転横ナデ	回転横ナデ	橙	橙	－	8.2	－	○	○	○	雲母	糸切り
	21	－	表土	－	土師器	坏	底部	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	7.6	7.6	－	○			雲母	糸切り
	22	－	Ⅱ	－1区	土師器	坏	底部	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	－	8.0	－	○		○	火山ガラス	糸切り
	23	D-13	Ⅱ	－	土師器	坏	底部	回転横ナデ	ナデ	橙	橙	－	8.0	－	○			火山ガラス　茶粒	糸切り
	24	－	Ⅱ	－1区	土師器	坏	底部	ナデ	ナデ	橙	橙	－	7.0	－	○				糸切り
	25	－	Ⅱ	－	土師器	坏	底部	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	－	7.6	－	○	○		黒色鉱物　茶粒	糸切り
	26	－	Ⅱ	－	土師器	坏	底部	回転横ナデ	回転横ナデ	灰褐	灰褐	－	6.4	－	○			黒色鉱物　火山ガラス	糸切り
	27	－	表土	－	青磁	碗	口縁部	青磁釉	青磁釉	灰オリーブ	灰オリーブ	16.0	－	－					鎬連弁文
	28	－	溝状遺構3	－	青磁	碗	口縁部	青磁釉	青磁釉	オリーブ灰	オリーブ灰	－	－	－	－	－	－		鎬連弁文
	29	－	ピット3	－	青磁	碗	口縁部	青磁釉	青磁釉	明緑灰	明緑灰	－	－	－	－	－			鎬連弁文
	30	－	Ⅱ	－	青磁	碗	口縁部	青磁釉	青磁釉	オリーブ灰	オリーブ灰	－	－	－					鎬連弁文
	31	－	Ⅱ	－	青磁	碗	胴部～底部	青磁釉	青磁釉	オリーブ灰	オリーブ灰	－	5.6	－					
	32	－	Ⅱ	－	白磁	皿	口縁部	透明釉	透明釉	灰白	灰白	11.4	－	－					口禿
	33	－	Ⅱ	－	白磁	皿	口縁部	透明釉	透明釉	灰白	灰白	10.4	－	－					口禿
	34	D-14	Ⅱ	－	白磁	皿	口縁部	透明釉	透明釉	灰白	灰白	10.4	－	－					口禿
	35	－	Ⅱ	－	白磁	皿	口縁部	透明釉	透明釉	灰白	灰白	9.8	－	－					口禿
10	36	－	表土	－	瓦質土器	捏鉢	口縁部	ハケメ	ハケメ	灰	灰	－	－	－	○				東播系
	37	－	Ⅱ	－	瓦質土器	捏鉢	口縁部	ハケメ	ハケメ	灰	灰	－	－	－	○		○		東播系　指頭圧痕
	38	－	Ⅱ	－	瓦質土器	捏鉢	胴部～底部	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	7.4	－	○		○		
	39	－	Ⅱ	－	瓦質土器	擂鉢	底部	－	－	灰白	灰白	－	10.5	－	○		○		
	40	－	Ⅱ	－	須恵器	壷	胴部	格子状タタキ	ナデ	灰	灰	－	－	－	○			黒色鉱物	樺方丈系
	41	－	Ⅱ	－1区	須恵器	壷	胴部	格子状タタキ	ハケメ	灰	灰	－	－	－	○				樺方丈系
	42	－	Ⅱ	－	中国陶器	擂鉢	口縁部	－	－	浅黄	暗赤褐	－	－	－	○				
	43	－	Ⅱ	－1区	中国陶器	擂鉢	口縁部	鉄釉	鉄釉	オリーブ灰	オリーブ灰	－	－	－	○				

第５節　総括

本遺跡の調査では，遺構の検出，とりわけ平成21年度の発掘調査で堀跡１号とされた遺構の未調査部分の検出を主な目的で行った。調査の結果，溝状遺構，ピット，土坑等が検出されたが，堀跡１号を積極的に補強する成果はなかった。また，出土遺物も調査範囲の狭さに比例して少量であり，平成21年度及び平成24年度の調査成果を逸脱するようなことはなかった。全体的には13世紀末を中心とした遺物が主で，遺構もこの時期に比定されると思われる。

１　遺構

平成21年度の調査結果に基づいてⅡ層を包含層として取り扱って調査を実施した。しかし，Ⅱ層からは縄文土器をはじめ現代の陶器まで確認されることからⅡ層自体も原位置は保っていないことも考えられる。硬化面１・２はⅦ層のシラスの上に土を盛って造られている。土層断面からは数回にわたって土を盛っていることも観察される。硬化面３はⅦ層のシラス上面を踏み固めたものである。溝状遺構２・３は，Ⅶ層上面のわずかな平坦面に段差を意識して造られている。これらのことから，溝状遺構や硬化面は，Ⅶ層のシラス面が剥き出しになった状況で造られていると思われる。さらに，土層断面を観察すると場所によってはⅡ層とⅦ層に明確な境や違和感はなく自然堆積を伺わせるが，地山であるシラスにミニトレンチを入れて観察するとシラスの中に黒褐色土が水平かつ筋状にはいる所もある。つまり，ある時期にシラス面までの削り出しと場所によっては盛土が行われたと考えられる。その後Ⅱ層と思われる褐色土等が何度かにわたって盛られ，部分的には通路等に利用されている痕跡が土層断面から観察される。今回の調査範囲は平成21年度の調査で検出された南北に延びる堀跡１号の未調査部分に該当するが，特筆すべき堀跡１号に関する新たな成果はなかった。「中郡遺跡群」の報告書によると堀跡２号は幅５ｍのほぼ逆台形に近い形状であるが，堀跡１号は幅50ｍと規模が大きく，堀の東西側の立ち上がりも明確でない。E－13・14区の地形断面をほぼ東西方向に比較すると第２図のとおりとなる。調査に時間的な隔たりがあり，地形断面を直線的に観察及び実測していないことから多少の誤差があるとしても，堀跡1号の西側斜面は起伏を伴いながら東側へなだらかに約５ｍ下り，堀跡２号の形状とは大きく異なる。調査区域内を西から東へ下る傾斜面は堀とは異なる目的で造成されたことは十分考えられる。なお「中郡遺跡群」の報告書で堀跡１号は，調査区域の北側へ延びることを想定してある。しかし，堀跡１号の北側に隣接する側道の法面に露頂していた土層断面を観察すると水糸やビニール片が混入した最近のシラス採りの工事跡しか確認できなかった。地山のシラス層まで大きく掘削されていることで堀跡1号の北側隣接部分についての検証は困難であるが，南側については調査区域外に延びることから今後機会があれば検討が必要である。堀跡２号については，平成21年度の調査成果に関連するような遺構は確認されなかった。土坑及びピットの性格等については把握できなかった。

２　遺物

本遺跡からは土師器，青磁，白磁，東播系・樺万丈系の須恵器，中国産陶器，石臼等が出土した。その中でも出土点数の多いのが土師器であり，ほとんどが小片で磨耗が激しい。皿は体部を短く引き出す成形に特徴がある。底部の切り離しは，磨耗して判然としないもの以外は糸切り技法による。坏は口縁部から底部まで残存しているものがなく，詳細は不明である。また，1/4程度残存している石臼が1点出土した。復元口径及び高さのほぼ同じ石臼が「上水流遺跡２」（鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書121）に示されている。

参考文献

「中郡遺跡群」　埋文調査センター発掘調査報告書（1）2014

「野田畠遺跡」　出水市埋蔵文化財発掘調査報告書（18）2007

「梨引ａ遺跡」　出水市埋蔵文化財発掘調査報告書（15）2006

「上水流遺跡２」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（121）2008

中 尾 遺 跡

第４章　中尾遺跡の調査

第１節　調査の経過（日誌抄）

調査の経過については，調査日誌をもとに主な出来事を記していきたい。

4月10日出水市で作業員募集説明会。

19日機材等の入札。

5月9・10日プレハブ等の設置と物品搬入・重機による表土剥ぎ

13日調査開始・オリエンテーション実施・機材搬入・環境整備・重機による表土剥ぎ

20日D・E－6～7区Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ，遺構検出と写真撮影

22日D・E－6・7区でピット検出と実測

6月5日B・C－5～7区Ⅲ層掘り下げ

11日A～C－6・7区で土坑検出，写真撮影

13日D・E－1～3区土層の横転検出

18日土坑実測

25日A～E－1～4区Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ

7月1日大雨により調査区が冠水し，排水作業を行う。

隣接する前原遺跡の調査も開始。

9日B・C－2・3区Ⅲ層掘り下げ，地形図作成

11日ベルトコンベアを撤去，土坑の完掘と実測

24～26日埋め戻し調査終了

第２節　調査の方法

1　調査の方法

調査に先立ち，本調査区内にある国土交通省の設置した道路建設用センター杭の№60と№61を基準に，調査区内に10m間隔の区画を設定し，北から南へA・B・C・D・・・・列，西から東へ1・2・3・4・・・・列と呼称した。調査は調査区域の表土を重機で剥ぎその後，人力（山鍬，ジョレン，ねじり鎌等）で掘り下げ，調査を行った。

第３節　層序

基本層位は以下のとおりである。なお，沖積地の土層は台地上の土層と異なり，当時の表層の状態や湧水の有無によって同じ時期の土層でも色調・土質が異なることがある。例えば，水が表土に溜まっているところとそうでないところでは同じ時期に堆積していても色調や土質が異なる場合がある。また植えられた植物によっても土質がかわる可能性がある。また，耕作や削平・植樹によりA～F－6～8区は一部にⅢ層の堆積がみられたほかはⅠ層の下位にあるべきⅡ～Ⅶ層は削平をうけており，その下層はⅧ層であった。また，その他の調査区も消失した層が多くみられた。

Ⅰａ層：灰褐色土。表土1～10cmの礫を含む。

Ⅰｂ層：褐灰色土。耕作土1～2cmの礫と5mm以下のパミスを含む。各時代の遺物が耕作土に攪乱された状態で出土する。

Ⅱ層：黒褐色の腐植土。粒子が細かいいわゆる黒ボク土。

Ⅲ層：暗褐色砂質土。褐色粘土をブロック状に含む。縄文時代晩期の包含層。耕作や削平

Sk－1周辺のC－5～8区付近のみに残存する。

Ⅳ層：にぶい黄橙色土。1～5cmのパミスを含む。しまりはあるが，削るとブロックで剥がれる。調査区の西半分に残存する。

Ⅴａ層：黒褐色土。

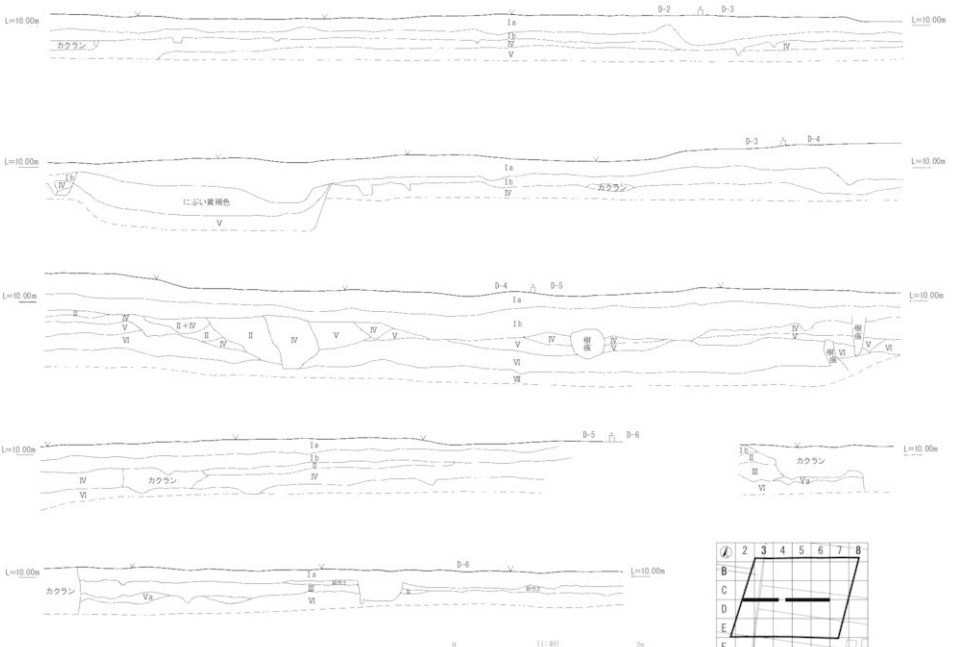
Ⅴｂ層：浅黄橙色土。a・bの差異がはっきりしない箇所が多い。

Ⅵ層：黒褐色粘質土。

Ⅶ層：灰オリーブ色粘質土。水分を多く含み，河川や窪地への流水作用によって堆積したと考えられる。

Ⅷ層：明黄褐色土。シラスの二次堆積。湧水が見られる。

第１図　調査区及びグリッド配置図



第２図　中尾遺跡土層断面図

第４節　調査の成果

縄文時代の成果

土坑１号（第４図）

検出状況　Ｃ－６・７区のⅦ層面で検出された。検出状況時は土器片が散乱して出土していた。東側は一部現代の攪乱を受けている。

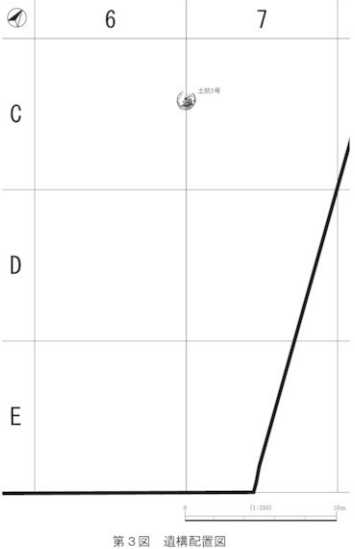
形状・規模　土坑の北側は一部現代の攪乱を受けているものの，直径120㎝のほぼ円形を成している。掘り込みの深さは検出面から28㎝である。

埋土　埋土は黒褐色でしまりはなかった。

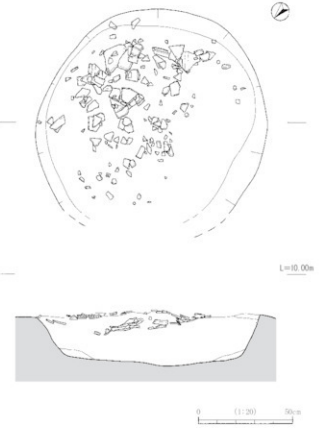
遺物　土坑内からの出土遺物のほとんどは，埋土上面（検出時）から出土している。土器片149点，石器100点が出土した。そのうち土器17点，石器30点を図化した。

土器　１は，口縁部が直口気味でわずかに外反し，胴部は『く』の字状に屈曲する。屈曲部には帯状の煤がみられる。横方向の貝殻条痕を施したのち，ナデで器面調整される。２は，半粗半精の浅鉢である。外面が横方向の貝殻条痕，内面が横方向のミガキである。外面には厚く煤が付着する。胎土には雲母が目立つ。７・８は深鉢の口縁部がわずかに外反する。外面には沈線，内面は横ナデで調整される。胎土に，角閃石・1㎜大の白色粒を多く含む。これらは同一個体と考えられる。９は胴部が緩やかに膨らみ，器面調整は，外面は貝殻条痕，内面が横ナデ調整である。なお，外面口縁部下位に煤が付着する。10は深鉢形土器の底部である。にぶい橙色を呈し，雲母や１㎜大の赤色鉱物を含む。

12～17は黒色磨研の浅鉢である。器面内外面共にミガキが施されており，口縁部の断面は玉縁状を呈する。いずれも丸底もしくはそれに近い形態であると考えられる。12・13は肩部が『く』の字状に内側へ屈曲し，頭部は大きく外反する。14は頭部がなく口唇部に至る。15～17は，頭部は大きく外反するが，肩部は丸く内湾する。

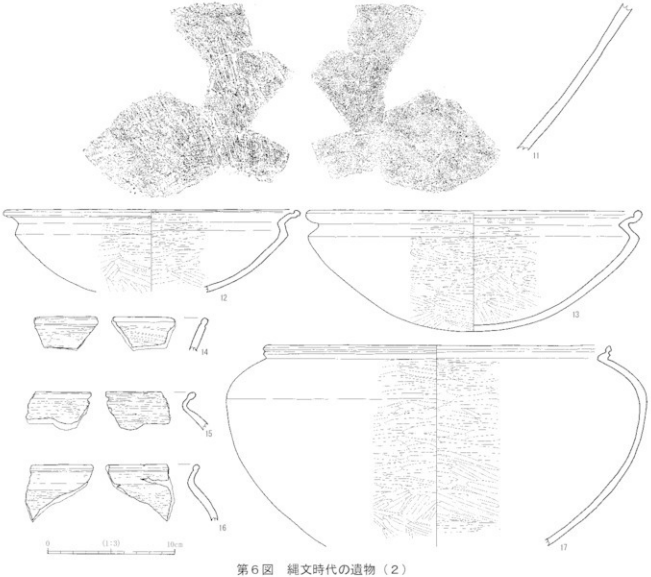


第３図　遺構配置図



第４図　縄文時代の土坑１号及び出土遺物

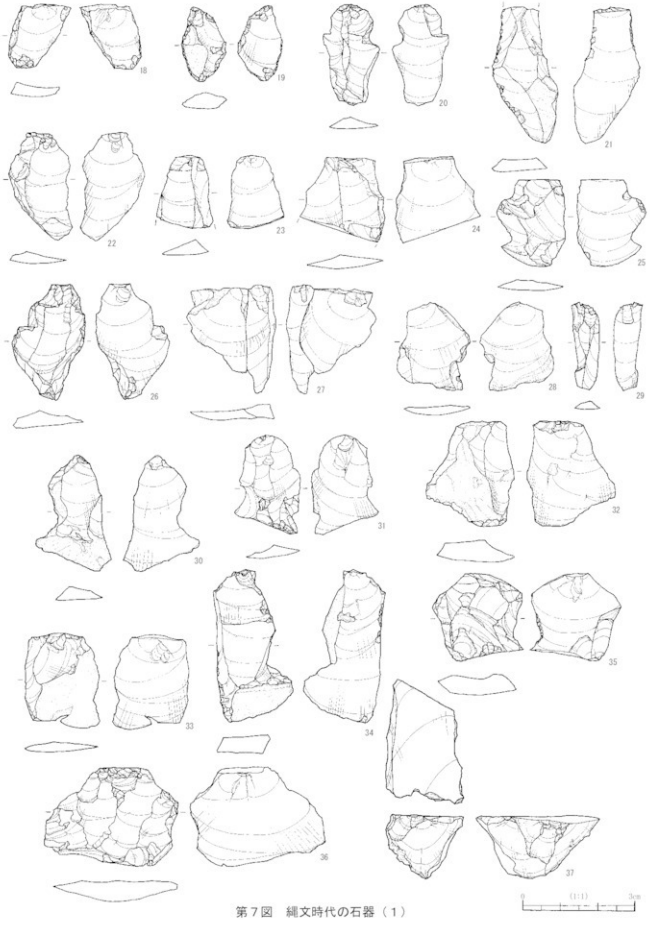
第５図　縄文時代の遺物（１）



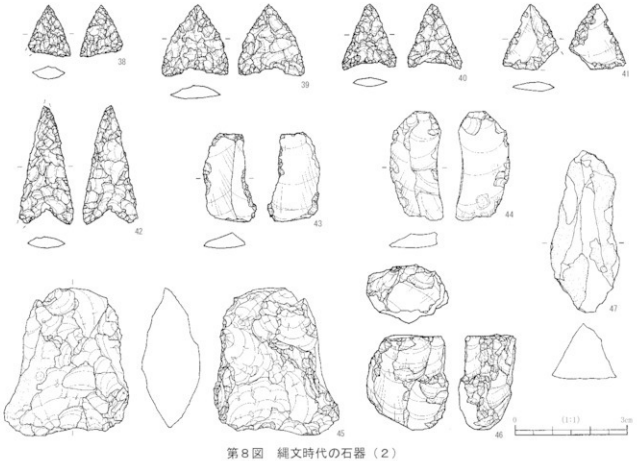
第６図　縄文時代の遺物（２）

第１表　中尾遺跡土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	取上番号	種別	器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	色調 外面	色調 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 他	備考
5	1	SK-1	Ⅰ	146・148・143・88・76・91・128	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕	工具ナデ	明黄褐色	にぶい黄褐色	28.0	－	－	○	○	○	砂粒・赤色粒・雲母	煤付着
	2	SK-1	Ⅰ	131	縄文土器	浅鉢	口縁部	貝殻条痕	ミガキ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	47.4	－	－	○	○		赤色粒・雲母	煤付着
	3	SK-1	Ⅰ	－	縄文土器	浅鉢	口縁部	ナデ	ミガキ	橙色	橙色	－	－	－	○	○	○	赤色粒・礫	
	4	SK-1	Ⅰ	68	縄文土器	浅鉢	口縁部	工具ナデ	ナデ　ミガキ	橙色	にぶい黄褐色	－	－	－					
	5	SK-1	Ⅰ	97	縄文土器	浅鉢	口縁部	工具ナデ	ナデ　ミガキ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	－	－	－	○	○		赤色粒	
	6	SK-1	Ⅰ	17	縄文土器	深鉢	口縁部	工具ナデ	ナデ	明黄褐色	にぶい黄褐色	－	－	－	○	○	○	赤色粒	
	7	SK-1	Ⅰ	129	縄文土器	深鉢	口縁部	ナデ	横ナデ	橙色	橙色	－	－	－	○	○	○	砂粒・赤色粒	
	8	SK-1	Ⅰ	78・96	縄文土器	深鉢	口縁部	横ナデ	横ナデ	橙色	橙色	－	－	－	○	○	○	赤色粒・礫	
	9	SK-1	Ⅰ	23・85・123・124・134	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	貝殻条痕	横ナデ	にぶい黄褐色	橙色	23.8	－	－	○	○	○	赤色粒・礫・雲母	煤付着
	10	SK-1	Ⅰ	－	縄文土器	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	－	10.0	－	○	○		赤色粒・雲母	
6	11	SK-1	Ⅰ	20・126・136・60・59	縄文土器	深鉢	胴部	工具ナデ	工具ナデ	明黄褐色	にぶい黄褐色	－	－	－	○	○	○	赤色粒・雲母	
	12	SK-1	Ⅰ	125・127・54・70・149・104・116・119・146・120・98・37・148	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	工具ナデ　ミガキ	工具ナデ　ミガキ	にぶい黄橙色	浅黄色	23.5	－	－	○	○	○		
	13	SK-1	Ⅰ	138・139・63・115・131・144・75	縄文土器	浅鉢	口縁～底部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	浅黄色	26.7	－	9.6	○	○	○	赤色粒・雲母	
	14	SK-1	Ⅰ	39	縄文土器	浅鉢	口縁部	工具ナデ　ミガキ	工具ナデ　ミガキ	橙色	橙色	－	－	－	○	○	○	赤色粒	
	15	SK-1	Ⅰ	－	縄文土器	浅鉢	口縁部	横ナデ　ミガキ	横ナデ　ミガキ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	－	－	－					
	16	SK-1	Ⅰ	－	縄文土器	浅鉢	口縁部	横ナデ　ミガキ	横ナデ　ミガキ	浅黄色	にぶい黄橙色	－	－	－	○	○		赤色粒・雲母・砂礫	
	17	SK-1	Ⅰ	－	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	ナデ　ミガキ	ナデ　ミガキ	明黄褐色	にぶい黄橙色	27.7	－	－	○	○		赤色粒・雲母	



第７図　縄文時代の石器（１）



第８図　縄文時代の石器（２）

第２表　中尾遺跡石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
7	18	SK-1	-	二次加工剥片	ob_腰岳	1.72	1.66	0.52	1.13	
	19	SK-1	-	二次加工剥片	ob_腰岳	2.01	1.17	0.44	0.77	
	20	SK-1	-	剥片	ob_腰岳	2.61	1.50	0.60	1.20	使用痕剥片
	21	SK-1	-	剥片	ob_腰岳	3.55	1.78	0.51	1.96	
	22	SK-1	-	剥片	ob_腰岳	2.85	1.72	0.61	1.13	
	23	SK-1	-	剥片	ob_腰岳	1.93	1.51	0.52	0.95	
	24	SK-1	-	剥片	ob_腰岳	2.21	2.27	0.42	1.73	礫打面 折断剥片
	25	SK-1	-	剥片	ob_腰岳	2.30	1.81	0.44	1.08	
	26	SK-1	-	剥片	ob_腰岳	3.17	1.97	0.55	1.99	
	27	SK-1	-	剥片	ob_腰岳	2.91	2.41	0.61	1.91	
	28	SK-1	-	剥片	ob_腰岳	2.33	1.92	0.27	0.95	
	29	SK-1	-	剥片	ob_腰岳	2.35	0.73	0.24	0.30	
	30	SK-1	-	剥片	ob_腰岳	3.08	1.95	0.50	1.77	
	31	SK-1	-	剥片	ob_腰岳	2.57	1.75	0.50	1.43	
	32	SK-1	-	剥片	ob_腰岳	2.81	2.35	0.62	3.33	
	33	SK-1	-	剥片	ob_腰岳	2.47	2.00	0.27	1.33	
	34	SK-1	-	剥片	ob_腰岳	4.00	2.10	0.96	4.42	
	35	SK-1	-	剥片	ob_腰岳	2.35	2.40	0.61	3.24	作業面調整剥片
	36	SK-1	-	剥片	ob_腰岳	2.60	3.50	0.61	5.89	作業面調整剥片
	37	SK-1	-	石核	ob_腰岳	1.68	2.04	1.63	8.91	
8	38	E-7	Ⅰ	石鏃	ob_桑ノ木津留	1.36	1.15	0.38	0.34	
	39	C-4	Ⅰ	石鏃	ob_腰岳	1.91	1.73	0.35	0.84	
	40	-	Ⅰ	石鏃	ob_腰岳	1.73	1.43	0.25	0.41	
	41	C-6・7	Ⅰ	石鏃	ob_腰岳	1.71	1.48	0.25	0.50	
	42	D.E-3・4	Ⅰ	石鏃	ob_針尾	3.13	1.43	0.31	1.10	
	43	D.E-6	Ⅰ	二次加工剥片	ob_腰岳	2.35	1.36	0.40	1.32	
	44	C-6・7	Ⅰ	二次加工剥片	ob_腰岳	2.90	1.42	0.51	1.71	
	45	E-4	Ⅰ	楔形石器	ob_日東	3.93	3.26	1.55	18.53	
	46	E-7	Ⅰ	石核	ob_腰岳	2.54	2.16	1.52	8.64	
	47	E-7	Ⅰ	原礫	ob_腰岳	4.30	1.85	1.56	11.17	

石器

土坑内から約100点が出土している。定型石器は見られず，黒曜石は石器制作過程で得られる剥片等や石核のみであり，その他，砂岩の微細な礫片等も出土した。このうち30点（18～47）を図化した。全て黒曜石である。18・19は二次加工がみられる剥片である。19の左右の側縁部の剥離は打撃方向が異なる。20～29は剥片である。20は右肩部を打ち欠いている。24は平坦な礫面をそのまま利用する。礫打面から取り出した縦長剥片を分割している。分割した頭部側の部分で，右側部に微細剥離痕が認められる。30～34は調整剥片である。35・36は作業面調整剥片である。37は石核である。これらの黒曜石は提認であるが，全て佐賀県伊万里市の腰岳より産出するものであると考えられる。38～47は表土で採集したものの一部である。38～42は石鏃である。43・44は二次加工がみられる剥片である。45は楔形石器である。46は石核である。全て黒曜石製であるが，産地は腰岳産の他に，桑ノ木津留，針尾，日東の産出であると考えられる。

第５節　自然科学分析

中尾遺跡出土炭化材の年代測定・樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告は，中尾遺跡で検出された土坑とそこから出土した土器の年代資料を得ることを目的として，同じ土坑から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行うものである。また，同時にそれら炭化材の樹種同定を行い，当時の植生や木材利用等について考察する。

Ⅰ．土坑出土炭化材の年代および樹種

１．試料

試料は，中尾遺跡で検出された土坑より採取された炭化材1点である。

中尾遺跡の炭化材の試料名は「カーボン2」とされ，出土遺構名はSK-1，採取グリッドはC－6・7とされている。発掘調査所見によれば，SK-1からは，縄文時代晩期とされる土器が出土している。炭化材は土混じりの状態であり，土壌中から炭化材10片を拾い出した。いずれも破片で，樹皮などは認められない。このうち，最も大きな破片を年代測定用と樹種同定に分割し，それぞれの分析に供した。

２．分析方法

（１）放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合，これらをピンセット，超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HCｌにより炭酸塩等酸可溶成分を除去，NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去，HCｌによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ，1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて，管内を真空にして封じきり，500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し，真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し，グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして，タンデム加速器のイオン源に装着し，測定する。測定機器は，3MV小型タンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に，標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また，測定中同時に^{13}C/^{12}Cの測定も行うため，この値を用いてδ^{13}Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また，測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。なお，暦年較正は，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1（Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer）を用い，誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは，大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正は，CALIB REV7.0.1のマニュアルにしたがい，1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また，北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い，測定誤差σ，2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲，2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは，σ，2σの範囲をそれぞれとした場合，その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は，将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算，再検討に対応するため，1年単位で表された値を記す。

（２）樹種同定

試料を自然乾燥させた後，木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し，実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお，木材組織の名称や特徴は，島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また，日本産樹木の木材組織については，林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

３．結果

（１）放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。中尾遺跡のSK-1出土炭化材のカーボン2は2,830±30BPである。試料の較正暦年代を表2に示す。測定誤差をσの年代でみると，SK-1出土炭化材のカーボン2はcalBC1,012-calBC932となる。

（２）樹種同定

樹種同定結果を表1に併記する。炭化材は広葉樹で，コナラ属クヌギ節に同定された。解剖学的特徴を記す。

コナラ属クヌギ節（*Quercus* sect. *Cerris*）　ブナ科

環孔材で，孔圏部は1-3列，孔圏外で急激に径を減じたのち，単独で放射方向に配列し，年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1-20細胞高のものと複

合放射組織とがある。

4．考察

SK-1からは縄文時代晩期とされる土器が出土しているが，小林編（2008）に示されている縄文時代晩期の暦年による年代はcalBC1,000前後である。これに従えば，今回測定された炭化材の年代は，共伴する土器の年代観を支持する結果であると言える。

SK-1から出土した炭化材は，クヌギ節に同定された。日本のクヌギ節には，クヌギとアベマキの2種がある。いずれも二次林や水辺などに生育する落葉高木であり，木材は重硬で強度が高い。今回の結果から，縄文時代晩期の遺跡周辺の水辺などにクヌギ節が生育し，その木材を燃料材などに利用したことが推定される。

引用文献

藤尾慎一郎,2009,弥生時代の実年代.西本豊弘編　新弥生時代のはじまり　第4巻　弥生農耕のはじまりとその年代.雄山閣,9-54.

林　昭三,1991,日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

表１．放射性炭素年代測定結果および樹種同定結果

遺跡	試料	採取グリッド	遺構	採取日	種類（樹種）	補正年代 BP	δ13C（‰）	測定年代 BP	Code No.
中尾	カーボン2	C-6・7	SK-1	H25.7.4	炭化材（コナラ属クヌギ節）	2,830± 30	−30.21±0.57	2,920± 30	IAAA-131938

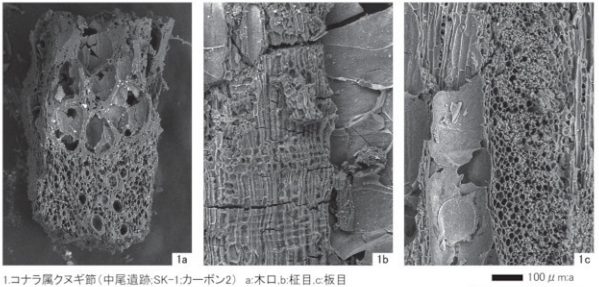
１）年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用。
２）BP年代値は，1950年を基点として何年前であるかを示す。
３）付記した誤差は，測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表２．暦年較正結果

試料	補正年代（BP）		暦年較正年代		相対比	Code No.
中尾遺跡 SK-1	2,829± 27	σ	cal BC 1,012 − cal BC 968	cal BP 2,962 − 2,918	0.615	IAAA-131938
			cal BC 963 − cal BC 932	cal BP 2,913 − 2,882	0.385	
		2σ	cal BC 1,054 − cal BC 908	cal BP 3,004 − 2,858	1.000	

１）計算には，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0（Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
２）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
３）1桁目を丸めるのが慣例だが，暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように，1桁目を丸めていない。
４）統計的に真の値が入る確率はσは68%，2σは95%である
５）相対比は，σ，2σのそれぞれを1とした場合，確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

図版１　炭化材



1.コナラ属クヌギ節（中尾遺跡:SK-1:カーボン2）　a:木口,b:柾目,c:板目

100μm:a
100μm:b,c

第６節　総括

中尾遺跡は，米ノ津川・高尾野川・野田川から成る神積平野の扇端部に立地し，縄文時代晩期の土坑１基と土坑内遺物，その他の縄文時代の遺物を確認した。

本遺跡で出土した遺物の大半は，土坑内遺物，Ⅰ層の遺物のみである。

土坑１は，直径120cmの円形を成し，土坑埋土については，締まりのない一層であった。埋土上面には，遺物がつぶれた状態で出土しており，遺物のレベルからいったん埋めて上に遺物をおいていることが想起できる。

土坑１で出土の粗製深鉢６～11は入佐式土器新段階，半粗半精浅鉢２は入佐式土器，12～17の黒色磨研浅鉢は黒川式土器中段階に相当する（注１）。これらの土器は土坑内一括資料であり，縄文時代晩期の遺構一括資料は県内でも数少なく，稀な一括資料だといえる。県内では，薩摩川内市中福良町に所在する成岡遺跡がある。土坑内より黒川式土器中段階の精製浅鉢が３個体出土しており，本遺跡の精製土器も，口縁部の断面形は玉縁状を呈し，肩部が『く』の字状に内側へ屈曲し，頸部は外反しており，同時期の黒川式中段階に属する。

土器組成から粗製深鉢が入佐式土器新段階，精製土器が黒川式土器中段階であることは，入佐式土器新段階から黒川式土器中段階までの時間幅がある。黒川式中段階で粗製深鉢の入佐式新段階の土器を製作していたのかは現段階では不明である。今後の資料の増加を待つこととする。

縄文時代晩期の土器のほか，石器が100点散々した状況で出土している。これらの石器は定型石器が見当たらず，大半が石器製作過程で得られる剥片等や石核のみであった。そのほとんどが腰岳製黒曜石である。

土坑１が所在するＣ－６・７区は，周辺が削平され，周囲には住居の痕跡などの生活跡はなく，Ⅰ層からの縄文晩期とわかる遺物が出土していないことや単独で土坑が存在していること，単一埋土の上に土器等を置いていることから中尾遺跡の土坑１は土坑墓の可能性も考えられる。

＜参考・引用文献＞

（公財）鹿児島県埋蔵文化財調査センター（2014）『中都遺跡群』
鹿児島県立埋蔵文化財センター（2005）『大坪遺跡』
鹿児島県教育委員会（1985）『成岡遺跡Ⅱ』
（注１）九州縄文研究会（2015）『九州縄文晩期の農耕を考える』
堂込秀人（1997）『南九州縄文晩期土器の再検討－入佐式と黒川式の細分』鹿児島考古第31号

前 原 遺 跡

第５章　前原遺跡の調査

第１節　調査の経過（日誌抄）

平成25年度

７月１日　伐採，環境整備等

７月３日　伐採，環境整備等，重機による表土剥ぎＣ～Ｅ24・25区トレンチ設定と掘り下げ

７月８日　Ｄ・Ｅ－24・25区Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ

７月16日　Ｅ－24・25区先行トレンチ掘り下げ，Ｅ・Ｆ－24・25区Ⅲ層掘り下げ

７月22日　Ｅ～Ｇ－21・22区Ⅲ層掘り下げ，グリッド杭設定Ｃ～Ｅ－24・25区Ⅲ層掘り下げ，グリッド杭設定

８月７日　Ｃ・Ｄ－21・22区Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ，Ｃ～Ｅ－24・25区遺構実測，Ⅲ層掘り下げ

８月12日　Ｃ～Ｅ－24・25区Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ，遺構検出，写真撮影Ｃ・Ｄ－21・22区ベルト部分分層，写真撮影，Ⅲ層掘り下げ

８月20日　Ｃ・Ｄ－21・22区Ⅲ層掘り下げ，下層確認トレンチ掘り下げ，Ｃ～Ｅ－24・25区Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ，遺構検出と実測

９月３日　Ｃ～Ｅ－21・22区遺構清掃，写真撮影Ｃ・Ｄ－24・25区遺構実測

９月13日　Ｃ・Ｄ－21・22区埋め戻し

平成26年度

５月８日　グリッド杭設定，表土剥ぎ，プレハブ内環境整備グリッド（Ｂ・Ｃ－16～21区Ｃ・Ｄ－18～21区）

５月12日　ガイダンス雇用申し込み記入，扶養控除申告書の記入，機材の搬入，雨のため14時に作業終了

５月14日　グリッド杭設定，Ｃ・Ｄ－11～13区掘り下げ，Ｅ～Ｇ－11～15区表土剥ぎ，トイレ移動

５月21日　環境整備，掘り下げ，Ｃ・Ｄ－12・13区，Ｅ・Ｆ－12～14区写真撮影，土器だまり２，住居跡（Ｄ－11区）検出状況（Ｅ－13区），センター長現地指導，安全パトロール

６月５日　掘り下げ，Ｃ～Ｇ－11～13区，Ｅ～Ｇ－14～16区土器洗い，環境整備

６月12日　Ｃ・Ｄ－13区東壁土層断面実測，写真撮影，Ｃ・Ｄ－11～13区ピット実測，埋土確認，Ｃ－11～13区北壁写真撮影，Ｅ～Ｇ－14～16区Ⅲ層掘り下げ

７月22日　Ｅ～Ｇ－14～16区Ⅴ層上面検出状況写真撮影，Ｅ～Ｇ－17～20区Ⅱ層掘り下げ，Ｆ・Ｇ－17区溝の掘り下げ，Ｃ・Ｄ－14～16区表土剥ぎ

７月23日　Ｅ・Ｆ－17・18区Ⅱ層溝の掘り下げ，Ｅ－19・20区Ⅰ層表土除去，Ｆ・Ｇ－16区土坑表土除去，土器洗い

８月11日　Ｆ－16区土坑実測掘り下げ，Ｅ・Ｆ－17・18区溝状遺構実測，Ｃ区溝状遺構検出状況写真撮影，Ｃ・Ｄ－14～16区掘り下げ（Ⅲ層）

８月19日　Ｃ・Ｄ－14～16区Ⅱ層掘り下げ，Ｃ・Ｄ－17・18区表土剥ぎ，Ｅ～Ｇ－17・18区Ⅲ層掘り下げ，Ｃ～Ｅ－23区Ⅲ層掘り下げ，溝状遺構実測写真撮影，Ｃ－14・15区集石実測

９月２日　Ｄ－15区埋設土器実測，Ｃ・Ｄ－14～16区溝状遺構完堀状況撮影，Ｃ・Ｄ－17～20区溝状遺構実測，Ｃ・Ｄ－15・16区Ⅲ層掘り下げ，Ｃ・Ｄ－17区土層断面実測

９月10日　Ｃ・Ｄ－14・15区ピット実測，Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ，Ｄ－16区土坑実測，Ｃ・Ｄ－16～20区Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ，Ｃ－21区完堀

10月10日　発掘機材の片付け積み込みベルトコンベア撤去，ハウス等撤去

第２節　調査の方法

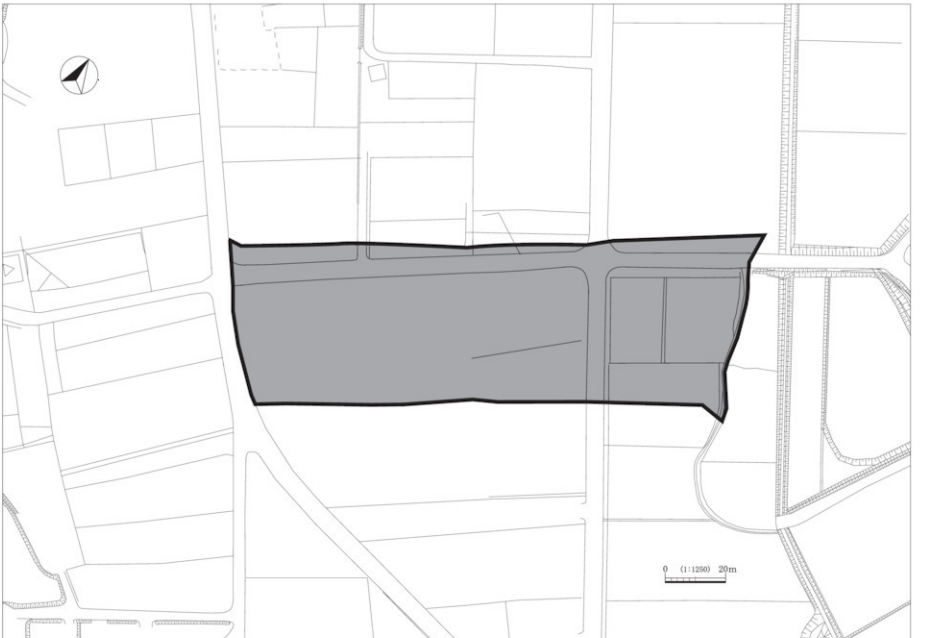
調査に先立ち，本調査区内にある国土交通省の設置した道路建設用センター杭の№42と№43を基準に，調査区内に10ｍ間隔の区画を設定し，北から南へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・・・・列，西から東へ１・２・３・４・・・・列と呼称した（第１図）。調査は調査区域の表土を重機で剥ぎその後，人力（山鍬，ジョレン，ねじり鎌等）で掘り下げ調査を行った。

第３節　層序

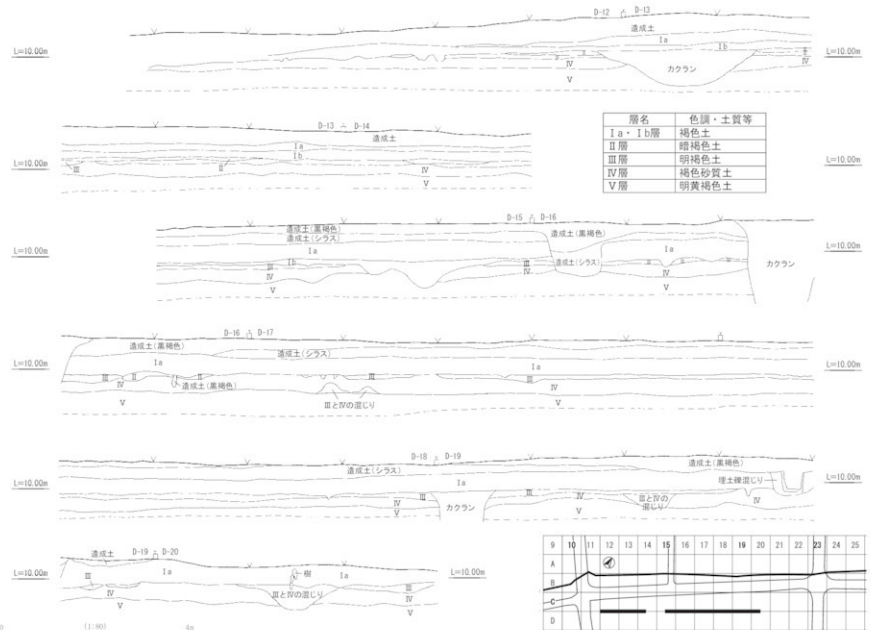
前原遺跡は標高10ｍの平坦な面に位置する。

基本層位は以下の通りである。なお，耕作は削平によりⅡ層は一部分のみに堆積が見られる。

層名	色調	内容
Ⅰa・Ⅰb層	褐色土	表土・耕作土
Ⅱ層	暗褐色土	腐植土・部分堆積
Ⅲ層	明褐色土	アカホヤ火山灰の腐植土 縄文時代中期～近世の遺物が混在する
Ⅳ層	褐色砂質土	Ⅲ層よりやや暗い・粒子が細かい。 縄文時代中期～近世の遺物が混在する
Ⅴ層	明黄褐色土	シラスの二次堆積

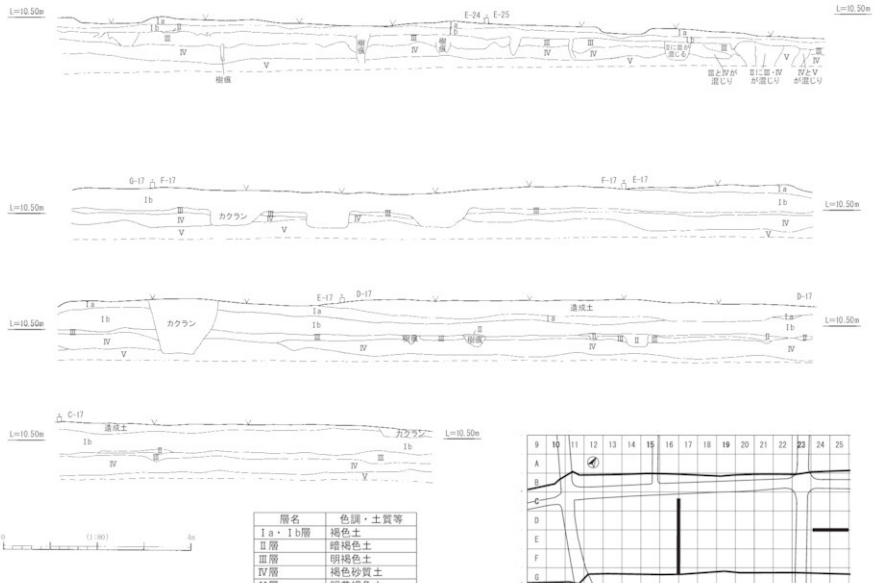


第１図　調査範囲図



層名	色調・土質等
Ⅰa・Ⅰb層	褐色土
Ⅱ層	暗褐色土
Ⅲ層	明褐色土
Ⅳ層	褐色砂質土
Ⅴ層	明黄褐色土

第２図　前原遺跡土層断面図（１）



層名	色調・土質等
Ⅰa・Ⅰb層	褐色土
Ⅱ層	暗褐色土
Ⅲ層	明褐色土
Ⅳ層	褐色砂質土
Ⅴ層	明黄褐色土

第３図　前原遺跡土層断面図（２）

第４節　縄文時代の調査

１　調査の概要

Ⅲ層・Ⅳ層ともに縄文時代中期から近世の遺物が混在して出土する状況であった。遺構精査などを繰り返しⅤ層上面まで調査を行った。遺構は集石が２基，土坑が１基検出された。遺構は埋土観察用に半裁し，遺物出土状況，埋土断面の図面作成，写真撮影を行った上で完掘した。遺物は同一層，グリッドごとに一括で取り上げを行った。

２　遺構

集石１号（第６図）

検出状況　Ｃ－14区，Ⅲ層で検出された。

形状・規模　120cm×110cmの範囲に礫が散布する。集石に伴う遺物は出土していない。

掘り込み　礫取り上げ後，掘り込みの確認を行ったところ，中央部に周辺よりやや黒褐色を呈する埋土を有する径約70cmの円形で，検出面からの深さ約25cmの掘り込みを検出した。礫は掘り込みの床面より浮いた状態で出土している。

集石２号（第６図）

検出状況　Ｄ・Ｅ－22区，Ⅲ層で検出された。

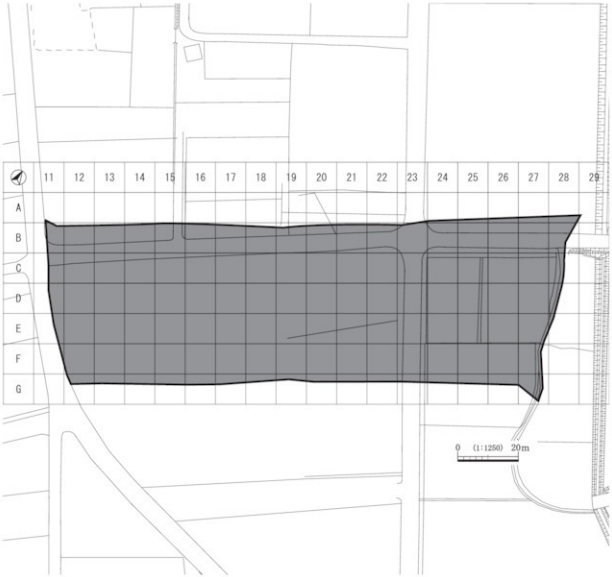
形状・規模　120cm×120cmの範囲に礫が散布する。なお，集石に伴う遺物は出土していない。また，掘り込みは確認できなかった。

土坑１号（第７図）

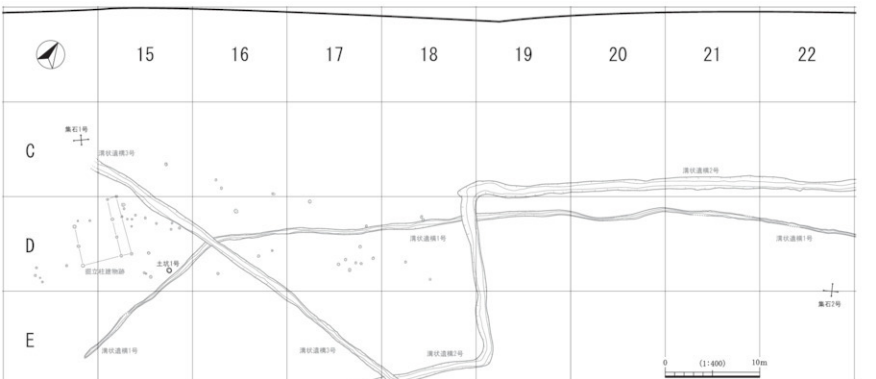
検出状況　Ｄ－15区，Ⅲ層で検出された。

形状・規模　平面形態は約55cmの円形を呈する。検出面からの深さは約34cmである。土坑のほぼ中央に西平式土器がさかさまの状態で収まっていた。

出土遺物　１は縄文時代後期の西平式土器である。口縁部が『く』の字に外反し，大きな波状を呈する口縁部に３条の沈線文が口縁部に沿って施され沈線文間に撚糸による施文が見られる。山方の波頂部では，刺突による施文が見られる。

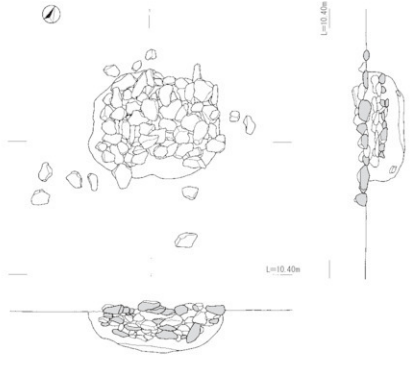


第４図　グリッド配置図

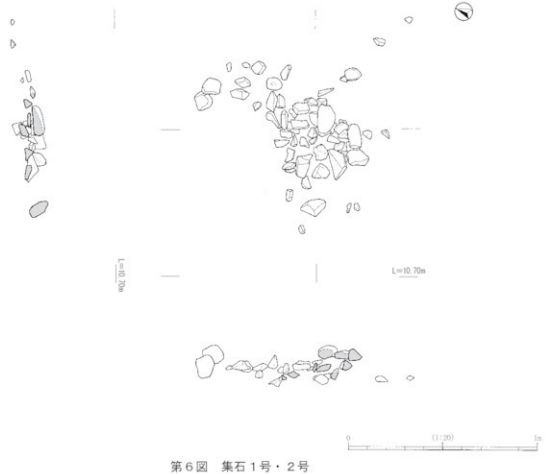


第５図　縄文時代の遺構配置図

集石1号

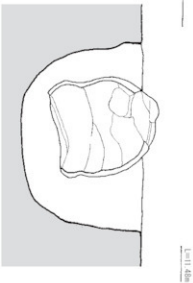


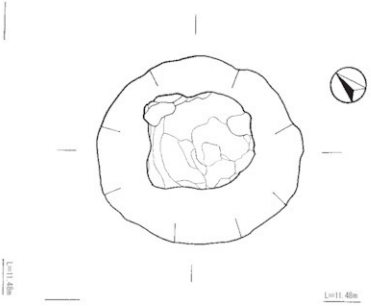
集石2号

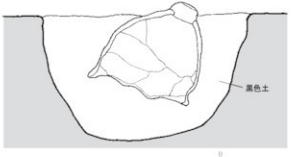


第6図　集石1号・2号

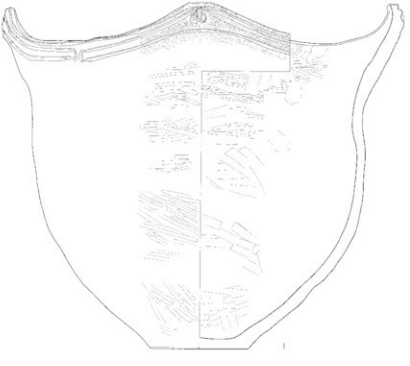
土坑1号







0 (1:10) 50cm



0 (1:3) 10cm

第７図　土坑１号及び出土遺物

3　遺物

縄文時代早期

縄文時代早期の土器は，主にⅢ層で出土した。点数は縄文時代後・晩期の遺物と比較すると少量である。主に中原式土器や押型文土器などが出土した。

Ⅰ群１類　中原式土器（第８図　２・３）

２は断面が厚く，外面に貝殻条痕が施されている。縦方向に施文した後，横方向に施文している。３の口縁部の形状はやや内湾気味で，外面に横方向の貝殻条痕が施されている。

Ⅰ群２類　押型文土器（第８図　４・５）

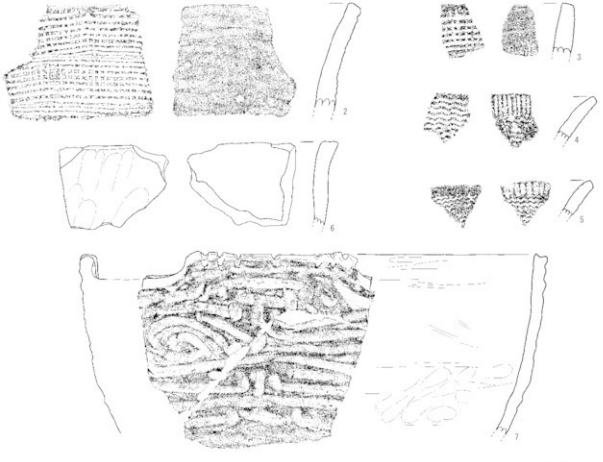
４は外反する口縁部外面に横方向の山形文を施し，内面は縦方向の櫛状文と呼ばれる原体条痕が残る。５は口縁部上端部に無文帯を施し，その下位に横方向の山形押型文を施している。

縄文時代中期～後期

縄文時代中期では阿高式のほか船元式土器が出土した。また，東海地方でみられる縄文時代中期前半期の土器が出土した。

Ⅰ群３類　阿高式土器（第８図　６・７）

６は無文で，胎土に滑石を含むものである。口縁部は横にやや伸びている。外面は縦方向のケズリ調整が施されている。７は口唇部上面の平坦面の凹線がはっきりしており，外面全面に太めの凹線文を施している。内面は



第８図　縄文時代の遺物（１）

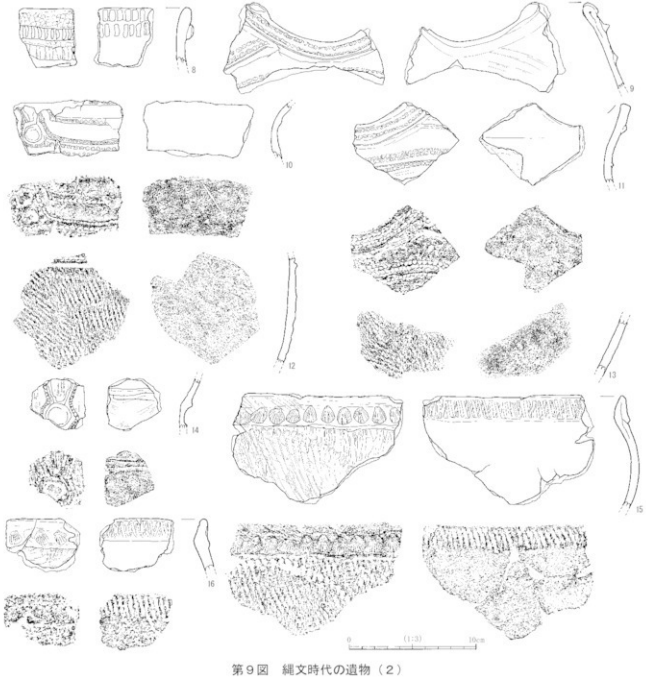
第１表　縄文時代の土器観察表（１）

検図番号	掲載番号	出土地点	層	取上番号	分類	器種	部位	器面調整	色調 外面	色調 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 他	備考
7	1	D-15	Ⅲ	土坑１	－	深鉢	完形	外：ミガキ　ナデ 内：ミガキ　ナデ	橙	明黄褐	31.0	7.8	27.5		○	○	雲母	西平式
8	2	C-D-23	表土	一括	Ⅰ-1	深鉢	口縁部	外：貝殻条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－	－	○	○	○	雲母	中原式
	3	C-25	Ⅲ	－	Ⅰ-1	深鉢	口縁部	外：貝殻条痕文　ナデ 内：ナデ	浅黄	にぶい黄	－	－	－	○	○	○	雲母	中原式
	4	C-25	Ⅲ	－	Ⅰ-2	深鉢	口縁部	外：山形押型文　ナデ 内：貝殻条痕文　ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	－	－	－	○	○	○		押型文土器
	5	D-24	－	カクラン	Ⅰ-2	深鉢	口縁部	外：山形押型文　ナデ 内：波状文　ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	－	－	－	○	○	○	雲母	押型文土器
	6	C-17	Ⅲ	－	Ⅰ-3	深鉢	口縁部	外：ケズリ	灰オリーブ	灰オリーブ	－	－	－	○	○		滑石	阿高式
	7	F-17	Ⅲ	一括	Ⅰ-3	深鉢	口縁部	外：凹線文 ナデ	灰褐	にぶい赤褐	37.0	－	－	○	○	○	黒雲母	阿高式

ナデ調整である。

Ⅰ群４類　船元式土器（第９図　８～16）

８の口縁部外面は撚糸文が施され，厚めの突帯の上に半截竹管による爪形文が施されている。口縁部内面にも同様に爪形文があり，少し厚みのある施文具で施されている。９は波状口縁でキャリパー形を呈するものである。口縁部に突帯を施し，それに沿うように２点列点が施されている。２点は列が揃っていないこと，刺突の大きさが大小異なっていることから，連続刺突文を２列施したと思われる。胎土は花崗岩質の石英・長石を多く含んでいる。また，口縁部に杯状突起のモチーフが施されている。10は口縁部下の頸部片である。９や11と比較すると断面が薄く，外面の色調や突帯の張出しが弱い。外面は，突帯に沿う連続刺突文と円形浮文のモチーフが施されている。11も同様に波状口縁で，突帯に２点列点を施している。施文や胎土の様子から同一個体の可能性がある。12・13は胴部片である。外面全面に撚糸文が施されている。14にも同様に円形浮文のモチーフが施されている。15はキャリパー形の器形を呈する。口縁部外面にハイガイによる圧痕文が連続して施され，胴部は撚糸文が縦方向に施されている。また，口縁部内面にも撚糸文が施されている。内面のケズリ調整により断面の器壁が薄く成形されていることや，胎土に石英・長石を多く含んでいることから近畿・瀬戸内の搬入品である。16は15と同一個体の可能性がある。



第９図　縄文時代の遺物（２）

Ⅰ群５類　北裏CⅡ式土器（第10図　17～19）

17～19は東海系の北裏CⅡ式に相当する土器である。北裏CⅡ式は主に静岡県や岐阜県などでみられる中期前半の土器である。17は断面に薄い粘土板を貼付けた胴部片である。外面は縦方向に半截竹管による押引き文を施した後，横方向にも施文している。胎土は石英・長石の他，赤いチャートや３㎜程度の礫が多く含まれている。18は口縁部片である。口縁部は横方向に半截竹管による押引きを施した後，半截竹管による爪形文を施している。19は深鉢の胴部片である。17と同様に薄い粘土板の貼付けが確認できる。外面は半截竹管による押引きにより施文の区画を設定し，その中に押引き文や爪形文の他，三角形に掘込みを入れる三角陰刻や連続刺突文が施される。また，断面は薄く胎土に石英・長石を多く含むのも特徴である。胴部外面に煤が付着する。

Ⅰ群６類　南九州上水流タイプ（第10図　20・21）

20の口縁部は薄く突帯を貼付け，胴部に貝殻条痕を施し，断面に厚みがある。21も同様に小さく薄い突帯を貼付け，その間に連続指突文が施文されている。胎土は石英・長石・角閃石を多く含んでいる。

第10図　縄文時代の遺物（３）

Ⅱ群１類　南福寺式土器（第11・12図　22・26・27）

22は口縁部に『く』の字状の凹線文を施文している。口縁部上面は平坦面を成し，薄い胴部からわずかに外傾している。内面はナデ調整である。26は山形状の口縁部はほぼ直立し，胴部にかけて内湾している。口縁部と胴部の境に『X』字状の橋状把手を取り付け，橋状把手上面には２条の凹線文が施されている。橋状把手の上に粘土帯を貼付けており，内面はそれに対応するように凹圧文が施されている。27は口縁部下の胴部から膨らみ，胴部下へすぼまる器形である。口縁部外面はヘラ状工具による凹線文が施され，一部縦方向にも施文が施されている。また，口縁部下の胴部に斜位の凹線文と穿孔がみられる。

Ⅱ群２類　出水式土器（第11・12図　23～25・28）

出水式土器に相当する口縁部片である。23・24は口縁部外面の綾杉状に凹線文を施している。25は口縁部が外側に外反し，斜め方向に工具による凹線文が施されている。外面は口縁部下にミガキ調整を施している。28も同様に口縁部は外反している。口縁部に粘土を貼付け，斜めに凹線文を施している。内面はナデ調整を施している。

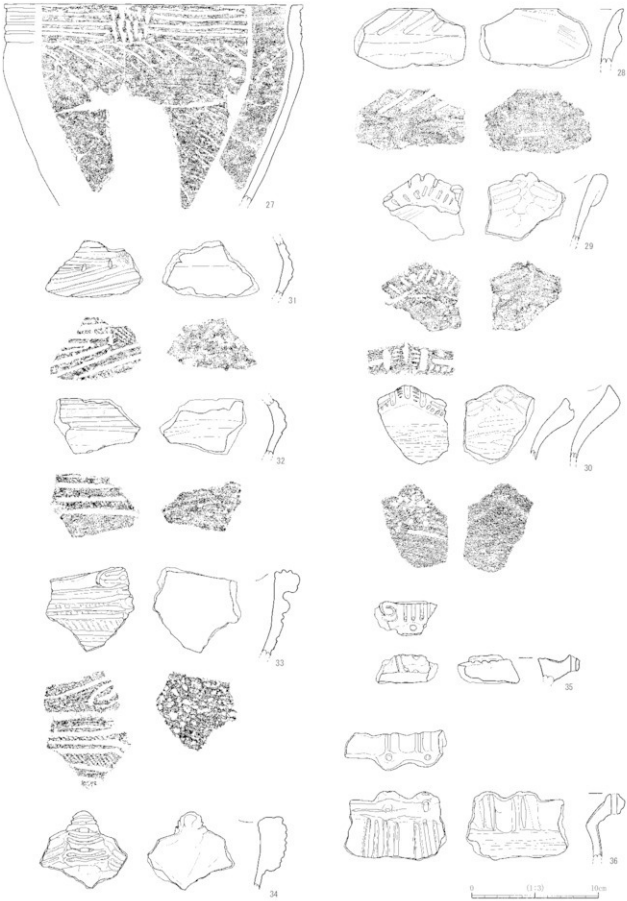
Ⅱ群３類　北久根山式土器（第12図　29～34）

29は口縁部を外側に折り返して，貼付けて成形している。口縁部は山形状を呈し，口縁部外面は工具による彫込みで施文されている。内面にミガキ調整がみられる。北久根山式土器である。30も同様に口縁部上面に縦方向と横方向に彫込みが施されているが，29と比較すると貼付けの成形はみられない。内面に横方向のミガキ調整を施す。31は胴部片で，磨消縄文と沈線文が施文される。32は口縁部に沈線文を３条施している。33は口縁部下外面に磨消縄文と沈線文が施され，内面は摩滅している。34は肥厚させた口縁部に粘土紐を巻付けた後，沈線文を施している。断面形状は薄く形成され，33と胎土が類似している。

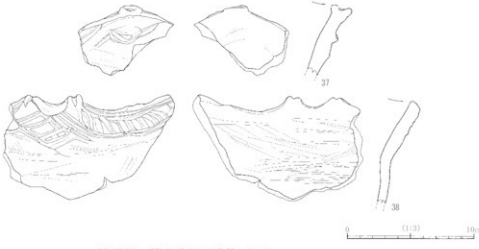
Ⅱ群４類　浜ノ州タイプ（第12・13図　35～38）

35・36は北久根山式土器から鐘崎式土器の要素を併せ持つ土器で，これらは浜ノ州タイプとされている（前迫1997）。35は口縁部片である。穿孔がある部位が断面四角形状に張り出しており，口唇部には縦方向に沈線が３条施されている。穿孔部の粘土の接合線が明瞭である。36の口縁部は大きく外反し，口唇部に２か所穿孔がみられる。外面は縦方向に深く沈線が施されており，内面も同様に縦方向の沈線が施されている。鉢のような器形と思われる。37の口縁部は山形状で，口唇部に円形のモチーフを貼付けている。中央が凹んだポッチ状の突起である。口縁部下の外面には斜方向の凹線文を施した後，断面三角形状に粘土を貼付け肥厚させている。内面はナデ調整を施している。これらの類例は干迫遺跡（1997）で多く出土している。38は口縁部に２つの突起をもつ波状口縁である。口縁部外面は沈線による文様が施されている。口縁部下の胴部から膨らみがあり，深鉢の器形と考えられる。口縁部内面は貝殻条痕が明瞭に残る。後期初頭の土器と思われるが，型式は不明である。

第11図　縄文時代の遺物（４）



第12図　縄文時代の遺物（５）



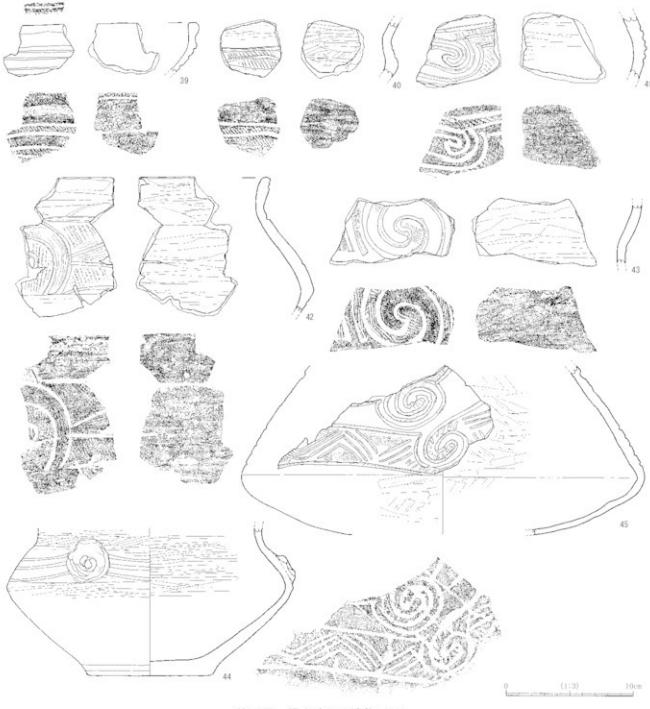
第13図　縄文時代の遺物（6）

第２表　縄文時代の土器観察表（２）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	取上番号	分類	器種	部位	器面調整	色調 外面	色調 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 他	備考
9	8	F-18	－	一括	Ⅰ-4	深鉢	口縁部	外：撚糸文　半截竹管による爪形文 内：半截竹管による爪形文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－	－	○	○	○		船元式
	9	C-D-16	Ⅲ	一括	Ⅰ-4	深鉢	口縁部	外：連続刺突文	にぶい黄橙	橙	－	－	－	○	○		赤色粒	船元式
	10	－	－	－	Ⅰ-4	深鉢	頸部	外：円形浮文　連続刺突文	橙	橙	－	－	－	○	○		赤色粒	船元式
	11	F-18	Ⅱ	一括	Ⅰ-4	深鉢	口縁部	外：連続刺突文	黄灰	にぶい黄橙	－	－	－	○	○		赤色粒	船元式
	12	C-16	Ⅲ	一括	Ⅰ-4	深鉢	胴部	外：撚糸文	灰黄褐	にぶい褐	－	－	－	○	○		赤いチャート	船元式
	13	C-16	Ⅲ	一括	Ⅰ-4	深鉢	胴部	外：撚糸文	にぶい黄橙	浅黄	－	－	－	○	○		赤色粒	船元式
	14	C-16	Ⅲ	－	Ⅰ-4	深鉢	胴部	外：円形浮文　連続刺突文	灰白	にぶい黄橙	－	－	－	○	○		赤色粒	船元式
	15	－	－	－	Ⅰ-4	深鉢	口縁部	外：口縁部ハイガイによる圧痕文　撚糸文 内：口縁部撚糸文　ケズリ	明黄褐	明黄褐	－	－	－	○	○		赤いチャート	船元式
	16	D-16	Ⅲ	一括	Ⅰ-4	深鉢	口縁部	外：口縁部ハイガイによる圧痕文　撚糸文 内：口縁部撚糸文　ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－	－	○	○			船元式
10	17	F-17	－	一括	Ⅰ-5	深鉢	胴部	外：半截竹管による押引き文	にぶい黄橙	にぶい黄褐	－	－	－	○	○		赤いチャート	東海系北裏C Ⅱ式
	18	E-16・F-17	Ⅲ	一括	Ⅰ-5	深鉢	口縁部	外：半截竹管による押引き文　爪形文	灰黄褐	褐	－	－	－	○	○		礫	東海系北裏C Ⅱ式
	19	D-16	Ⅲ	一括	Ⅰ-5	深鉢	胴部	外：半截竹管による押引き文　爪形文　三角隆刻　連続刺突文	にぶい黄橙	黒褐	－	－	－	○	○		礫・雲母	東海系北裏C Ⅱ式
	20	D-14・15	Ⅲ	一括	Ⅰ-6	深鉢	口縁部	外：貝殻条痕文	にぶい黄褐	灰黄褐	－	－	－	○	○	○		南九州上水流タイプ
	21	F-17	－	一括	Ⅰ-6	深鉢	胴部	外：貝殻条痕文　連続刺突文	黒褐	にぶい黄褐	－	－	－	○	○	○		南九州上水流タイプ
11	22	D-20	Ⅲ	－	Ⅱ-1	深鉢	口縁部	外：凹線文　ナデ 内：ナデ	にぶい橙	にぶい赤褐	－	－	－	○	○		雲母	南福寺式
	23	D-17	Ⅲ	－	Ⅱ-2	深鉢	口縁部	外：鋸形状の凹線文　ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	－	－	－		○	○		出水式
	24	C-20	Ⅳ	－	Ⅱ-2	深鉢	口縁部	外：鋸形状の凹線文　ナデ	明赤褐	明赤褐	－	－	－	○	○		雲母	出水式
	25	D-17	－	一括	Ⅱ-2	深鉢	胴部	外：ミガキ 内：工具による凹線文	にぶい赤褐	橙赤褐	20.4	－	－	○	○		赤色粒	出水式
	26	F-18	－	一括	Ⅱ-1	深鉢	口縁部	外：×字状の積状把手　凹線文 内：凹線文	橙	にぶい褐	－	－	－	○	○	○		南福寺式
12	27	C-21	Ⅲ	－	Ⅱ-1	深鉢	口縁部～胴部	外：ヘラ状工具による凹線文	明褐	明赤褐	23.6	－	－	○	○	○		南福寺式
	28	D-17	－	一括	Ⅱ-2	深鉢	口縁部	外：ヘラ状工具による凹線文 内：ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	－	－	－	○	○		雲母	出水式
	29	F-18	－	一括	Ⅱ-3	深鉢	胴部	外：ヘラ状工具による差込み 内：ミガキ	にぶい褐	にぶい橙	－	－	－	○	○		雲母	北久根山式
	30	E-D-22	Ⅰ	－	Ⅱ-3	深鉢	口縁部	外：ヘラ状工具による差込み 内：ミガキ	にぶい橙	黄褐	－	－	－	○	○	○	礫	北久根山式
	31	E-16	Ⅲ	－	Ⅱ-3	浅鉢	胴部	外：扇消縄文　沈線文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－	－	○		○	礫	北久根山式
	32	F-22	Ⅰ	－	Ⅱ-3	浅鉢	胴部	外：沈線文	にぶい黄橙	にぶい黄	－	－	－			○	赤色粒	北久根山式
	33	D-21	Ⅰ	－	Ⅱ-3	浅鉢	口縁部	外：扇消縄文　沈線文　ナデ 内：ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	－	－	－	○	○	○	礫・赤色粒	北久根山式
	34	E-D-22	Ⅰ	－	Ⅱ-3	鉢	口縁部	外：沈線文　ナデ 内：工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－	－	○	○	○	赤色粒	北久根山式
	35	C-D-21	－	－	Ⅱ-4	鉢	口縁部	外：沈線文 内：沈線文	浅黄橙	にぶい橙	－	－	－	○			黒色鉱物	浜ノ州タイプ
	36	－	Ⅰ	－	Ⅱ-4	鉢	口縁部	外：沈線文　ナデ 内：沈線文　ナデ	にぶい黄橙	橙	－	－	－	○		○	礫	浜ノ州タイプ
13	37	D-17	－	一括	Ⅱ-4	鉢	胴部	外：ヘラ状工具による沈線文 内：ナデ	褐	明赤褐	－	－	－	○	○		雲母	
	38	C-18	－	一括	Ⅱ-4	深鉢	口縁部	外：沈線文 内：貝殻条痕文	褐	にぶい褐	－	－	－	○	○			

Ⅱ群５類　鐘崎式土器（第14図　39～45）

39は口縁部外面と胴部に磨消縄文を施し，屈曲部から下に沈線を３条施している。内面はナデ調整である。40は外面に縦方向の磨消縄文を施した後，横方向の浅い沈線を施している。内面はミガキ調整である。断面を一部加工しているため，メンコの可能性がある。41は渦巻のモチーフが施された胴部片である。内面はミガキ調整である。42は口縁部から胴部にかけて緩やかに膨らみ，磨消縄文の胴部に沈線による渦巻の施文が施されている。外面は一部ミガキ調整されており，内面は摩滅している。43も同様に丸い渦巻きの施文が施され，外面・内面ミガキ調整である。44は屈曲部に渦巻のモチーフが施され，３条の沈線が施されている。45は胴部の屈曲部に渦巻の施文と沈線による施文が施されている。上のモチーフは，磨消縄文を施したところに沈線による渦巻文で，下のモチーフは沈線による渦巻文の間に掘込をいれている。また，屈曲部上面に沿う沈線の中に，磨消縄文と３条の彫込による綾杉状の施文が施されている。内面に一部削り調整がみられる。底面が平底でゆるやかに丸味を帯びるため，注口土器の可能性がある。



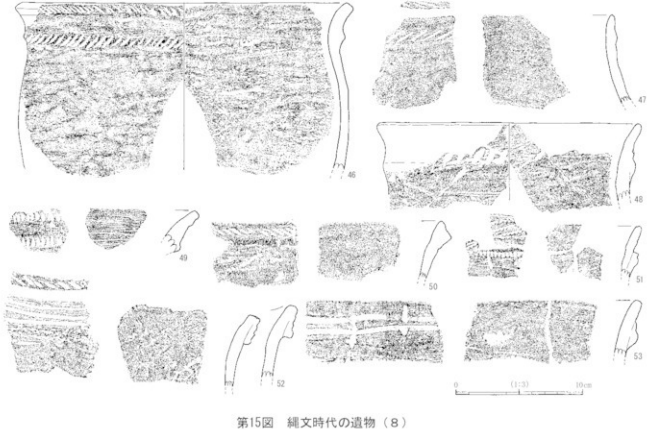
第14図　縄文時代の遺物（７）

Ⅱ群６類　市来式土器（第15・16図　46～65）

46～53は，口縁部の断面三角形状がやや薄く，口唇部にも文様を施すもので，市来式土器の範疇に入るが，様相がやや異なる土器群である。46は口縁部文様帯の境をわずかに盛り上げて肥厚させている。口縁端部と肥厚部に貝殻刺突文を施す。胴部の中央部でやや膨らみ，下半部は緩やかにすぼまる器形である。47は口縁部が直口するものである。外面には斜め方向に施文されている。48は46と同様に口縁部文様帯の境に厚みがあり，そこに貝殻刺突文を施している。49は口縁部の肥厚部が口縁端部に位置しているものである。いずれも貝殻刺突文や沈線を肥厚部に施し，口縁部は外反し短く形成されている。50も同様に口唇部平坦面が肥厚している。51・52は口縁端部に粘土帯貼付の接合痕が残っている。外面には沈線が３条施され凹凸が明瞭である。54の口縁部は厚く，口縁部内面にやや丸みを帯びる。文様帯には凹線文が施される。55はヘラ状工具による凹線文を施した後，貝殻腹縁による刺突文を施している。56は口縁部が外反し，斜方向に貝殻刺突文とその下に貝殻条痕文を施している。57も同様に横方向に凹線文を施した後，貝殻腹縁による刺突文を施している。58は口縁部文様帯の境が断面三角形に肥厚させている。口縁端部と断面三角形の肥厚部分はヘラ状工具により，縦方向に施文を有する。その間に横方向の凹線文を４条施している。59は口縁端部が内側に入り，外面に沈線文が施され，口縁部内面は沈線により『Ｓ』字状の施文が施されている。60は波状口縁の波頂部で，断面三角形の肥厚部の上下に文様帯が施されている。口縁部の平坦面に刻目のような刺突文を施し，肥厚部上下の凹線文の間にも施されている。口縁部の文様帯が比較的複雑な作りになっているが，バランスのとれた安定した器形である。61は口縁部文様帯の境を断面三角形に盛り上げるもので，文様帯には斜位の貝殻腹縁による刺突文を有する。口縁部内面と文様帯の下には横方向のナデ調整が施されている。62・63・65は台付皿形土器の底部である。皿の脚部は接合痕から欠損しているが，どちらも透かし状を呈していたと考えられる。外面にヘラ状工具による刺突文や刻目突帯文を施している。64は断面三角形の肥厚部から上が欠損しているが，その下に粘土を貼付けている。これは橋状把手の可能性がある。また，内面は縦方向に凹線文が深く施文されている。65は台形状の脚部の外面に横方向の沈線の彫込が『八』の字状に施文されている。脚部のくびれに一部刷毛目調整がみられる。

Ⅱ群７類　松山式土器（第16図　66）

66は松山式に相当する土器と思われる。口縁端部は断面三角形状のように肥厚させ，外反する口縁部から下は，ややくびれ，胴部が張る器形である。口縁部は沈線文と刺突文が施されている。外面は縦方向の貝殻による条痕文を施し，内面は丁寧なナデにより，横方向の貝殻条痕がナデ消されている。



第15図　縄文時代の遺物（８）

第16図　縄文時代の遺物（９）

縄文時代晩期の土器

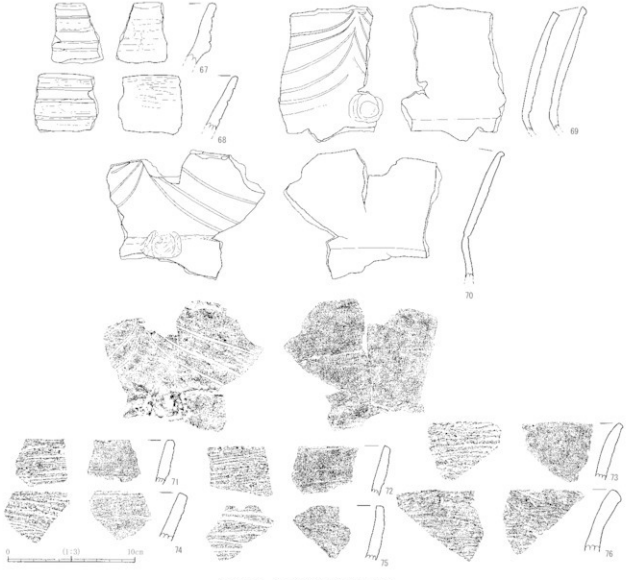
縄文時代晩期の土器は，主にⅢ・Ⅳ層から出土し，入佐式土器や黒川式土器の精製浅鉢と粗製深鉢が出土した。

Ⅲ群１類　入佐式土器（第17図　67～70）

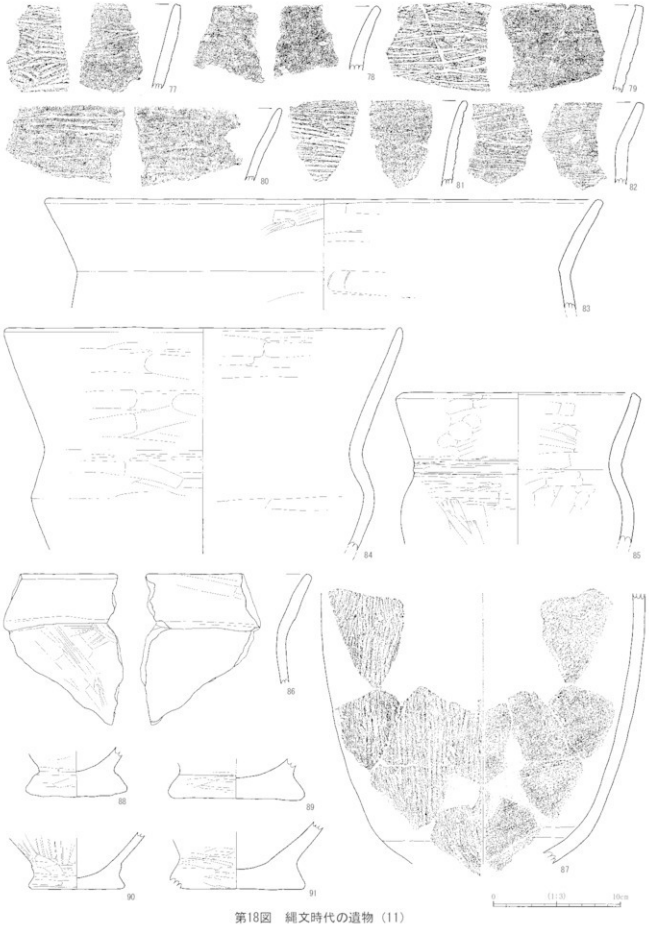
67・68は口縁部先端に平坦面があり，断面が薄く内面がミガキ調整である。外面は横方向の沈線が３条丁寧に施されている。69・70は口縁部の外面に木の葉をモチーフにしたような沈線文が施され，その下には円形突起の装飾が施されている。器形は口縁部から胴部の屈曲部がゆるやかに張り出す器形である。同一個体の可能性がある。

Ⅲ群２類　条痕文土器（第17・18図　71～91）

２類は口縁部が直口するものから大きく外反するもので全体の器形は口縁部が開く深鉢である。貝殻による条痕文を施している。71～75は口縁部がやや内湾し，外面・内面ともに条痕文を施す。76～82は口縁部が長く外反するものである。77の外面は横方向の施文がはっきり施されている。82・83は口縁部下の胴部の屈曲がみられる。83は口縁部径が44.4cmを呈し，胴部の内面の屈曲部がはっきりしている。84は口縁部が長く立ち上がり，胴部最大径が口縁部最大径より小さく，胴部のくびれがはっきりしている。85は口縁部最大径と胴部最大径がほぼ同じ大きさで，全体の器形は小さいものである。86は口縁部が外反し，胴部の屈曲部へ伸びている。87は胴部から底部まで条痕文を施している。88～91は底部片である。88は底部裾が丸みを帯び，やや安定しない脚部から立ち上がる底部片である。89は安定した底部である。横方向の刷毛目調整がみられる。90は外面に縦方向の刷毛目調整と横方向のナデ調整がみられる。91は安定した脚部から外側へ大きく立ち上がる器形である。外面は横方向の刷毛目調整が施されており，底部内面の底には平坦面ができている。



第17図　縄文時代の遺物（10）



第18図　縄文時代の遺物（11）

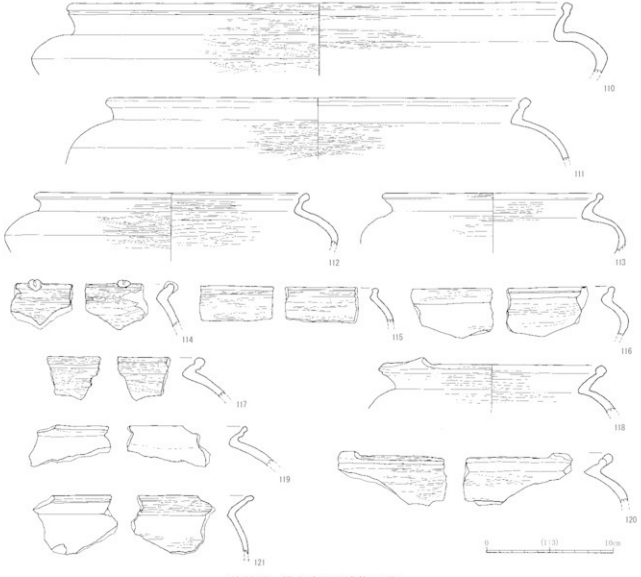
Ⅲ群３類　黒川式土器（第19図　92～109）

３類は口縁部先端が玉縁状で，口縁部外面には沈線が一条施されるものと胴部の屈曲部が角になり底部へ至るものである。92は口縁部が外反するものである。93は口縁部先端が短く外面・内面にミガキ調整を施す。95・96も同様に外側に開く口縁部である。94・97は口縁部の内側がやや膨らみ，外側へ大きく外反する器形である。口縁部外面・内面にミガキ調整を施している。98は口縁部が外側にやや傾くものである。99・100は口縁部から頸部まで緩やかに外反し，胴部がやや丸みを帯びるものである。100の玉縁状口縁は丸く，口縁部上面に小さな突起が装飾されている。101・105・107は玉縁状口縁が短く厚めで，胴部の屈曲がやや強いものである。107は内面の屈曲部からミガキ調整を施し，101・105は一部に調整がみられる。104は玉縁状口縁が小さく，断面が薄く形成されている。内面は摩滅している。106は口縁部が短く，胴部の屈曲部がはっきりしている。頸部断面はやや膨らみをもつ。108も同様に頸部断面に膨らみをもつが，内面の屈曲部が丸みを呈している。109は口径26cm程の精製浅鉢である。玉縁状口縁の端部がやや伸びており，胴部の屈曲がはっきりしている。外面・内面ともに丁寧にミガキ調整されている。

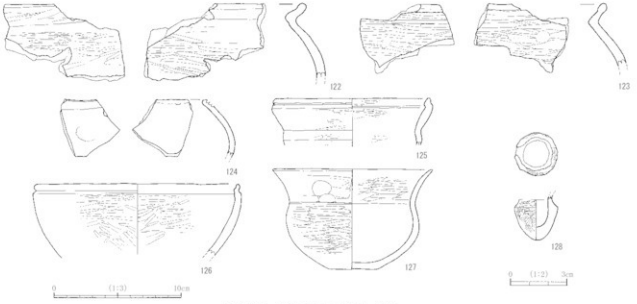
第19図　縄文時代の遺物（12）

Ⅲ群４類　黒川式土器（第20・21図　110～128）

４類は口縁部先端が玉縁状で，頸部までが短い。胴部径は口縁部径よりも大きく，屈曲部が丸みを帯びるものである。110は口縁端部が平坦を成しており，外面に一条の沈線を施している。胴部の張り出しが大きく断面も厚みを帯びる。口径が40cmで大きい器形である。111・112は口縁部が短く，屈曲部外面が丸みを帯びるのに対し，内面はやや内側に張り出している。113は口縁端部が丸く，屈曲部の断面にやや厚みを帯び，胴部が横に張るものである。口縁部内面と外面に横方向のミガキ調整を施す。114～116は口縁部が短く立ち上がり，端部は平坦である。114は口縁部にリボン状の突起が貼付けられる。いずれもやや小さく胴部が丸い器形である。118～120は屈曲部の内側の張り出しがやや伸びている。120は口縁部上面にリボン状の突起が施されている。118も同様に突起が施されている。122・123は口縁部がさらに短く，屈曲部の内側の張り出しが緩やかになる。外面・内面ともにミガキ調整を施す。117は口縁部が薄く，玉縁状口縁の下に小さな膨らみを呈する。口縁部から胴部に大きく張り出している。121も同様の器形を呈する。内面は横方向のミガキ調整である。124は口縁部から胴部に張り出す器形である。125は玉縁状口縁が内側に入り屈曲部から下にやや張り出す。126は玉縁口縁の内側に小さな膨らみをもつ。口縁部下に一条の沈線を施している。外面・内面に丁寧なミガキ調整を施している。127は口縁部が直口し，胴部からゆるやかに屈曲するものである。胴部最大径よりも口縁部径が大きく，器形は安定している。口縁部内面と胴部外面に横方向のミガキ調整を施している。128は小型（ミニチュア）の深鉢である。口縁部が欠損しているが，口縁部下の頸部から屈曲し，胴部は縦に伸びている。底部は丸みを帯びる尖底である。外面にミガキ調整を施し，内面はナデ調整である。



第20図　縄文時代の遺物（13）



第21図　縄文時代の遺物（14）

第３表　縄文時代の土器観察表（３）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	取上番号	分類	器種	部位	器面調整	色調 外面	色調 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 他	備考
14	39	E-20	Ⅲ	－	Ⅱ－5	鉢	口縁部	外 撚消縄文　沈線文 内 ナデ	褐	褐	－	－	－	○	○	○		鐘崎式
	40	E-19	Ⅰ	－	Ⅱ－5	鉢	胴部	外 撚消縄文　沈線文 内 ミガキ	黒褐	黒褐	－	－	－	○	○			鐘崎式
	41	F-21	Ⅲ	－	Ⅱ－5	鉢	胴部	外 撚消縄文　沈線による渦巻文 内 ナデ　ミガキ	灰黄褐	黄灰	－	－	－	○	○	○		鐘崎式
	42	D-20	Ⅲ	一括	Ⅱ－5	鉢	口縁部～胴部	外 撚消縄文　沈線による渦巻文　ミガキ 内 ナデ　ミガキ	暗黄灰	黄灰	－	－	－	○	○	○		鐘崎式
	43	F-19	Ⅰ	一括	Ⅱ－5	鉢	胴部	外 撚消縄文　沈線による渦巻文　ミガキ 内 ミガキ	にぶい黄褐	暗黄灰	－	－	－	○	○	○		鐘崎式
	44	D-16	Ⅲ	一括	Ⅱ－5	鉢	胴部～底部	外 沈線文　ミガキ 内 ミガキ	橙	にぶい黄橙	－	10.0	－	○	○		雲母	鐘崎式
	45	F-17	－	－	Ⅱ－5	鉢	胴部	外 撚消縄文　沈線による渦巻文　沈線文 内 ナデ　ケズリ	橙	橙	－	－	－		○	○		鐘崎式
15	46	F-13	Ⅲ	208	Ⅱ－6	深鉢	口縁部～胴部	外 貝殻刺突文　ナデ 内 ナデ	褐	にぶい赤褐	26.8	－	－	○	○	○		市来式
	47	E-22	Ⅰ	－	Ⅱ－6	深鉢	口縁部	外 貝殻刺突文　ナデ 内 ナデ	橙	橙	－	－	－	○	○	○	黒色鉱物・砂粒	市来式
	48	E-22	Ⅱ	－	Ⅱ－6	深鉢	口縁部	外 貝殻刺突文　ナデ 内 ナデ	橙	にぶい黄橙	21.0	－	－	○	○	○	黒色鉱物・赤色粒	市来式
	49	F-21	Ⅲ	－	Ⅱ－6	深鉢	口縁部	外 貝殻刺突文　沈線文　ナデ 内 ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄褐	－	－	－	○	○	○	軽石	市来式
	50	C-D-21	Ⅱ	－	Ⅱ－6	深鉢	口縁部	外 貝殻刺突文　沈線文　ナデ 内 ナデ	橙	淡黄橙	－	－	－	○	○	○	礫	市来式
	51	E-G-22	Ⅰ	－	Ⅱ－6	深鉢	口縁部	外 貝殻刺突文　沈線文　ナデ 内 ナデ	橙	にぶい黄橙	－	－	－	○	○	○	黒色鉱物	市来式
	52	E-G-22	Ⅰ	－	Ⅱ－6	深鉢	口縁部	外 貝殻刺突文　沈線文　ナデ 内 ナデ	にぶい橙	にぶい橙	－	－	－	○	○	○	軽石・礫	市来式
	53	F-21	Ⅱ	－	Ⅱ－6	深鉢	口縁部	外 貝殻刺突文　沈線文　ナデ 内 ナデ	にぶい褐	明褐	－	－	－	○	○	○	礫	市来式
16	54	F-17	Ⅲ	一括	Ⅱ－6	深鉢	口縁部	外 沈線文 内 ナデ	褐	黒褐	－	－	－	○	○	○		市来式
	55	D-17	Ⅲ	－	Ⅱ－6	深鉢	口縁部	外 ヘラ状工具による凹線文　貝殻刺突文 内 ナデ	黒褐	にぶい赤褐	－	－	－	○	○	○		市来式
	56	F-22	Ⅱ	一括	Ⅱ－6	深鉢	口縁部	外 貝殻刺突文　ナデ 内 ナデ	橙	橙	－	－	－	○	○	○	黒色鉱物	市来式
	57	C-17	Ⅲ	－	Ⅱ－6	深鉢	口縁部	外 凹線文　貝殻刺突文 内 ナデ	橙	橙	－	－	－	○	○		雲母	市来式
	58	E-16	Ⅲ	一括	Ⅱ－6	深鉢	口縁部	外 凹線文　貝殻刺突文 内 ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	－	－	－	○	○	○		市来式
	59	－	Ⅰ	一括	Ⅱ－6	深鉢	口縁部	外 S字状の沈線文　ナデ 内 沈線文　ナデ	橙	にぶい橙	－	－	－	○	○	○	雲母	市来式
	60	F-17	Ⅲ	一括	Ⅱ－6	深鉢	口縁部	外 ヘラ状工具による刺突文　凹線文 内 ナデ　指圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	16.8	－	－	○	○	○	雲母	市来式
	61	E-20	Ⅲ	－	Ⅱ－6	深鉢	口縁部	外 貝殻腹縁による刺突文　ナデ 内 ナデ	明赤褐	橙	－	－	－		○		礫	市来式
	62	F-18	Ⅳ	一括	Ⅱ－6	台付皿	底部	外 ヘラ状工具による刺突文 内 ナデ	赤褐	褐	－	7.8	－	○	○		雲母	市来式
	63	D-18	Ⅲ	一括	Ⅱ－6	台付皿	底部	外 ヘラ状工具による刺突文　刻目突帯文 内 ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	－	－	－	○		○		市来式
	64	E-17	Ⅲ	－	Ⅱ－6	深鉢	胴部	外 ヘラ状工具による刺突文 内 凹線文	赤褐	褐	－	－	－	○	○	○	雲母	市来式
	65	E-21	Ⅰ	－	Ⅱ－6	台付皿	脚部	外 沈線の影込み　ヘラ状工具によるナデ 内 ナデ	淡黄橙	橙	－	9.0	－	○	○	○	雲母・黒色鉱物	市来式
	66	C-16	Ⅲ	一括	Ⅱ－7	深鉢	口縁部～胴部	外 ヘラ状工具による刺突文　貝殻条痕文 内 貝殻条痕文　ナデ	明赤褐	橙	－	－	－	○	○	○		松山式
17	67	D-18	Ⅲ	一括	Ⅲ－1	深鉢	口縁部	外 沈線文 内 ミガキ	暗灰黄	暗灰黄	－	－	－	○		○		入佐式
	68	D-17	Ⅲ	一括	Ⅲ－1	深鉢	口縁部	外 沈線文 内 ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	－	－	－	○	○	○		入佐式
	69	E-12	Ⅲ	109, 185	Ⅲ－1	深鉢	口縁部～胴部	外 沈線文	にぶい黄橙	にぶい赤褐	－	－	－					入佐式
	70	E-12	Ⅲ	91, 94	Ⅲ－1	深鉢	口縁部～胴部	外 沈線文	褐	暗赤褐	－	－	－	○	○		雲母	入佐式

第４表　縄文時代の土器観察表（４）

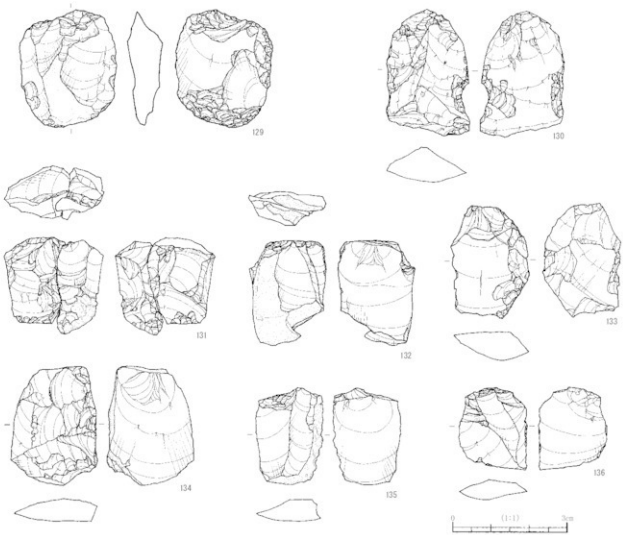
掲図番号	掲載番号	出土地点	層	取上番号	分類	器種	部位	器面調整	色調 外面	色調 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 他	備考
17	71	D-21	Ⅲ	－	Ⅲ－2	深鉢	口縁部	外：貝殻条痕文　ナデ 内：貝殻条痕文　ナデ	明褐	にぶい橙	－	－	－	○	○		礫・赤色粒	条痕文
	72	C-22	Ⅲ	－	Ⅲ－2	深鉢	口縁部	外：貝殻条痕文　工具ナデ 内：貝殻条痕文　ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	－	－	－		○		火山ガラス	条痕文
	73	D-21	Ⅲ	－	Ⅲ－2	深鉢	口縁部	外：貝殻条痕文　工具ナデ 内：貝殻条痕文　工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	－	－	－	○	○		雲母・礫	条痕文
	74	D-21	Ⅲ	－	Ⅲ－2	深鉢	口縁部	外：貝殻条痕文　工具ナデ 内：貝殻条痕文　工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－	－	○	○	○		条痕文
	75	E-25	Ⅲ	－	Ⅲ－2	深鉢	口縁部	外：貝殻条痕文　工具ナデ 内：貝殻条痕文　工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－	－	○	○	○		条痕文
	76	E-22	Ⅰ	－	Ⅲ－2	深鉢	口縁部	外：貝殻条痕文　ナデ 内：貝殻条痕文　工具ナデ	橙	橙	－	－	－	○	○		雲母	条痕文
18	77	－	Ⅰ	－	Ⅲ－2	深鉢	口縁部	外：貝殻条痕文　工具ナデ 内：貝殻条痕文　工具ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	－	－	－	○	○	○	雲母・火山ガラス	条痕文
	78	C-D-21	Ⅰ	－	Ⅲ－2	深鉢	口縁部	外：貝殻条痕文　ナデ 内：貝殻条痕文　ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	－	－	－	○	○	○	礫・赤色粒	条痕文
	79	D-21	Ⅲ	－	Ⅲ－2	深鉢	口縁部	外：貝殻条痕文　工具ナデ 内：貝殻条痕文　工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－	－	○	○	○		条痕文
	80	C-24	Ⅲ	－	Ⅲ－2	深鉢	口縁部	外：貝殻条痕文　工具ナデ 内：貝殻条痕文　ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	－	－	－	○	○		黒色鉱物	条痕文
	81	D-22	Ⅲ	－	Ⅲ－2	深鉢	口縁部	外：貝殻条痕文　ナデ 内：貝殻条痕文　工具ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	－	－	－	○	○	○	雲母・黒色鉱物	条痕文
	82	E-25	Ⅲ	－	Ⅲ－2	深鉢	口縁部	外：貝殻条痕文　工具ナデ 内：貝殻条痕文　工具ナデ	橙	橙	－	－	－		○		黒色鉱物	条痕文
	83	E-12	－	－	Ⅲ－2	深鉢	口縁部～胴部	外：貝殻条痕文　工具ナデ 内：貝殻条痕文　工具ナデ	褐	褐	44.4	－	－	○	○		礫	条痕文
	84	C-16	Ⅲ	－	Ⅲ－2	深鉢	口縁部～胴部	外：貝殻条痕文　工具ナデ 内：貝殻条痕文　工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	32.0	－	－		○	○		条痕文
	85	F-16	Ⅲ	一括	Ⅲ－2	深鉢	口縁部～胴部	外：貝殻条痕文　ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	19.4	－	－	○	○		礫	条痕文
	86	D-16	Ⅲ	一括	Ⅲ－2	深鉢	胴部	外：貝殻条痕文　ミガキ 内：ナデ	にぶい褐	明褐	－	－	－	○	○	○		条痕文
	87	D-21	Ⅲ	－	Ⅲ－2	深鉢	胴部	外：貝殻条痕文　工具ナデ 内：ナデ	橙	橙	－	－	－	○	○		雲母・赤色粒・黒色鉱物	条痕文
	88	F-13	Ⅲ	一括	Ⅲ－2	深鉢	底部	外：貝殻条痕文	明褐	明赤褐	－	8.0	－	○	○		雲母・赤色粒	条痕文
	89	D-16	Ⅲ	一括	Ⅲ－2	深鉢	底部	外：貝殻条痕文　ハケメ	にぶい黄橙	にぶい褐	－	10.5	－	○	○	○	赤いチャート	条痕文
	90	C-14	－	一括	Ⅲ－2	深鉢	底部	外：貝殻条痕文　ハケメ	にぶい黄橙	橙灰黄	－	7.7	－	○	○		雲母	条痕文
	91	D-23	Ⅲ	－	Ⅲ－2	深鉢	底部	外：貝殻条痕文　ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄	－	10.8	－	○	○	○	礫・雲母	条痕文
19	92	C-22	Ⅲ	－	Ⅲ－3	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	黒褐	黒褐	－	－	－	○	○		雲母	黒川式
	93	D-E-24	Ⅲ	－	Ⅲ－3	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	褐灰	褐灰	－	－	－	○	○		礫	黒川式
	94	－	－	－	Ⅲ－3	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	にぶい黄橙	黄灰	－	－	－	○	○	○		黒川式
	95	D-21	Ⅲ	－	Ⅲ－3	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄	－	－	－	○		○	礫・軽石	黒川式
	96	C-D-21	Ⅰ	－	Ⅲ－3	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－	－	○	○		雲母・赤色粒・礫	黒川式
	97	E-12	Ⅲ	一括	Ⅲ－3	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	にぶい黄	暗灰黄	－	－	－	○		○		黒川式
	98	C-D-21	Ⅰ	－	Ⅲ－3	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	灰褐	黒褐	－	－	－	○	○	○	礫・赤色粒	黒川式
	99	－	Ⅰ	－	Ⅲ－3	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	黄灰	黄灰	－	－	－		○		火山ガラス	黒川式
	100	E-12	Ⅲ	102・93	Ⅲ－3	浅鉢	口縁部～胴部	外：ミガキ 内：ミガキ	灰黄褐	黒褐	14.6	－	－	○				黒川式
	101	E-14	Ⅳ	一括	Ⅲ－3	浅鉢	口縁部～胴部	外：ミガキ 内：ミガキ	黄灰	黄灰	－	－	－		○			黒川式
	102	C-21	Ⅲ	－	Ⅲ－3	浅鉢	口縁部～胴部	外：ミガキ 内：ミガキ	灰黄褐	灰黄褐	－	－	－	○	○	○	礫・赤色粒	黒川式
	103	D-21	Ⅲ	－	Ⅲ－3	浅鉢	口縁部～胴部	外：ミガキ 内：ミガキ	にぶい褐	にぶい褐	－	－	－	○		○	礫	黒川式
	104	－	－	－	Ⅲ－3	浅鉢	口縁部～胴部	外：ミガキ 内：ミガキ	黄灰	黒褐	－	－	－	○	○			黒川式
	105	F-14	Ⅳ	一括	Ⅲ－3	浅鉢	口縁部～胴部	外：ミガキ 内：ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－	－	○	○		雲母	黒川式
	106	E-17	－	一括	Ⅲ－3	浅鉢	口縁部～胴部	外：ミガキ 内：ミガキ	灰黄	黄灰	－	－	－	○	○			黒川式
	107	E-14	Ⅳ	一括	Ⅲ－3	浅鉢	口縁部～胴部	外：ミガキ 内：ミガキ	黒褐	黒褐	21.6	－	－	○				黒川式
	108	F-18	－	一括	Ⅲ－3	浅鉢	胴部	外：ミガキ 内：ミガキ	灰	黒褐	－	－	－	○				黒川式
	109	E-16	Ⅲ	－	Ⅲ－3	浅鉢	口縁部～胴部	外：ミガキ 内：ミガキ	黄灰	オリーブ黒	26.4	－	－	○	○	○	雲母	黒川式
20	110	E-12	Ⅳ	一括	Ⅲ－4	浅鉢	口縁部～胴部	外：ミガキ 内：ミガキ	褐灰	黒褐	40.0	－	－		○		赤色粒	黒川式
	111	C-16	Ⅱ	－	Ⅲ－4	浅鉢	口縁部～胴部	外：ミガキ 内：ミガキ	褐灰	灰黄褐	33.6	－	－		○		雲母	黒川式
	112	E-14	Ⅲ	一括	Ⅲ－4	浅鉢	口縁部～胴部	外：ミガキ 内：ミガキ	黄灰	黄灰	21.8	－	－	○	○	○	雲母	黒川式
	113	E-24	Ⅲ	－	Ⅲ－4	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	黒褐	黒褐	17.5	－	－	○	○	○	礫	黒川式
	114	D-24	－	カクラン	Ⅲ－4	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	暗灰	暗灰	－	－	－	○	○	○	礫	黒川式
	115	C-21	Ⅲ	－	Ⅲ－4	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	灰黄褐	にぶい黄橙	－	－	－	○	○	○	礫・赤色粒	黒川式
	116	C-D-21	Ⅰ	－	Ⅲ－4	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄	－	－	－	○	○			黒川式
	117	C-13	－	一括	Ⅲ－4	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	黄灰	灰黄	－	－	－	○	○		雲母	黒川式
	118	E-12	Ⅰ	一括	Ⅲ－4	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	黒褐	黒褐	18.0	－	－	○				黒川式
	119	F-17	Ⅲ	一括	Ⅲ－4	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	黄灰	暗灰黄	－	－	－	○	○	○		黒川式
	120	D-19	－	－	Ⅲ－4	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	黄灰	黄灰	－	－	－	○	○	○		黒川式
	121	C-22	Ⅲ	－	Ⅲ－4	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	黒褐	暗灰黄	－	－	－	○	○	○		黒川式
21	122	F-14	Ⅲ	一括	Ⅲ－4	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	にぶい赤褐	灰褐	－	－	－	○	○			黒川式
	123	F-14	Ⅳ	一括	Ⅲ－4	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	にぶい褐	褐	－	－	－	○		○		黒川式
	124	E-21	Ⅰ	－	Ⅲ－4	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	オリーブ黒	灰	－	－	－	○	○	○		黒川式
	125	E-25	－	カクラン	Ⅲ－4	浅鉢	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	暗灰黄	にぶい黄	12.2	－	－	○	○		赤色粒	黒川式
	126	E-18	Ⅲ	一括	Ⅲ－4	浅鉢	口縁部～胴部	外：ミガキ 内：ミガキ	黄灰	灰	16.2	－	－	○	○			黒川式
	127	D-15	Ⅲ	－	Ⅲ－4	浅鉢	完形	外：ミガキ 内：ミガキ	灰黄褐	にぶい赤褐	12.7	3.6	7.9	○	○	○	礫	黒川式
	128	F-13	Ⅲ	一括	Ⅲ－4	小型深鉢	胴部～底部	外：ミガキ 内：ナデ	灰	にぶい黄	－	－	－	○		○		黒川式

石器（第22・23図　129～140）

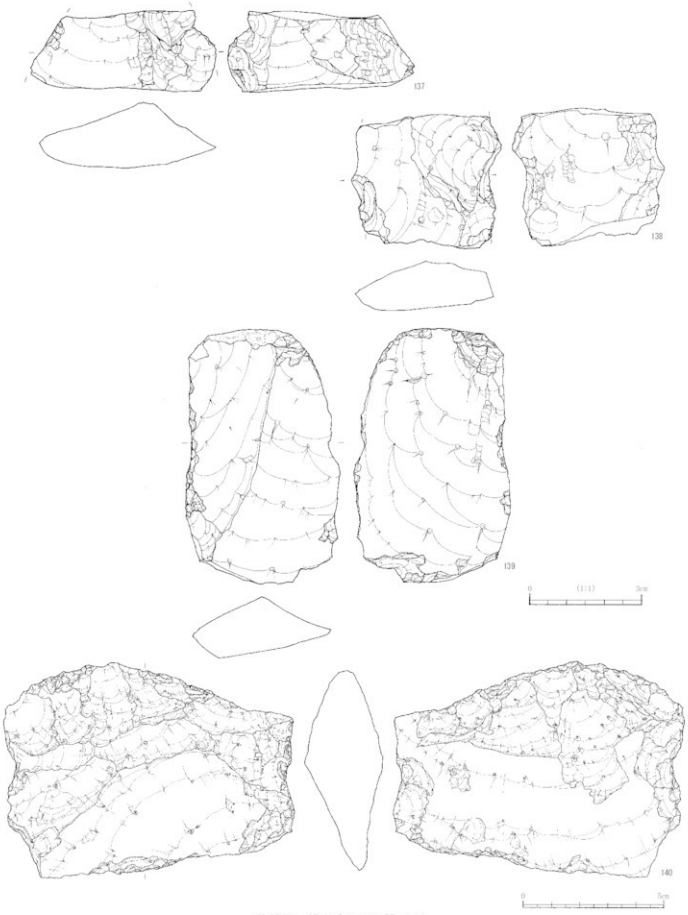
129は白色の不純物を含む腰岳産黒曜石の楔形石器である。上下に剥離がみられ断面は大きく剥がれている。130は日東産黒曜石の二次加工剥片である。両縁に剥離痕が密に施されている。131・132は腰岳産黒曜石で接合資料である。131は剥片で接合資料である。132の打面は自然面でそこから押圧している。133の石材はチャートで調整剥片である。主要剥離面が密に調整されている。134・135は腰岳産黒曜石の剥片である。136は130と同様に二次加工剥片である。打面付近に調整剥離がみられる。137・138の形状は切断剥片で，削器として使用された可能性がある。139は片側縁部の主要剥離面を使用しすぎた結果，微細な剥離が入った状態と考えられる資料である。140は日東産黒曜石の削器である。刃部を形成しており，剥離が密にある上方部分で，剥離の凹凸がはっきりしている面は掻器として使用し，下の剥離面は削器として使用したものと考えられる。

石鏃（第24図　141～161）

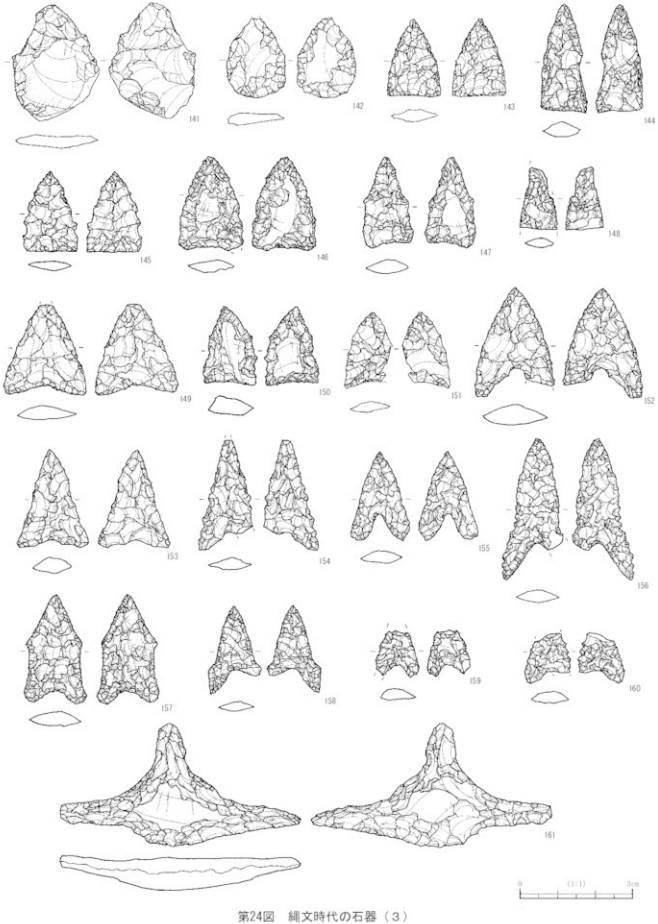
141は腰岳産黒曜石，142は針尾産黒曜石でどちらも石鏃の未製品である。石鏃の形状に至らないが，両側縁部の上方を尖るように剥離している。143は桑ノ木津留産黒曜石で，二等辺三角形を呈する石鏃である。両側縁部の剥離痕は小さいが丁寧に施されている。144は縦に長く安定しない形状である。145の石鏃の素材はチャートで，先端がやや伸びる。薄手の二等辺三角形の形状である。両側縁部は鋸歯状に剥離されている。146は三角形を成し，両側縁部はやや丸みを帯びる。147は二等辺三角形状を呈する。腹面には主要剥離面が残されている。148の石材は腰岳産黒曜石である。二等辺三角形を呈する小さいものである。先端と腹部から下を欠損するが，両側縁部の剥離が細かいのが特徴的である。149は頁岩製の打製石鏃である。三角形を呈し，両側縁部の剥離痕は一部みられる。先端は欠損している。150は腹部から先端部にかけて背面に反る形状である。黒曜石の打製石



第22図　縄文時代の石器（1）



第23図　縄文時代の石器（２）



第24図　縄文時代の石器（３）

第25図　縄文時代の石器（４）

鏃と思われる。腹部と両側縁部に剥離面が残る。151は基部の中心を浅く剥離し片脚を欠損している。152は腰岳産黒曜石の打製石鏃である。両側縁部は丸く，厚みを帯びる形状である。片脚を欠損するが，基部は丸く丁寧に剥離されている。153は頁岩製である。中心にやや厚みがある二等辺三角形の形状である。154も頁岩製の石鏃である。先端部と片脚を欠損しているが，基部に丸味を帯び，両側縁部は剥離痕が明瞭に残る。やや縦に伸びる形状である。155はチャートの石鏃である。二等辺三角形を呈し，脚部は長く剥離痕も明瞭である。156は腰岳産黒曜石の打製石鏃で，二等辺三角形を呈しており，先端と脚部が縦に伸びる形状である。先端はやや丸味を帯び，両側縁部は鋸歯状に剥離痕が明瞭に残る。157は腰岳産黒曜石の石鏃である。五角形を呈し，両側縁部は丁寧に剥離され，脚端部も丸く形成されている。先端は鋭利だが，基部は浅い。158は玉髄製の小型の二等辺三角形鏃である。両側縁と基部の中央部を深く形成している。159・160は黒曜石の石鏃である。いずれも先端と片脚を欠くが，厚手で小さい。161は頁岩製の石匙である。刃部の中央部に多くの調整剥離がみられる。刃部は微細な剥離痕も残る。腹部には擦痕が残る。

石斧（第25図　162～177）

162～177は石斧である。162は頁岩製の打製石斧である。刃部は欠けており，表面と裏面の剥離面が少ないが，比較的大きい形状である。163も頁岩製である。敲打痕や擦痕はなく，刃部が一部欠けている。形状も安定しており，丁寧に研磨されている。164も頁岩製の石斧である。擦痕と研磨痕が残っており，裏面が平坦なのに対して表面の膨らみがやや目立つ。欠損した部分はきれいに残っている。165は基部の中心部に剥離痕が目立ち，擦痕と丁寧な研磨痕が残る。刃部は丸く残存状態は良好である。167の裏面は丁寧に研磨され，刃部にかけて鋭く仕上げている。表面の右側面に敲打痕がみられる。168・170・176は蛇紋岩製の磨製石斧である。168は縦に伸びる形状である。刃部は丸く角はやや欠けている。裏面は接合した面から一部剥がれている。頭部から刃部まで丁寧に研磨されている。169は表面と裏面に研磨痕が残る。表面の左側面に敲打痕が一部みられる。170は腹部・側面が平坦面を成している。研磨した痕跡が明瞭で，断面形状は楕円形である。171は頁岩製の打製石斧である。表面・裏面ともに擦痕が多く，敲打痕は一部みられる。172は安山岩製の打製石斧である。中心で欠けており断面は丸い。表面・裏面は膨らみ，頭部も平坦面を成す。173はホルンフェルス製の石斧である。基部の膨らみが非常に強く，裏面の剥離面も大きい。表面の敲打痕は少なく，刃部も欠けている。中心には一部研磨の痕跡が残る。174は頁岩製の石斧である。刃部の鋭利さがなく，丸みを帯びている。175は表面頭部に礫面を残し，裏面は剥離面で構成される。176・177は表面・裏面・両側面ともに研磨が残っている。腹部中心から欠けているため全体の大きさが不明だが，小さく成形されている。

石皿（第26・27図　178～181）

178は菱形の形状で中心部から側面にかけて磨痕が残る。断面の厚みは均一である。179は中心部から半分を欠く資料である。側面は丸味を帯びる形状である。180は皿の半分を欠く資料で，側面から中心部に緩やかに凹みがみられる。181は完形である。大きさはやや小さく，角の側面は丸く断面に厚みがある。中心部はやや傾斜し，伸びる形状である。

砥石（第27図　182）

182は磨面の中心部が丸く凹んでいる。断面は分厚いため，全体の形状も大きい可能性がある。

凹石（第28図　183）

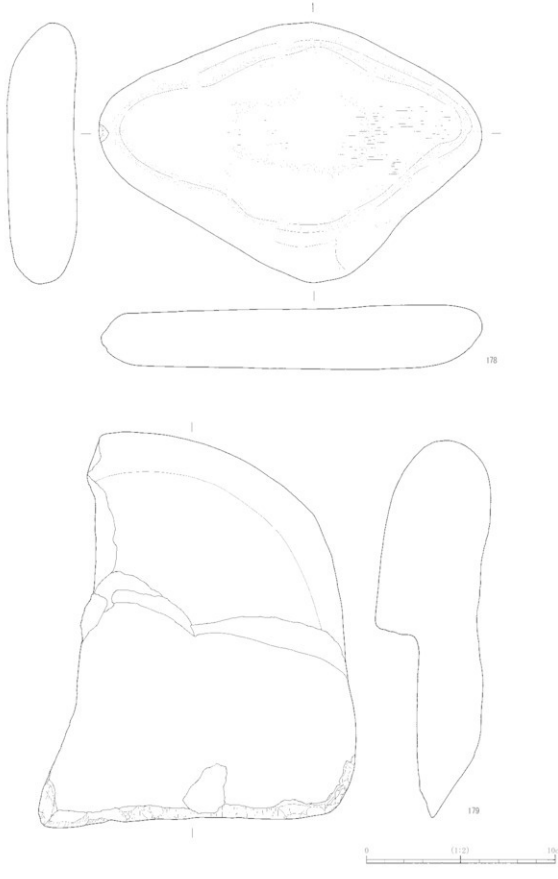
183は花崗岩質の凹石である。扁平な面の中心部に凹みがあり，磨痕がみられる。両面とも使用されたと考えられる。

磨石（第28図　184）

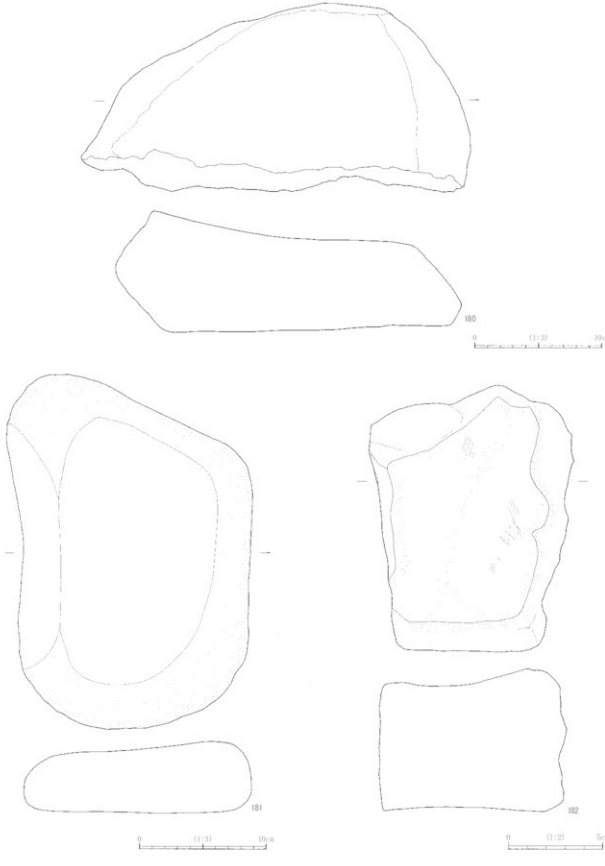
184は砂岩質の磨石である。丸い形状で，中心部に敲打痕が多く見られる。

石錘（第28図　185）

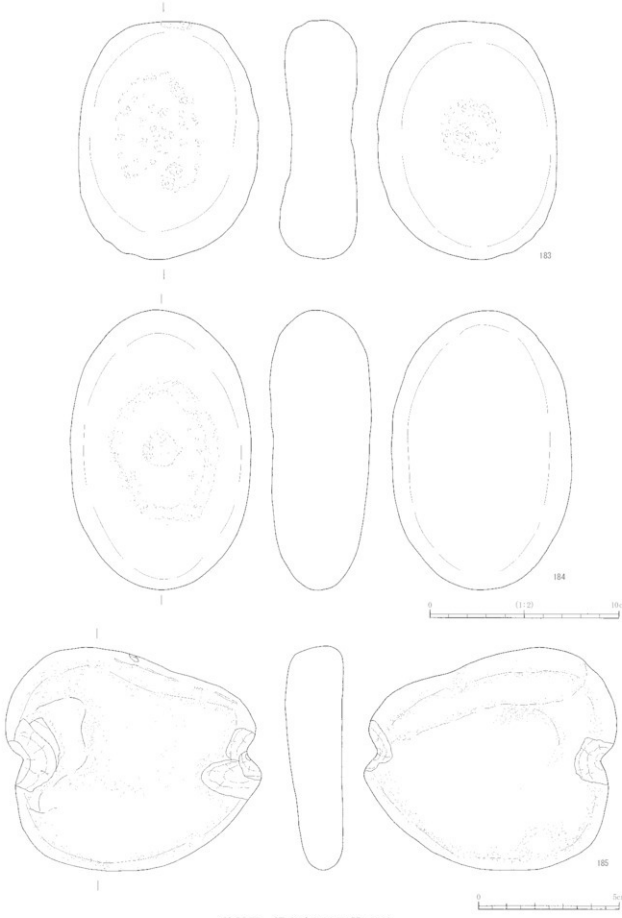
185は安山岩の石錘である。楕円形状を呈し，断面は平坦である。両方の側面に紐掛部として使用された凹みがみられる。



第26図　縄文時代の石器（５）



第27図　縄文時代の石器（６）



第28図　縄文時代の石器（７）

第５表　縄文時代の石器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層	器種	石材	産地	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
22	129	－	C・D-21	Ⅲ	楔形石器	黒曜石	腰岳	2.97	2.59	0.92	6.75	
	130	－	D-24	Ⅲ	二次加工剥片	黒曜石	日東	3.25	2.19	1.04	6.29	
	131	－	C-25	Ⅲ	剥片	黒曜石	腰岳	2.50	2.56	1.44	6.94	
	132	－	D-25	Ⅲ	剥片	黒曜石	腰岳	2.67	2.00	0.88	3.25	
	133	－	C-24	Ⅲ	調整剥片	チャート		2.91	2.05	0.84	4.91	
	134	－	D-21	Ⅲ	剥片	黒曜石	腰岳	3.08	2.29	0.70	4.45	
	135	－	D-22	Ⅲ	剥片	黒曜石	腰岳	2.48	1.75	0.62	2.48	
	136	一括	E-24	Ⅲ	二次加工剥片	黒曜石	腰岳	2.08	1.80	0.52	1.75	
23	137	－	E-22	Ⅲ	剥片	黒曜石	日東	2.16	4.86	1.81	19.17	
	138	－	E-21	Ⅰ	剥片	黒曜石	日東	3.56	3.97	1.29	21.15	
	139	－	E-21	Ⅲ	微細剥離剥片	黒曜石	日東	6.71	4.11	1.63	38.13	
	140	一括	F-22	Ⅲ	使用痕剥片	黒曜石	日東	7.59	10.20	2.78	192.31	
24	141	－	C-24	Ⅲ	石鏃未製品	黒曜石	腰岳	3.01	2.28	0.46	2.40	
	142	－	D-21	Ⅲ	石鏃未製品	黒曜石	針尾	2.10	1.55	0.32	0.92	
	143	－	D-22	Ⅲ	石鏃	黒曜石	桑ノ木津留	2.01	1.43	0.34	0.79	
	144	一括	F-16	Ⅲ	石鏃	黒曜石	在地ではない	2.85	1.20	0.42	1.20	
	145	－	－	－	石鏃	チャート		2.11	1.44	0.26	0.80	
	146	－	F-18	Ⅲ	石鏃	黒曜石	腰岳	2.49	1.68	0.47	1.40	
	147	－	D-15	Ⅲ	石鏃	黒曜石	腰岳	2.41	1.29	0.38	0.90	
	148	－	C-22	Ⅲ	石鏃	黒曜石	腰岳	1.64	0.96	0.30	0.42	
	149	－	G-15	Ⅲ	石鏃	頁岩		2.37	2.15	0.37	1.60	
	150	一括	C-14	－	石鏃	黒曜石		2.09	1.42	0.58	1.30	
	151	－	D-22	Ⅲ	石鏃	黒曜石	腰岳	1.98	1.24	0.34	0.58	
	152	一括	F-14	Ⅳ	石鏃	黒曜石	腰岳	2.87	2.07	0.53	2.10	
	153	一括	D-14	－	石鏃	頁岩		2.57	1.86	0.46	1.40	
	154	一括	－	－	石鏃	頁岩		2.92	1.43	0.33	0.90	
	155	一括	E-14	Ⅳ	石鏃	チャート		2.32	1.54	0.32	0.70	
	156	一括	D-25	Ⅲ	石鏃	黒曜石	腰岳	3.73	1.63	0.35	1.16	
	157	一括	F-17	Ⅲ	石鏃	黒曜石	腰岳	2.89	1.61	0.41	1.60	
	158	一括	F-13	Ⅳ	石鏃	玉髄		2.26	1.38	0.26	0.50	
	159	一括	F-22	Ⅱ	石鏃	黒曜石	腰岳	1.19	1.14	0.31	0.37	
	160	－	－	－	石鏃	黒曜石	腰岳	1.34	1.24	0.34	0.40	
	161	カクラン	D-11	－	石匙	頁岩		3.22	6.28	0.81	8.50	
25	162	－	F-16	Ⅲ	打製石斧	頁岩		12.86	5.43	3.10	275.00	
	163	一括	F-14	Ⅳ	磨製石斧	頁岩		9.60	4.98	2.80	175.70	
	164	－	E-17	－	磨製石斧	頁岩		8.85	5.45	3.25	197.00	
	165	一括	D-17	－	磨製石斧	砂岩		9.18	5.95	2.90	241.00	
	166	－	D-20	Ⅲ	磨製石斧	砂岩		8.00	5.67	2.90	205.50	
	167	－	F-17	Ⅲ	磨製石斧	ホルンフェルス		6.60	5.28	3.30	143.30	
	168	－	E-15	Ⅴ	磨製石斧	蛇紋岩		10.00	3.66	1.40	66.00	
	169	－	F-18	Ⅲ	磨製石斧	頁岩		8.96	5.80	3.10	213.50	
	170	－	F-17	Ⅲ	磨製石斧	蛇紋岩		7.80	4.90	2.00	95.10	
	171	一括	G-18	Ⅲ	打製石斧	頁岩		8.26	5.46	2.90	159.80	
	172	－	D-17	Ⅲ	打製石斧	安山岩		6.53	4.90	3.93	151.40	
	173	－	D-19	Ⅲ	磨製石斧	ホルンフェルス		10.46	6.13	3.25	277.00	
	174	－	C-17	Ⅲ	磨製石斧	頁岩		4.88	4.80	2.50	77.90	
	175	一括	C-16	Ⅱ	打製石斧	頁岩		10.50	5.16	2.15	161.90	
	176	－	C-21	－	磨製石斧	蛇紋岩		6.15	2.92	1.90	56.90	
	177	一括	C-21	Ⅰ	磨製石斧	頁岩		6.54	2.13	1.35	28.00	
26	178	－	C-21	Ⅲ	石皿	砂岩		20.2	13.8	3.7	1300.0	
	179	－	－	Ⅲ	石皿	砂岩		16.00	20.50	5.50	2300.00	
27	180	－	－	－	石皿	花崗岩		14.40	30.60	9.10	5600.00	
	181	－	E-15	Ⅲ	石皿	砂岩		27.00	18.60	5.60	4900.00	
	182	－	E-24	Ⅲ	砥石	砂岩		14.1	10.7	7.5	1660.0	
28	183	－	G-22	表一括	凹石	花崗岩		12.5	9.5	4.0	620.0	
	184	－	D・E-24	カクラン	磨石	砂岩		14.8	9.6	5.1	1130.0	
	185	－	C-21	Ⅲ	石錘	安山岩		7.80	8.75	2.10	190.00	

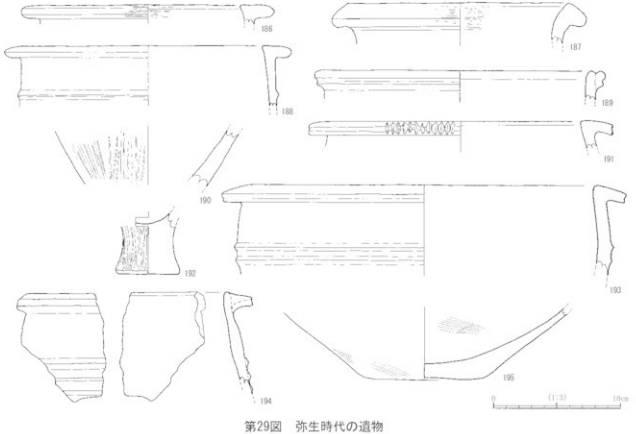
第５節　弥生時代の調査

１　調査の概要

弥生時代の遺構は確認されなかった。遺物も他の時代の遺物と比して少数量しか出土していない。

２　遺物（第29図　186～195）

弥生時代の土器は，主にⅢ層から中期前半の入来Ⅰ式・Ⅱ式のほか，後期の松木薗式の壺の底部片が出土した。186は188と同様に口縁部が横方向に伸びる。ナデ調整である。187の口縁部は垂れ下がる。入来Ⅰ式の壺の口縁部である。内面は一部に刷毛目調整が残る。188は入来Ⅰ式の甕の口縁部である。口縁端部は丸く横に伸び，口縁部下に突帯を１条施している。外面・内面ともにナデ調整を施している。189は口縁部先端の平坦面と口縁部上面に凹みがみられる。口縁部は短いが，口縁部断面形状は入来Ⅱ式に近い形状である。190～194は入来Ⅱ式の甕である。191の口縁部はやや垂れ下がり横に伸びている。口唇部に刻目を施した後，沈線を入れている。横方向のナデ調整である。190は胴部片で刷毛目調整がみられる。192は入来Ⅱ式の甕の底部である。外面は縦方向のミガキで丁寧に調整されている。底面は風化が激しい。193は口縁部がやや垂れ下がり口縁部先端が凹んでいる。口縁部下に断面三角形状の突帯を２条施している。外面内面ともに横方向のナデ調整を施す。194は193と同様の器形を呈する。内面にヘラ状工具による横方向のナデ調整が施される。口縁部下の突帯は３条施されている。193と同一個体の可能性がある。195は弥生時代後期の松木薗式の壺の底部と思われる。ややあげ底の底部から外側に大きく開いている。外面に一部刷毛目調整が残る。



第29図　弥生時代の遺物

第６表　弥生時代の土器観察表

挿図番号	図版番号	出土地点	層	取上番号	分類	器種	部位	器面調整	色調 外面	色調 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 他	備考
29	186	C-17	Ⅲ	一括	弥生土器	壺	口縁部	外 ナデ 内 ナデ	橙	橙	20.0	－	－	○	○		赤色粒	入来Ⅰ式
	187	D-15	Ⅲ	－	弥生土器	壺	口縁部	外 ナデ　ハケメ　ナデ 内 ハケメ　ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	20.0	－	－	○	○		雲母	入来Ⅰ式
	188	C・D-16	Ⅲ	一括	弥生土器	甕	口縁部	外 ナデ 内 ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	22.8	－	－	○	○		礫・黒色鉱物	入来Ⅰ式
	189	E-17	Ⅲ	－	弥生土器	甕	口縁部	外 ナデ 内 ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	23.0	－	－	○	○	○		入来Ⅰ式
	190	E-13	Ⅲ	一括	弥生土器	甕	胴部	外 ハケメ　ナデ 内 ナデ	橙	橙	－	－	－	○	○		雲母	入来Ⅱ式
	191	D-16	Ⅲ	－	弥生土器	甕	口縁部	外 刻目文 内 ナデ	にぶい橙	橙	24.0	－	－	○	○		雲母・礫・砂粒・黒色鉱物	入来Ⅱ式
	192	C-17	Ⅲ	－	弥生土器	甕	底部	外 ナデ　ミガキ 内 ナデ	橙	にぶい橙	－	5.2	－	○			砂粒	入来Ⅱ式
	193	C-14	－	トレンチ	弥生土器	甕	口縁部	外 ナデ 内 ナデ	橙	橙	28.2	－	－		○	○	礫	入来Ⅱ式
	194	C-14	－	トレンチ	弥生土器	甕	口縁部	外 ナデ 内 ナデ	橙	橙	－	－	－	○		○	礫	入来Ⅱ式
	195	F-18	Ⅲ	一括	弥生土器	壺	底部	外 ハケメ　ナデ 内 ハケメ　ナデ	橙	橙	－	8.4	－	○	○		礫・雲母	松木薗式

第６節　古墳時代の調査

１　調査の概要

古墳時代の調査では，２基の土坑が成川式土器を伴って検出された。遺物は主にⅢ層から成川式土器の甕・壺・高坏が出土している。

２　遺構

土坑２号（第30図）

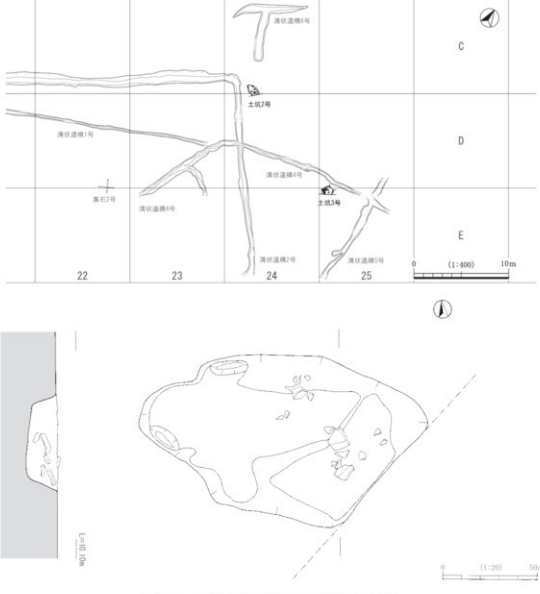
検出状況　C・D－24区，Ⅲ層で検出された。

形状・規模　約120㎝×90㎝の楕円形を呈する。一部が後世の攪乱により削平されている。検出面から床面までの深さは約20㎝である。

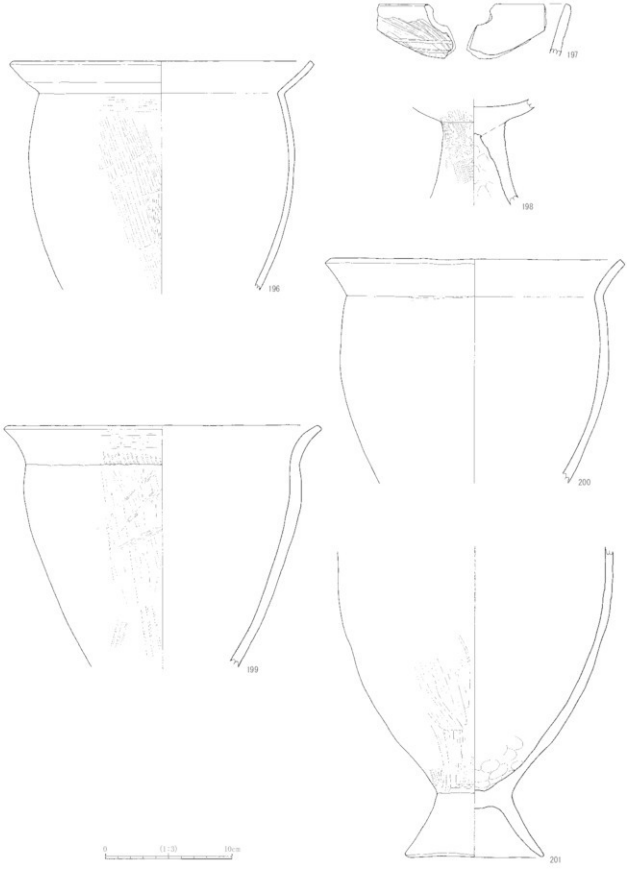
埋土　埋土は暗褐色の砂質土である。炭化物を含んでいる。

出土遺物（第31図）

196は甕の口縁部から胴部片である。口縁部が大きく外側に開く器形である。口縁部先端はやや内湾し，全体的に薄く形成されている。外面は縦方向のヘラ状工具によるナデ調整を施し，内面は一部にケズリ調整がみられる。198は中津野式段階と思われる高坏の脚部である。脚部外面は縦方向の刷毛目調整が明瞭で，坏部内面はミガキ調整がみられる。胎土には石英・長石のほか，雲母が多く含まれている。197は縄文時代晩期の深鉢の口縁部である。口縁部外面に貝殻条痕文を施し，内面はナデ調整である。199・200・201も中津野式段階の甕と思われる。199・200は口縁部が外反し，口縁部外面に縦方向の刷毛目調整と横方向のナデ調整が施され，胴部はケズリ調整が目立つ。胴部の張りが弱く，脚部にかけてすぼまる器形である。201は脚部のくびれから胴部へ縦方向にヘラ状工具による刷毛目調整が施され，胴部外面は一部にヘラケズリ調整がみられる。内面は指圧痕が多く残り，脚部は『ハ』の字状に開き，先端部は丁寧にナデ調整されている。



第30図　古墳時代の遺構配置図及び土坑２号



第31図　土坑２号出土遺物

土坑３号（第32図）

検出状況　Ｄ・Ｅ－25区，Ⅲ層で検出された。

形状・規模　約120cm×90cmの楕円形を呈する。一部が後世の攪乱により削平されている。検出面から床面までの深さは約10cmである。

埋土　埋土はにぶい赤褐色土である。

出土遺物

202は中津野式の甕の口縁部から胴部である。外面・内面ともに縦方向刷毛目調整である。底部付近には煤が付着している。203は同時期の壺である。口縁部は欠損しており，頸部から底部まで残存している。外面は丁寧な刷毛目調整で，底部付近はケズリ調整もみられる。内面もヘラ状工具による横方向の刷毛目調整が明瞭に残っている。204の口縁部は短く，口縁部径が胴部最大径と同じ大きさである。頸部の屈曲も緩やかである。外面・内面ともに刷毛目調整が施されている。

第32図　土坑３号及び出土遺物

第33図　土坑３号出土遺物

第7表　土坑内遺物観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	出土地点	層	取上番号	種別	器種	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	色調 外面	色調 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 他	備考
31	196	SK-2	C-24	Ⅲ	カクラン	成川式土器	壺	口縁～胴部	ハケメ ナデ	ハケメ	にぶい黄橙	橙灰黄	24.2	－	－	○	○	○		
	197	SK-2	C-D-24	Ⅲ	カクラン	縄文土器	深鉢	口縁部	ヘラ状工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄	－	－	－	○			赤色粒・雲母	
	198	SK-2	C-D-24	Ⅲ	－	成川式土器	高坏	胴部～脚部	ハケメ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	－	－	－	○	○	○	赤色粒・雲母	
	199	SK-2	C-D-24	Ⅲ	7・9・10・12	成川式土器	壺	口縁～胴部	ハケメ ナデ	ハケメ	にぶい黄橙	明黄褐	25.1	－	－	○	○	○	赤色粒・雲母	煤付着
	200	SK-2	C-24	Ⅲ	36・22・39・37・27・21・11・43・25・22・26・38・24・35・20・19	成川式土器	壺	口縁～胴部	ハケメ	ナデ	橙	にぶい褐	23.0	－	－	○	○	○	赤色粒・雲母	
	201	SK-2	C-D-24	Ⅲ	29・30	成川式土器	壺	胴部～脚部	ハケメ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	－	11.0	－	○	○	○	赤色粒・雲母	煤付着
32	202	SK-3	E-24	Ⅲ	32・34・42・17・16・19	成川式土器	壺	口縁～胴部	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ	浅黄橙色	にぶい黄橙色	26.6	－	－	○	○	○	雲母・赤色粒	
	203	SK-3	D-E-24・25	Ⅲ	24・25・31・35・45	成川式土器	壺	頸部～胴部	ハケメ	ハケメ ナデ	にぶい黄橙	浅黄	－	－	－	○	○	○		
33	204	SK-3	E-24	Ⅲ	7・22・30・36・37・39・43・44・45・46	成川式土器	壺	口縁～胴部	ハケメ	ハケメ	にぶい橙	浅黄橙	26.0	－	－	○	○		雲母・軽石	

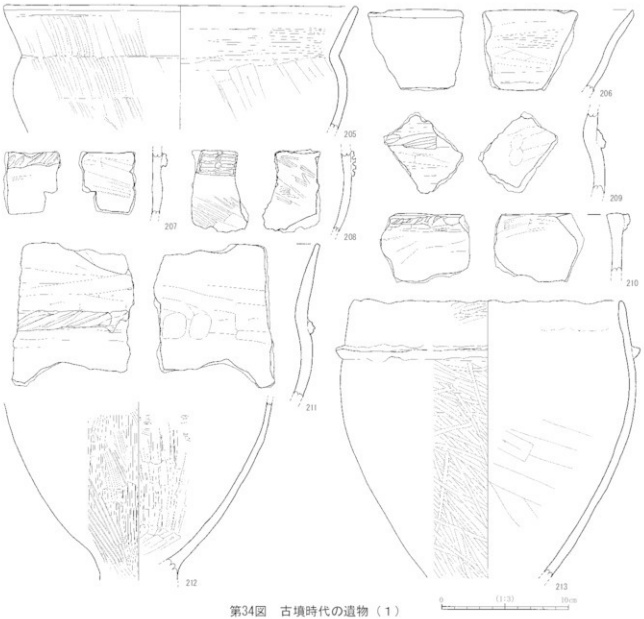
3　遺物

古墳時代の土器は，主にⅢ層から出土した。成川式土器の甕・壺・高坏・小型器種が出土している。

甕形土器（第34図　205～213）

205は古墳時代の中津野式の甕である。直行する口縁部は外側に開き，胴部は大きく膨らんでいる。外面はヘラ状工具による刷毛目調整が施され，口縁部内面は横方向の刷毛目調整が施されている。口縁部外面は煤が付着している。206は内面にヘラ状工具による横方向のナデ調整が施されている。外面に一部煤が付着している。207も同様に突帯に斜格子状に刻目が施されている。

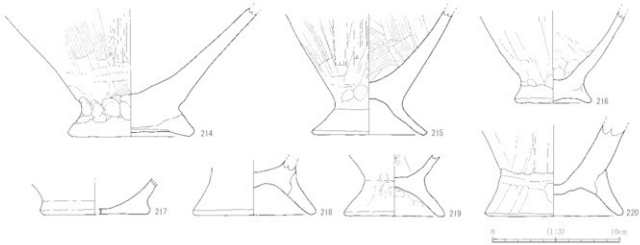
208は甕の胴部である。一条の幅広突帯をヘラ状工具で横方向に３条沈線を施した後，縦方向に工具を押し当てて施文している。209は内面に一部指圧痕が残る。210口縁部外面に刻目突帯を施す甕の口縁部である。突帯の貼付けの接合痕は明瞭に残る。外面は刷毛目調整で内面は横方向のミガキ調整である。211は口縁部が緩やかに外反するものである。211は209と同様に屈曲部付近に刻目突帯が施されている。屈曲部に幅１cm程度の突帯を貼付けた後，ヘラ状工具により斜格子状に刻目が施されている。外面・内面ともに横方向のナデ調整を施している。212は甕の胴部である。外面にヘラ状工具による縦方向の刷毛目調整を施し，内面は縦方向のケズリ調整を施している。調整は丁寧に施されている。213は古墳時代の終末期の笹貫式の甕である。口縁部は内傾し，突帯付近に付け足した痕跡が明瞭に残る。口縁部から胴部にかけてやや膨らみを呈し，胴部最大径が全体の器形の上方に位置している。口縁部外面には横方向のミガキ調整が一部施されており，胴部の突帯下から底部にかけてミガキ調整が施されている。断面三角形状の突帯の接合痕は明瞭で，突帯貼付け後のナデ調整が粗雑である。内面にナデ調整と一部ヘラケズリ調整を施している。また，突帯下の外面と一部内面に黒斑が残る。



第34図　古墳時代の遺物（１）

壺形土器の底部（第35図　214～220）

214は脚部から胴部に大きく開く器形である。断面の厚みは最大2.5cmである。屈曲部の指圧痕が明瞭に残り，底部を貼付けて成形した接合痕も残る。外面はヘラ状工具による縦方向の刷毛目調整を施し，一部指押さえ痕が残る。底面にも薄い粘土を貼付け，器形を安定させている。215は底部に１条の粘土帯を貼付けた接合痕が残る。外面は一部ヘラ状工具によるナデ調整がみられる。断面は２cmの厚みがあり，器形は安定している。216も同様に屈曲部に指圧痕が残っている。器形の大きさは小さい。接合した底部は指おさえや掘部を指で伸ばすことで製作されている。内面にも指圧痕がのこる。217は平底で安定した底部である。218は底部の天井部がややふくらみをもち，脚端部が平坦面をなすものである。天井部にやや指おさえがみられる。219はやや小さめの底部で，屈曲部のくびれが明瞭である。220の底部の天井部は平坦で，脚部は低くゆるやかに外反しながら伸びるものである。胴部断面と比較すると脚部断面は薄く成形されている。外面・内面にヘラ状工具によるナデ調整が施されている。



第35図　古墳時代の遺物（２）

第８表　古墳時代の土器観察表（１）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	取上番号	分類	器種	部位	器面調整	色調 外面	色調 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 他	備考
34	205	F-12	Ⅲ	一括	成川式土器	壺	口縁部	外：ヘラ状工具によるハケ 内：ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙	28.0	－	－	○	○		雲母	煤付着
	206	F-17	Ⅲ	一括	成川式土器	壺	口縁部	外：ヘラ状工具によるナデ	橙	橙	－	－	－	○	○		雲母	煤付着
	207	F-17	Ⅲ	－	成川式土器	壺	胴部	外：ヘラ状工具による刻目突帯	にぶい黄	にぶい黄橙	－	－	－		○	○		
	208	F-18	Ⅲ	－	成川式土器	壺	胴部	外：ヘラ状工具による沈線文 内：ミガキ	にぶい黄橙	褐灰	－	－	－	○	○		雲母・赤色粒	
	209	F-16	Ⅲ	－	成川式土器	壺	胴部	外：ヘラ状工具によるナデ 内：指圧痕	褐	にぶい褐	－	－	－	○	○		雲母・礫	
	210	C-16	Ⅲ	－	成川式土器	壺	口縁部	外：刻目突帯 内：ナデ	にぶい黄橙	灰黄	－	－	－	○		○	雲母・礫	
	211	F-13	Ⅳ	一括	成川式土器	壺	口縁部	外：ヘラ状工具による刻目突帯 内：ヘラケズリ	にぶい褐	褐灰	－	－	－	○	○		雲母	
	212	E-12	Ⅲ	一括	成川式土器	壺	胴部	外：ヘラ状工具によるハケメ 内：ヘラケズリ	にぶい黄橙	橙	－	－	－	○	○		礫・雲母	
	213	D-17	Ⅲ	－	成川式土器	壺	口縁部～胴部	外：ミガキ　ナデ 内：ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい褐	21.2	－	－	○		○	雲母・礫	
35	214	C-21	Ⅲ	－	成川式土器	壺	胴部～底部	外：指圧痕　ヘラ状工具によるハケメ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	－	9.8	－		○		雲母	
	215	F-15	Ⅲ	一括	成川式土器	壺	底部	外：ヘラ状工具によるナデ 内：ヘラ状工具によるナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	－	9.1	－	○	○		雲母・礫	
	216	D-18	Ⅳ	－	成川式土器	壺	底部	外：指圧痕 内：指圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	6.0	－		○		雲母・礫	
	217	D-24	－	－	成川式土器	壺	底部	外：ナデ 内：ナデ	浅黄橙	灰黄褐	－	8.7	－	○	○		礫	
	218	E-19	Ⅰ	一括	成川式土器	壺	底部	外：指圧痕	にぶい黄	にぶい黄	－	9.6	－	○	○		礫・赤いチャート	
	219	C-24	Ⅲ	－	成川式土器	壺	底部	外：指圧痕　ハケメ 内：指圧痕　ハケメ	明黄褐	明黄褐	－	8.0	－	○	○		雲母・黒色鉱物	
	220	D-18	Ⅲ	－	成川式土器	壺	底部	外：工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	10.8	－	○	○		礫	

壺形土器（第36図　221～225）

221は胴部に幅広突帯を一条施す壺形土器の肩部である。胴部最大径の上方に突帯を施し，突帯の幅は２cm程度でヘラ状工具による沈線文が施されている。内面は指圧痕が残る。222・224は施文が類似している。一条の幅広突帯に縦方向の沈線を斜めに施した後，横方向沈線を施している。これらは古墳時代終末期の笹貫式土器の壺の肩部と思われる。223も壺の肩部である。断面台形状で少し厚めの突帯を一条貼付けている。施文はヘラ状工具により横方向の沈線の後，縦方向に沈線を施している。外面に一部ケズリ調整がみられる。224は幅広突帯を一条貼付けた後，その上にもう一条突帯を貼付けた後，ヘラ状工具による縦方向の刻目を施し，その下に横方向の沈線を施している。外面はヘラ状工具による刷毛目調整を施している。225は小型の壺の胴部片ある。

小型壺（坩）（第36図　226～231）

226は胴部最大径が10.6cmである。屈曲部の上に一部刷毛目調整がみられ，胴部下の外面・内面ともにヘラケズリ調整が施されている。227の口縁部外径は約15cmで比較的大きい器形と考えられる。断面に厚みがあり外面はヘラ状工具による横方向のナデ調整で，内面に一部ケズリ調整がみられる。228は口縁部がやや内傾し屈曲部までのびるものである。内面は丁寧にナデ調整が施されている。229は口縁部外面に丹塗りを施すものである。230の口縁端部は先細り，やや外反している。外面下半に一部丹塗りが施されている。外面は横方向のミガキ調整を施している。231の口縁部は内湾し，頭部へ丸味を帯びている。

第36図　古墳時代の遺物（３）

第９表　古墳時代の土器観察表（２）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	取上番号	分類	器種	部位	器面調整	色調 外面	色調 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 他	備考
36	221	F-16	－	一括	成川式土器	壺	胴部	外：ヘラ状工具による沈線文 内：指圧痕	灰褐	赤褐	－	－	－	○	○		褐	
	222	C-19	－	－	成川式土器	壺	胴部	外：ヘラ状工具によるハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－	－	○	○		チャート・褐	
	223	F-12	Ⅲ	一括	成川式土器	壺	底部	外：ヘラ状工具による沈線文	橙	にぶい黄	－	－	－	○	○		雲母	
	224	D-14	－	－	成川式土器	壺	胴部	外：ヘラ状工具による沈線文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－	－	○	○		赤いチャート	
	225	F-16	－	一括	成川式土器	壺	胴部	外：ヘラ状工具による刻目突帯 ナデ	明赤褐	明赤褐	－	－	－	○			褐	
	226	E-18	Ⅲ	一括	成川式土器	小型壺	胴部	外：ハケメ・ヘラケズリ 内：ヘラケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－	－	○	○		褐	
	227	D-17	Ⅲ	一括	成川式土器	小型壺	口縁部	外：ヘラ状工具によるナデ 内：ヘラ状工具によるナデ	にぶい橙	にぶい橙	14.8	－	－	○	○		雲母	
	228	D-18	Ⅲ	－	成川式土器	小型壺	口縁部	外：ナデ　ケズリ 内：ナデ	橙	橙	－	－	－	○	○	○		
	229	D-17	Ⅲ	－	成川式土器	小型壺	口縁部	外：ナデ 内：ナデ	橙	黄橙	14.2	－	－	○	○		褐	
	230	D-17	－	一括	成川式土器	小型壺	口縁部	外：ミガキ 内：ナデ	橙	橙	－	－	－		○		雲母	
	231	C-21	Ⅲ	－	成川式土器	小型壺	口縁部	外：ヘラ状工具によるナデ	橙	橙	－	－	－	○	○	○		

高坏（第37図　232～238）

232は高坏の口縁部かと思われる。口縁端部は沈線により『V』字状に凹んでいる。口縁部下の屈曲が明瞭である。外面は一部刷毛目調整を施し，内面はヘラ状工具によるナデ調整である。233は外面全面に丹塗りを施す高坏である。外面には横方向の丁寧なミガキ調整を施し，内面はナデ調整である。234は古墳時代の高坏の脚部である。坏の中心部から裾部にかけて断面は薄く成形されている。内面の中心部には粘土の貼付けが明瞭に残っている。外面は一部横方向のナデ調整がみられる。235は埦部がやや丸みを帯びる器形である。胎土に2㎜大の礫や赤いチャートを含む。236は口縁端部が欠損するが埦部下半に膨らみをもち，断面は薄く丁寧に製作されている。外面に一部刷毛目調整，内面はナデ調整である。237は脚部の裾である。薄く成形され，外側に『ハ』の字状に開いている。外面・内面ともに裾部まで丁寧にナデ調整されている。238はロ縁部が外側に直行するものである。外面・内面ともに摩滅している。

鉢（第37図　239・240）

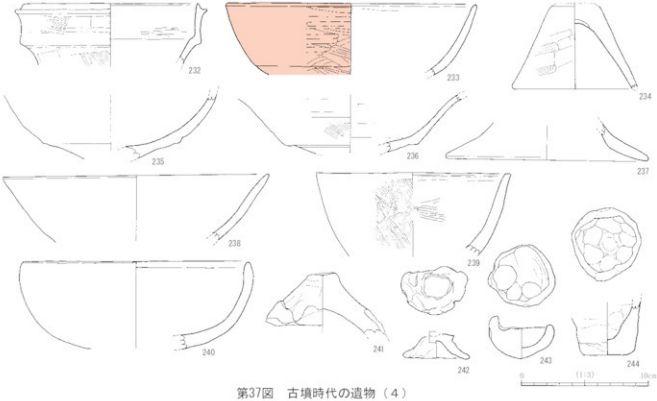
239・240は鉢形土器である。口縁部から底部にかけて断面は厚くなっている。外面・内面ナデ調整が施され，内面の底面付近に煤が付着している。

蓋（第37図　241）

241は蓋のつまみの部位である。裾部は欠損しているが，全体に厚みがある。一部に粘土を貼付けて厚みを出している。

小型器種（第37図　242～244）

242はミニチュア土器の蓋である。持ち手は欠損しているが，蓋の裾部に指圧痕が残るものである。すべて手のひらに収まる大きさである。243・244は手づくね土器である。243は小型の坏である。器形の一部に指ひとつ分の持手部分がみられる。調整はナデである。244はコップのような器形の底部である。内面は指圧痕が明瞭に残り，器形は全体的にゆがんでいる。



第37図　古墳時代の遺物（4）

第10表　古墳時代の土器観察表（3）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	取上番号	分類	器種	部位	器面調整	色調 外面	色調 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 他	備考
37	232	C-19	－	一括	成川式土器	高坏	口縁部	外 ハケメ 内 工具ナデ　口縁端部沈線	にぶい黄橙	にぶい黄橙	13.6	－	－	○	○		雲母・赤いチャート	
	233	C-21	－	一括	成川式土器	高坏	口縁部	外 ミガキ 内 ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	19.6	－	－	○	○	○	雲母　丹塗り	
	234	F-16	Ⅲ	一括	成川式土器	高坏	脚部	外 ナデ 内 ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	10.0	－	○	○		褐	
	235	F-16	Ⅲ	－	成川式土器	高坏	脚部	外 ナデ 内 ナデ	橙	橙	－	－	－	○	○		褐・赤いチャート	
	236	C-14	Ⅱ	－	成川式土器	高坏	脚部	外 ハケメ 内 ナデ	橙	橙	－	－	－	○			褐・雲母	
	237	F-17	Ⅲ	－	成川式土器	高坏	脚部	外 ナデ 内 ナデ	明赤褐	明赤褐	－	16.0	－	○			雲母	
	238	F-16	Ⅲ	一括	成川式土器	高坏	口縁～脚部	外 ナデ 内 ナデ	橙	橙	21.0	－	－	○	○			
	239	C-24	Ⅲ	－	成川式土器	鉢	口縁～脚部	外 ヘラ状工具ナデ 内 ヘラ状工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	15.2	－	－	○			褐	
	240	E-12	Ⅲ	一括	成川式土器	鉢	口縁～脚部	外 磨ナデ 内 磨ナデ	橙	橙	18.0	－	－	○	○	○		煤付着
	241	F-16	Ⅲ	－	成川式土器	蓋	つまみ	外 工具ナデ 内 工具ナデ	橙	にぶい黄橙	－	－	－	○	○		褐・雲母	
	242	F-16	Ⅲ	一括	成川式土器	小型器種	蓋	外 指圧痕 内 ナデ	浅黄	暗灰黄	－	4.8	－	○			雲母	
	243	C-19	Ⅲ	一括	成川式土器	小型器種	完形	外 ナデ　一部ケズリ 内 指圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5.0	－	2.5	○	○		赤いチャート	
	244	C-17	Ⅲ	一括	成川式土器	小型器種	底部	外 ナデ 内 指圧痕	にぶい黄	にぶい橙	－	3.5	－	○	○			

第７節　古代の調査

１　調査の概要

古代の遺構は確認されなかった。古代の遺物は，主にⅢ層から出土した。土師器・須恵器のほか刻書土器が出土した。

２　遺物

土師器（皿・坏・埦）（第38図　245～247・251）

245は土師器の坏である。体部はやや内傾し，丸く収まっている。246は土師器の皿の底部である。底面はヘラ状工具によって切り離された痕跡が残る。247は底面外周よりもやや内側に高台をもつものである。体部はわずかに内湾しながら口縁部にかけて外側に開いている。外面に一部丹塗りの痕跡が残っている。外面・内面ともに回転横ナデ調整である。251はストレートに外開きする器高の高い体部をもち，高台は底部縁辺から『ハ』の字状に張り出している。

須恵器（第38図　248・249）

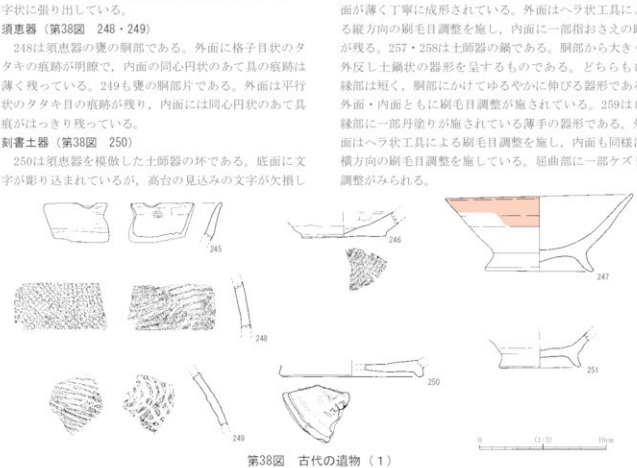
248は須恵器の甕の胴部である。外面に格子目状のタタキの痕跡が明瞭で，内面の同心円状のあて具の痕跡は薄く残っている。249も甕の胴部片である。外面は平行状のタタキ目の痕跡が残り，内面には同心円状のあて具痕がはっきり残っている。

刻書土器（第38図　250）

250は須恵器を模倣した土師器の坏である。底面に文字が彫り込まれているが，高台の見込みの文字が欠損しているため，解読不可能である。

土師器（甕・鍋）（第39図　252～259）

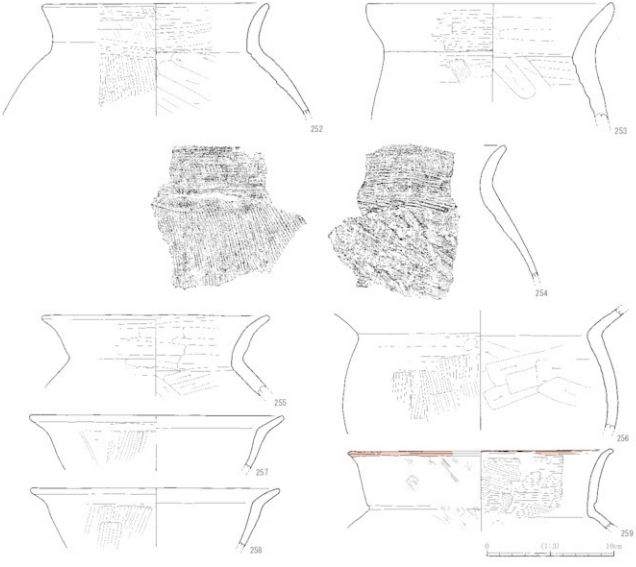
252は口縁部が外反し，胴部にかけて『く』の字状に屈曲するものである。外面はヘラ状工具による縦方向の刷毛目調整で，内面は横方向のヘラケズリ調整を施している。胎土に石英・長石のほか２mmえの砂粒を多く含む。253の口縁部は短く，胴部に厚みがある。胴部はゆるやかに屈曲する。外面はヘラ状工具による横方向のナデ調整で，内面のヘラケズリ調整がみられる。254は252と内面のヘラケズリ調整や胎土が類似していたため同一個体の可能性がある。255の口縁部は先細り，口縁部から屈曲部にやや膨らみを呈している。口縁部は大きく外反しているため，屈曲部の内面の稜がはっきりしている。内面は横方向のヘラケズリ調整を施している。256は口縁部が欠損しているが，内面のヘラケズリ調整により，断面が薄く丁寧に成形されている。外面はヘラ状工具による縦方向の刷毛目調整を施し，内面に一部指おさえの跡が残る。257・258は土師器の鍋である。胴部から大きく外反し土鍋状の器形を呈するものである。どちらも口縁部は短く，胴部にかけてゆるやかに伸びる器形である。外面・内面ともに刷毛目調整が施されている。259は口縁部に一部丹塗りが施されている薄手の器形である。外面はヘラ状工具による刷毛目調整を施し，内面も同様に横方向の刷毛目調整を施している。屈曲部に一部ケズリ調整がみられる。



第38図　古代の遺物（１）

第11表　古代の遺物観察表（１）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	取上番号	分類	器種	部位	器面調整	色調 外面	色調 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 他	備考
38	245	F-17	Ⅲ	一括	土師器	坏	口縁部	外：ナデ 内：ナデ	灰白	灰白	－	－	－	○	○		雲母	
	246	D-15	－	一括	土師器	皿	底部	外：ヘラ切り 内：ナデ　指圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	6.4	－		○		雲母	
	247	C-16	Ⅲ	－	土師器	埦	口縁部～底部	外：回転横ナデ 内：回転横ナデ	橙	橙	14.6	8.5	6.0	○	○		雲母・赤色粒	丹塗り
	249	C-12	Ⅰ	一括	須恵器	甕	胴部	外：格子目状タタキ痕 内：同心円あて具痕	灰白	灰黄褐	－	－	－					
	250	D-15	Ⅲ	－	土師器	坏	底部	外：平行状タタキ目痕 内：同心円あて具痕	灰	灰	－	－	－					
	251	トレンチ	－	－	土師器	埦	底部	外：回転横ナデ 内：回転横ナデ	外：回転横ナデ 内：回転横ナデ	外：回転横ナデ 内：回転横ナデ	－	11.3	－	○	○		雲母	刻書土器
									にぶい橙	にぶい黄橙	－	6.4	－		○		雲母	



第39図　古代の遺物（２）

第12表　古代の遺物観察表（２）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	取上番号	分類	器種	部位	器面調整	色調 外面	色調 内面	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 他	備考
39	252	D-17	Ⅲ	－	土師器	甕	口縁部～胴部	外：ヘラ状工具によるハケメ 内：ヘラケズリ	橙	橙	18.0	－	－	○	○		雲母	
	253	D-17	－	－	土師器	甕	口縁部	外：ヘラ状工具によるナデ 内：ヘラケズリ	橙	橙	19.5	－	－		○		雲母・稀	
	254	D-18	Ⅲ	－	土師器	甕	口縁部～胴部	外：ヘラ状工具によるハケメ 内：ヘラケズリ　指圧痕	橙	橙	－	－	－		○		稀・砂粒	
	255	E-12	Ⅲ	46	土師器	甕	口縁部	外：ハケメ 内：ヘラケズリ	明赤褐	明赤褐	18.0	－	－		○		稀	
	256	F-16	Ⅲ	－	土師器	甕	口縁部～胴部	外：ヘラ状工具によるハケメ 内：ヘラケズリ　指圧痕	橙	明赤褐	－	－	－		○		稀	
	257	C-15	Ⅰ	一括	土師器	鍋	口縁部	外：ハケメ 内：ハケメ	浅黄	にぶい黄	19.6	－	－		○	○		
	258	D-17	Ⅲ	－	土師器	鍋	口縁部～胴部	外：ハケメ 内：ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	18.6	－	－	○		○	雲母	
	259	D-17	－	－	土師器	甕	口縁部～胴部	外：ヘラ状工具によるハケメ 内：ハケメ一部ケズリ	暗灰黄	にぶい黄橙	21.2	－	－	○	○	○		丹塗り

第８節　中・近世の調査

１　調査の概要

中・近世の調査では，Ⅴ層上面で糸切りの切り離し痕ある土師器皿を伴った土坑墓が１基検出された。遺物は主にⅢ層から出土した。

２　遺構

土坑墓（第40図）

検出状況　Ｆ－13区，Ⅴ層上面で検出された。

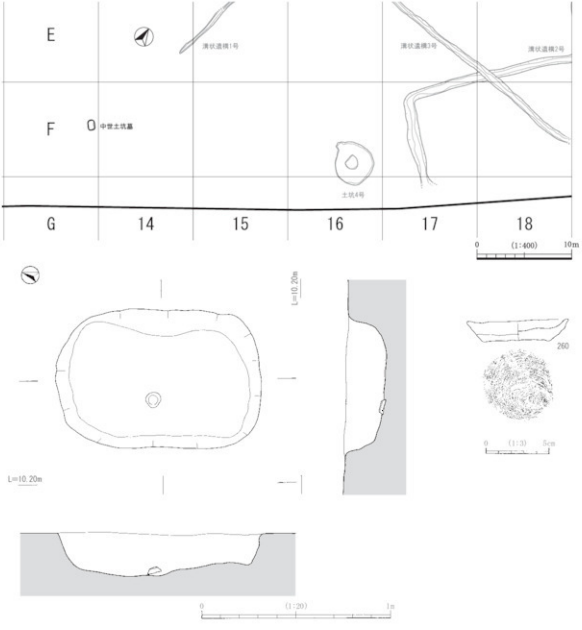
形状・規模　平面形態は長軸約110㎝×短軸約70㎝の長方形を呈する。検出面から床面までの深さは約20㎝である。断面形態は床面の北側がやや凹む。壁面はわずかに外傾し立ち上がる。

埋土　黒褐色の砂質土である。

遺物出土状況　床面で土師器皿がほぼ完形で出土した。

出土遺物（第40図　260）

260は土師器の皿である。直径約８㎝，器高約1.6㎝で内面中央部がやや凹む。底部の切り離し痕は糸切りである。



第40図　中世の遺構配置図及び土坑墓・出土遺物

第13表　土坑墓観察表

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	遺構	取上番号	分類	器種	部位	器面調整	色調		法量(cm)			胎土					備考
										外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃石	他		
40	260	F-13	Ⅴ	土坑墓	581	土師器	皿	完形	外：ナデ 内：ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	8.0	5.4	1.6	○		○	雲母		糸切り

3　遺物

須恵器（第41図　261・262）

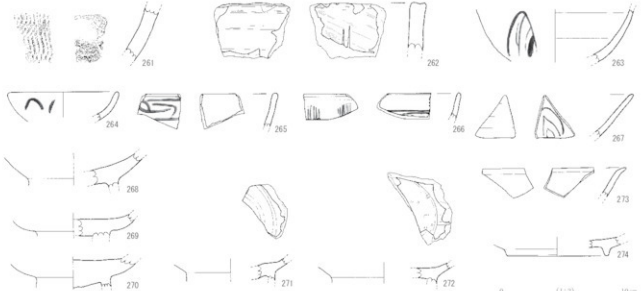
261・262は東播系の須恵器である。261は甕の胴部片かと思われる。外面に綾杉状のタタキの痕跡が残っている。262は擂鉢の口縁部である。外面・内面ともにナデ調整である。

青磁（第41図　263～271）

263・264は龍泉窯系青磁碗である。263は口縁部は欠損しているが，体部に鎬蓮弁文がみられる。264の口縁部はやや内湾しており，全体の器形は小さい。265は龍泉窯系青磁碗である。口縁端部は直ロし，口縁部外面に雷文帯を有するものである。266は同安窯系青磁碗の口縁部である。直口縁で，外面に縦方向の櫛目文を施している。内面上位には横方向の沈線文を有する。267も直口する口縁部で，内面に花文を施している。268～271は青磁碗の底部である。268は釉が厚めに施釉され，発色が良く青味を帯びている。270は腰部が張り，底部が厚い。高台内面は露胎し，釉は茶色味を帯びる。271は高台内面が露胎している。

白磁（第41図　272～274）

272は高台内面が露胎し，腰部の釉が一部剥げている。灰色にやや緑色の釉が施釉されている。273は口縁端部が嘴状に外反している。釉は灰色味を帯びるものである。274は高台内面にも灰白色の釉が薄く施釉されている。



第41図　中・近世の遺物（1）

第14表　中・近世の遺物観察表（1）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	取上番号	種別	器種	部位	胎土の色調	法量（cm）			釉薬	備考
									口径	底径	器高		
41	261	D-16	Ⅲ	－	須恵器	甕	胴部	黄灰	－	－	－	－	東播系
	262	F-15	Ⅲ	一括	須恵器	擂鉢	口縁部	黄灰	－	－	－	－	東播系
	263	C-12	Ⅰ	一括	青磁	碗	胴部	灰白	－	－	－	青磁釉	龍泉窯系
	264	F-14	Ⅲ	一括	青磁	碗	口縁～胴部	灰黄	8.8	－	－	青磁釉	龍泉窯系
	265	D-13	Ⅲ	－	青磁	碗	口縁部	灰黄	－	－	－	青磁釉	龍泉窯系
	266	D-15	Ⅰ	－	青磁	碗	口縁～胴部	灰黄	－	－	－	青磁釉	同安窯系
	267	E-18	Ⅰ	一括	青磁	碗	口縁部	灰白	－	－	－	青磁釉	龍泉窯系上田C類
	268	D-16	Ⅰ	－	青磁	碗	底部	灰白	－	－	－	青磁釉	
	269	E-18	Ⅱ	一括	青磁	碗	底部	浅黄	－	－	－	青磁釉	
	270	F-17	Ⅱ	一括	青磁	碗	底部	浅黄	－	－	－	青磁釉	
	271	E-17	Ⅲ	－	青磁	碗	底部	灰白	－	－	－	青磁釉	
	272	E-17	Ⅲ	一括	白磁	碗	底部	灰白	－	－	－	透明釉	
	273	C-13	－	一括	白磁	碗	口縁部	灰白	－	－	－	透明釉	
	274	E-18	Ⅱ	一括	白磁	碗	底部	灰白	－	7.8	－	透明釉	

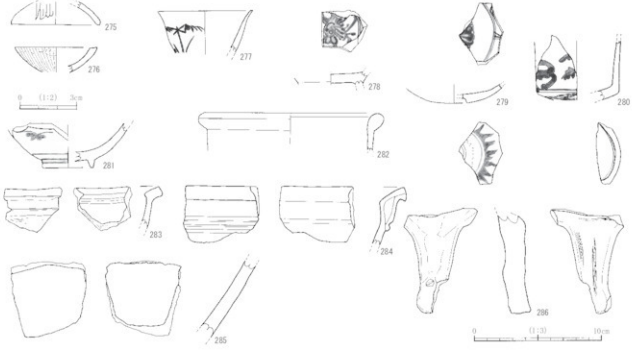
青白磁・染付（第42図　275～281）

275は合子の蓋である。側面に菊弁文を有する。276は紅皿である。外面に縦位の櫛文を施し，透明釉が施釉されている。277は染付の碗である。口縁端部が外反し，外面に草花文と笹文が施されている。278は青花の碗の底部である。高台内面まで施釉し，内面に花文を有する。279は青花である。外面に芭蕉葉文を有し，碁笥底を呈する。内面には唐草文が描かれる。釉は掻き取られている。16世紀頃のものと思われる。

280は染付の筒型碗である。外面に笹文，内面に一重圏線が描かれている。薄く透明釉が施釉され灰白色の胎土である。281の外面は高台の内面まで施釉されるが，畳付の釉は掻きとられている。透明釉が薄く施釉されている。

薩摩焼・焙烙（第42図　282～286）

282～285は薩摩焼の擂鉢である。284の口縁部は外反し，口縁部下に削り出しによる突帯を２条施す。内外面に鉄釉を施釉している。282は口縁部を折り返し，玉縁状にしている。鉄釉が施釉され断面は薄い。283は口縁部がやや内側に張り出し，外反している。286は焙烙の把手部である。持ち手の上面は工具によるナデ調整が施されている。下面には厚く煤が付着している。色調はにぶい橙色を呈する。



第42図　中・近世の遺物（２）

第15表　中・近世の遺物観察表（２）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	取上番号	種別	器種	部位	胎土の色調	法量（cm）			釉薬	備考
									口径	底径	器高		
42	275	F-18	－	一括	白磁	合子蓋	口縁部～胴部	灰白	4.8	－	－	透明釉	菊弁文
	276	E-15	Ⅲ	一括	白磁	紅皿	口縁～底部	灰白	4.4	－	－	透明釉	櫛文
	277	F-15	Ⅰ	一括	染付	碗	口縁部	灰白	7.6	－	－	透明釉	草花文　笹文
	278	C-15	Ⅰ	一括	青花	碗	底部	灰白	－	－	－	透明釉	花文
	279	D-16	Ⅰ	－	青花	碗	底部	明褐灰	－	－	－	透明釉	外：芭蕉葉文　碁笥底 内：唐草文
	280	F-17	Ⅱ	一括	染付	筒型碗	胴部	灰白	－	－	－	透明釉	外：笹文 内：一重圏線
	281	G-16	Ⅰ	一括	染付	碗	胴部～底部	灰白	－	4.0	－	透明釉	
	282	－	－	－	薩摩焼	擂鉢	口縁部	褐灰	14.6	－	－	鉄釉	
	283	D-11	Ⅲ	290	薩摩焼	擂鉢	口縁部	黄灰	－	－	－	鉄釉	
	284	F-17	Ⅱ	－	薩摩焼	擂鉢	口縁部	赤褐	－	－	－	鉄釉	
	285	D-15	Ⅰ	－	薩摩焼	擂鉢	胴部	赤褐	－	－	－	鉄釉	
	286	F-13	Ⅲ	一括	土師質土器	焙烙	把手部	にぶい橙	－	－	－	－	煤付着

第９節　時代・時期不明の遺構

前原遺跡ではⅢ層・Ⅳ層に縄文時代中期～近世の遺物が混在し，遺構に伴う遺物が多時期にわたるために遺構に該当する時期の詳細が不明な遺構があった。

１　掘立柱建物跡（第44図）

検出状況　Ｃ・Ｄ－14・15区，Ⅲ層上面で検出された。

規格・規模　１間×３間で北側に庇を持つ。柱間は桁行が１間約200㎝，梁行が1間350～380㎝である。

柱穴の形状・埋土　柱穴の平面形は円形である。規模は直径が27～40㎝，検出面からの深さは25～50㎝であった。埋土は黒褐色であった。埋土中に遺物はなかった。

２　土坑４号（第45図）

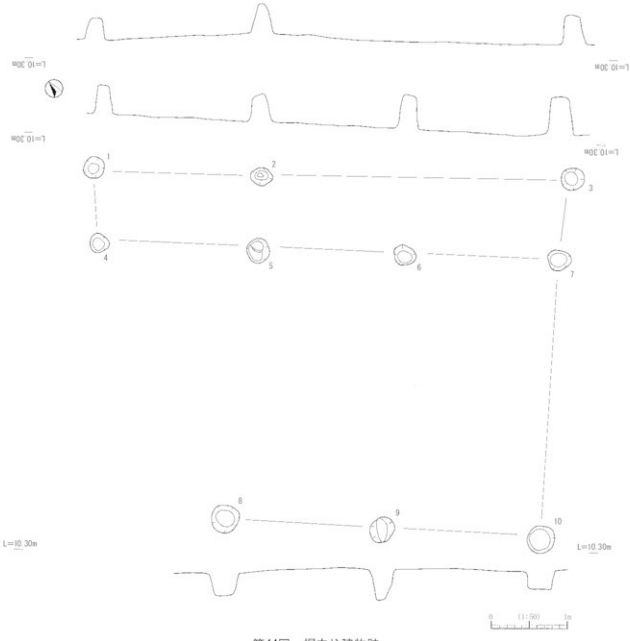
検出状況　Ｆ・Ｇ－16区，Ⅴ層上面で検出された。

形状・規模　西側の一部分が張り出した約420㎝×470㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは約20㎝である。土坑中央部に約160㎝×約130㎝，深さ約５㎝の浅い掘り込みがある。床面に硬化面は確認できなかった。土坑内に４基のピットがあるが深さ形状に統一性がなく樹根の可能性もある。形状・規模から住居の可能性もあるが断定するには至らなかった。

埋土　埋土は暗褐色の砂質土である。

出土遺物　287は成川式の台付鉢である。口縁部はゆるやかに外反し，安定した脚部をもつ。脚部裾は『ハ』の字状に開き丁寧なナデ調整が施されている。胴部外面・内面ともに刷毛目調整がみられる。288は７世紀代の坏である。口縁部先端はやや外反し，丸底の外面はヘラケズリ調整が施されている。完形の状態で出土した。

第43図　時期不明の遺構配置図



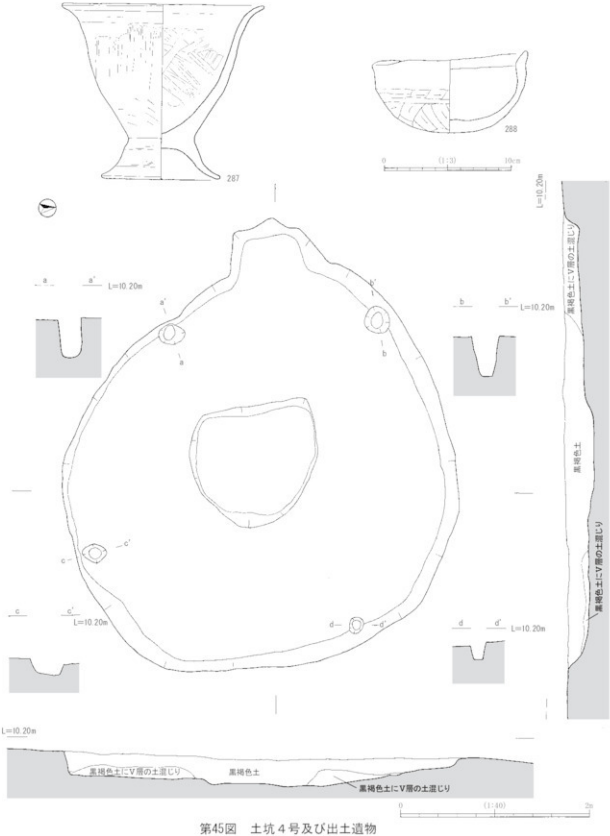
第44図　掘立柱建物跡

第16表　掘立柱建物跡計測表

柱穴番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	30	31	30
2	30	25	40
3	30	30	40
4	27	25	40
5	35	30	40
6	30	25	45
7	30	30	50
8	40	35	30
9	35	30	40
10	37	37	25

第17表　掘立柱建物跡規模表

主軸	方向	柱穴	柱穴距離(cm)
N49° W	桁行	P1-P2	220
		P2-P3	410
		P4-P5	214
		P5-P6	200
		P6-P7	205
		P8-P9	210
		P9-P10	210
	梁行	P1-P4	105
		P2-P5	95
		P3-P7	110
		P5-P8	350
		P6-P9	360
		P7-P10	380



第45図　土坑４号及び出土遺物

第18表　土坑内遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	遺構	分類	器種	部位	器面調整	色調 外面	色調 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 他	備考
45	287	F-16	Ⅲ	SK-4	成川式土器	台付鉢	完形	外：ヘラナデ 内：ヘラナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	16.0	9.4	13.8	○			雲母・礫・赤色鉱物	
	288	F-16	Ⅲ	SK-4	土師器	坏	完形	外：ケズリ	橙	橙	12.0	2.0	6.5	○			雲母・赤色鉱物	

3　溝状遺構（第46～50図）

調査区内に６条の溝状遺構が検出された。いずれもⅢ層上面での検出で埋土は黒褐色であった。

溝状遺構１号

検出状況　Ｅ－14区からＤ－23区のⅢ層上面で検出された。

規模　全長約86m，幅20～120cm程度である。検出面からの深さは10～30cmである。

溝状遺構２号

検出状況　Ｃ～Ｆ－17～24区のⅢ層上面で検出された。

規模・形状　全長約118m，幅40～120cm程度である。検出面からの深さは10～50cmである。直角にクランク状に延びる。

出土遺物　遺物は縄文時代後期から中・近世のものが出土した。289は縄文時代後期の南福寺式土器の口縁部である。口縁部は平坦面を呈し，粘土帯にヘラ状工具による沈線文が施されている。290・291は縄文時代後期の市来式土器の口縁部片である。口縁部外面に貝殻刺突文を施し，内面に貝殻条痕で調整されている。292は中世の土師器坏である。口縁部は先細りで，やや厚みのある底部は糸切りの切り離し痕がみられる。

溝状遺構３号

検出状況　Ｃ－15区からＦ－18区のⅢ層上面で検出された。

規模　全長約50m，幅70～100cm程度である。検出面からの深さは30～40cm程度である。

出土遺物　293は土師器の口縁部片である。294は成川式土器の胴部片である。胴部に幅広の刻目突帯文を施している。295は弥生時代中期の前半の入来Ⅰ式土器の口縁部片である。

溝状遺構４号

検出状況　Ｄ・Ｅ－23～25区のⅢ層上面で検出された。

規模　全長約25m，幅20～70cm程度である。検出面からの深さは20～70cm程度である。

溝状遺構５号

検出状況　Ｄ・Ｅ－25区のⅢ層上面で検出された。

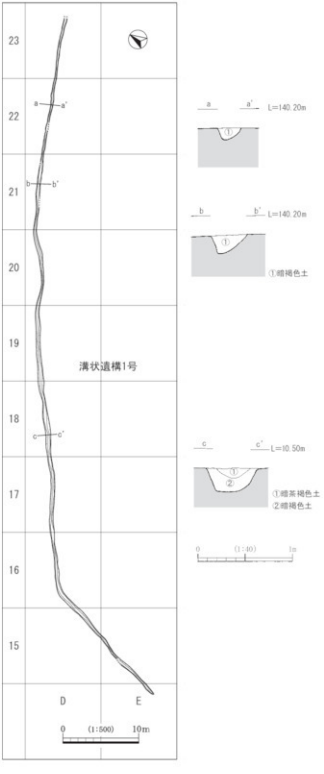
規模　全長約12m，幅50～80cm程度である。検出面からの深さは15～30cm程度である。

溝状遺構６号

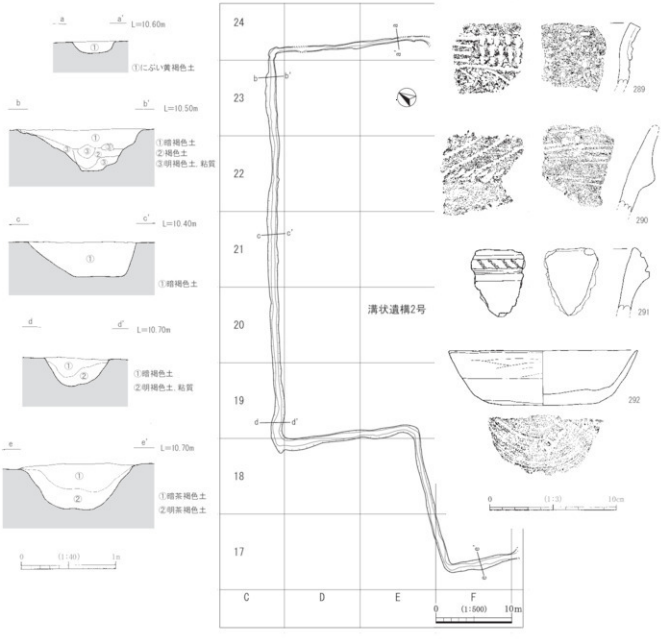
検出状況　Ｃ－24区のⅢ層上面で検出された。

規模　東西方向に約８m，南北方向に約６mである。幅70～80cm程度である。検出面からの深さは10cm程度である。

ピット　Ｃ・Ｄ－14～18区のⅤ層で43基のピットが検出された。ピット位置に特定の性質を見いだせず，用途・目的は不明である。いずれも埋土の色調は黒褐色であった。



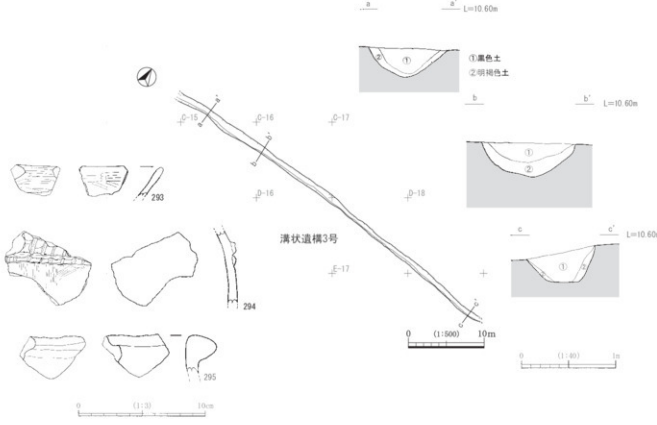
第46図　溝状遺構１号



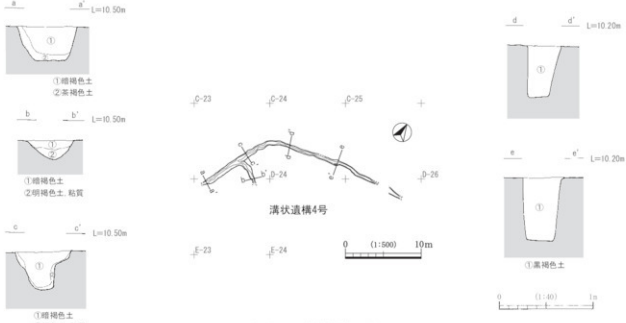
第47図　溝状遺構２号

第19表 溝内遺物観察表

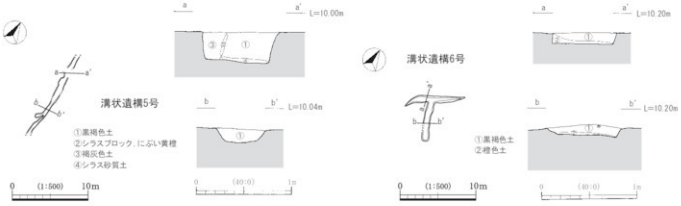
挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構	分類	器種	部位	器面調整	色調		法量(cm)			胎土				備考
								外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	角閃石	他	
47	289	C-21・22	溝2	南福寺式	深鉢	口縁部	外：ナデ 内：ナデ	橙	淺黄橙	－	－	－		○	○		
	290	－	溝2	市来式	深鉢	口縁部	外：貝殻刺突文 内：貝殻条痕文	にぶい橙	にぶい橙	－	－	－	○	○	○	火山ガラス	
	291	D-19	溝2	市来式	深鉢	口縁部	外：貝殻刺突文 内：貝殻条痕文	明赤褐	明赤褐	－	－	－	○	○	○	火山ガラス	
	292	F-17	溝2	土師器	坏	口縁～底部	外：ナデ 内：ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	15.2	8.7	4.4		○	○	雲母	糸切り
48	293	F-18	溝3	土師器	坏	口縁部	外：ミガキ 内：ミガキ	にぶい黄褐	黒	－	－	－		○	○		
	294	C・D-14～16	溝3	成川式	甕	胴部	外：刻目突帯文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－	－	○	○		礫・チャート	
	295	C・D-15・16	溝3	入来Ⅰ式	甕	口縁部	外：ナデ 内：ナデ	明褐	明褐	－	－	－	○	○		礫	



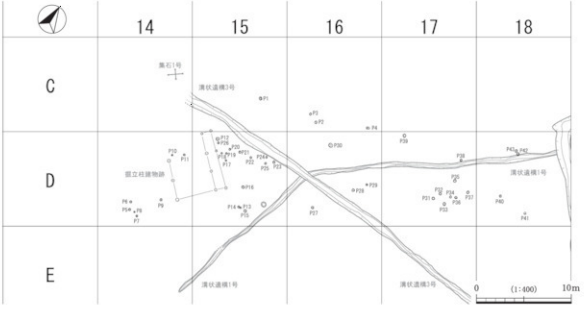
第48図　溝状遺構３号



第49図　溝状遺構４号



第50図　溝状遺構５号・６号



第51図　ピット配置図

第20表　ピット計測表

番号	区	検出面	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	区	検出面	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	番号	区	検出面	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
1	C-15	V	36.0	26.0	48.0	16	D-15	V	32.0	27.0	46.0	31	D-17	V	30.0	28.0	35.0
2	C-16	V	32.0	24.0	46.0	17	D-15	V	20.0	18.0	39.0	32	D-17	V	30.0	26.0	51.0
3	C-16	V	26.0	22.0	22.0	18	D-15	V	20.0	19.0	18.0	33	D-17	V	36.0	26.0	36.0
4	C-16	V	36.0	22.0	62.0	19	D-15	V	20.0	19.0	16.0	34	D-17	V	25.0	20.0	45.0
5	D-14	V	26.0	25.0	40.5	20	D-15	V	23.0	22.0	40.0	35	D-17	V	32.0	29.0	61.0
6	D-14	V	25.0	24.0	43.0	21	D-15	V	27.0	20.0	38.0	36	D-17	V	27.0	23.0	63.0
7	D-14	V	22.0	24.0	32.0	22	D-15	V	24.0	19.0	20.0	37	D-17	V	31.0	25.0	29.0
8	D-14	V	18.0	16.0	32.0	23	D-15	V	27.0	24.0	32.0	38	D-17	V	27.0	23.0	60.0
9	D-14	V	28.0	23.0	37.0	24	D-15	V	22.0	19.0	37.0	39	D-17	V	35.0	29.0	52.0
10	D-14	V	20.0	15.0	34.0	25	D-15	V	23.0	20.0	57.0	40	D-18	V	25.0	20.0	58.0
11	D-14	V	22.0	20.0	15.0	26	D-15	V	24.0	20.0	59.0	41	D-18	V	24.0	21.0	30.0
12	D-15	V	41.0	35.0	43.0	27	D-16	V	28.0	26.0	43.0	42	D-18	V	29.0	27.0	60.0
13	D-15	V	20.0	19.0	32.0	28	D-16	V	30.0	23.0	24.0	43	D-18	V	32.0	22.0	45.0
14	D-15	V	24.0	21.0	60.0	29	D-16	V	21.0	23.0	25.0						
15	D-15	V	33.0	29.0	58.0	30	D-16	V	20.0	21.0	23.0						

第10節　自然科学分析

放射性炭素年代測定

Ⅰ群５類東海系北裏ＣⅡ式

掲載番号19の深鉢に付着した炭化物を用いて，放射性炭素年代測定を実施したので，次にその報告を掲載する。

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・
山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze・
Ineza Jorjoliani・竹原弘展

１　はじめに

出水市福ノ江に所在する前原遺跡より検出された試料について，加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

２　試料と方法

測定試料の情報，調製データは表1のとおりである。試料No.１（PLD-28459）は，Ⅲ層より出土した深鉢の胴部外面に付着する炭化物である。

表１　測定試料および処理

掲載番号	遺跡データ	試料データ	前処理
19	試料No.1 調査区:D-16区 層位:Ⅲ層	種類:土器付着炭化物 器種:深鉢 部位:胴部外面 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.5N,塩酸:1.2N）

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクトAMS：NEC製　1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C年代，暦年代を算出した。

３　結果

表2に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代を，図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には，^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。

なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動，および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお，1σ暦年代範囲は，OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり，同様に2σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４　考察

測定の結果，^{14}C年代が4445±20　^{14}C　BP，2σ暦年代範囲が3329-3217 cal BC (37.5%)，3180-3158 cal BC (3.8%)，3124-3018　cal　BC (54.0%) であった。これは，小林（2008），工藤（2012），泉（2008），相美（2008）を参照すると，縄文時代中期前半にあたる。

参考文献

Bronk Ramsey, C.　(2009)　Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1)，337-360.
泉　拓良（2008）鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器．小林達雄編「総覧縄文土器」：516-521，アム・プロモーション．
小林謙一（2008）縄文時代の暦年代．小杉　康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし」：257-269，同成社．
工藤雄一郎（2012）後氷期の考古編年と^{14}C年代．旧石器・縄文時代の環境文化史，212-229，新泉社．
中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3-20，日本第四紀学会．
Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte,

表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-28459 試料No.1	−25.71±0.11	4447±22	4445±20	3308-3301 cal BC (2.8%) 3283-3277 cal BC (2.2%) 3265-3240 cal BC (16.5%) 3105-3081 cal BC (16.0%) 3070-3026 cal BC (30.7%)	3329-3217 cal BC (37.5%) 3180-3158 cal BC (3.8%) 3124-3018 cal BC (54.0%)

C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.

相美伊久雄（2008）深浦式土器．小林達雄編「総覧縄文土器」：516-521，アム・プロモーション．

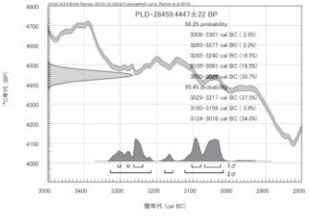


図１　暦年較正結果

第11節　総括

1　遺構・遺物の概観

本遺跡では縄文時代早期の遺物をはじめとして，中・近世までの遺物を確認することができた。以下に本遺跡の時代変遷について記載する。

2　縄文時代

縄文時代においては早期から中期，後・晩期にかけて少量ながらも各時代の遺物が出土している状況であった。これらに伴う遺構は集石や土坑が数基のみ検出された。集石は離れた位置に残存しており，それに伴う遺物は見られなかったが，C－14区で検出された集石１号付近で縄文時代後・晩期の遺物が出土していたことから，その時期に相当するものと考えられる。

縄文時代中期においては，南九州の在地土器とともに関西・瀬戸内地方の船元Ⅱ式土器・東海地方の北裏CⅡ式が出土した。平成26年12月の資料調査にて，岡山県倉敷考古館の間壁葭子氏，滋賀県立安土城考古博物館の平井美典氏，濱修氏，鈴木康二氏，（公財）滋賀県文化財保護協会の瀬口眞司氏に本遺跡出土の船元式土器を見ていただき，滋賀県栗津湖底遺跡第３貝塚の資料を見させていただいた。15・16は口縁部にハイガイの圧痕文と胴部の撚糸文が施されている。口縁部の施文や胎土などから関西・瀬戸内地方の船元Ⅱ式の搬入品である。特徴としては①胎土に石英・長石を多く含み，長石の比率が高い②赤いチャートを含む③断面は薄い層状に重なっている。船元Ⅱ式土器は断面が非常に薄く，頭部から胴部を貝殻で大きく削ることで断面を薄く仕上げており，船元Ⅰ式にみられる亜角礫がないことも重要な特徴のひとつとされる。県内では榎木原遺跡（鹿屋市）や上水流遺跡（金峰町）でも口縁部にハイガイによる施文がみられるものが出土している。上水流遺跡で出土したものは，全体の器形は小さいが，波状口縁の外面に非常に小さいハイガイによる施文が施され，頭部に刻目突帯が連弧文のように貼付けられる。外面は撚糸文が施され，断面の厚みは異なるが，施文などは本遺跡で出土したものとよく似ている。このような製作技法や土器様式の雰囲気は南九州の在地土器とは明らかに異なっている。その他９～14のように波状口縁で突帯に連続刺突文が施されているものも出土した。器形や文様から関西・瀬戸内地方の船元Ⅱ式にみられるものと類似しており，それらを意識して製作された可能性がある。施された連続刺突は関西・瀬戸内地方では２点列点と呼称し，半截した竹の内面を抉り，その角で刺突文を施すことから，２点の角が揃いながら施文される特徴がある。しかし，本遺跡で出土したものは２点の列が少しずつずれていることから①関西・瀬戸内地方の船元Ⅱ式土器を認識しているが，施文がやや異なる。②断面には層状の重なりが確認できたため，船元Ⅱ式土器の製作技法を意識した西北部九州の土器の可能性があるとご教示いただいた。

また，同時期と思われる南九州の在地土器も出土しており，20・21は上水流遺跡で出土したものと同様のものである。胎土には石英・長石・角閃石を多く含み，口縁部には突帯や刺突文を施し，外面には貝殻条痕文を施文している。これらは上水流タイプとされ（相美2011），このような土器が存在した背景については，鷹島式や船元式の搬入に伴って縄文を施文した土器の存在を知っていたが，その施文技法は知らなかったとして，貝殻条痕の技法で代用したとされている（相美2011）。この時期の在地土器の出土状況を知る一資料となった。

本遺跡の特筆すべき遺物として，東海地方の土器が出土した。鹿児島県内で初めての出土例として貴重な資料となった。17～19は縄文時代中期前半の北裏CⅡ式から山田平Ⅲ式に相当する土器である。19は深鉢の胴部片で，断面は薄く胴部には粘土板の貼付けを行っているのが特徴である。粘土板の文様には半截竹管の押引文や連続刺突文，三角形に彫り込む三角陰刻などの施文が施されている。このような施文技法や土器様式の雰囲気は船元式土器と同様に南九州の在地土器とは全く異なっている。こうした遺物の出土状況から，縄文時代中期前半期における当時の広域的な土器の移動・人の移動などを推測する手がかりになるかもしれない。

縄文時代中期から後期初頭にかけては，南福寺式・出水式・北久根山式，浜ノ州タイプが出土している。どの様式も少量ずつ出土しているが，縄文時代中期から後期に至る土器の器形や施文の違いから，当時の多様な土器様式の文化とその時期独特の土器の変遷を感じることができる。特に35・36のように口縁部に２か所の穿孔を開け，外面・内面ともに縦方向の沈線文等を施文する浜ノ州タイプは，県内では干迫遺跡（姶良市）で類例がみられる。これらは熊本県宇土郡三角町所在の浜ノ州貝塚から出土した土器に類似していることから設定されたものである。干迫遺跡の報告書に掲載されている1175～1177と同様のタイプといえる。また，縄文時代後期では鐘崎式・市来式が少量出土した他，松山式が１点出土している。土坑1号では西平式土器が逆さまの状態であったが，１個体が非常に良好な状態で出土した。

また，42，43のような磨消縄文系の土器や，64のようにS字状の施文がなされるものは外畠遺跡（出水市）で出土例がある。このように本遺跡は熊本県の水俣市の近くに位置していることから，中九州でみられる縄文時代の土器様式の影響が反映されていると考えられる。

縄文時代晩期では69・70のように木の葉をモチーフにした沈線文が施された入佐式や，128のように非常に小さい器種が出土した。外面にはミガキ調整が微密に施され，小型器種でありながら丁寧に製作されているのが特

徴的である。口縁部を欠損するが，当時の人が遊び心で製作したものか，興味深い資料である。このように縄文時代においては各時代の遺物が少量ずつ出土し，それに伴う明確な遺構が少ない状態であったが，各時期の多様な土器様式を知るうえで貴重な資料が多かった。本遺跡のこのような遺物の出土状況は薩摩半島における縄文時代を考えるうえで新たな様相を知る一資料となったことと思われる。

3　弥生時代～古墳時代

弥生時代の遺構は確認できなかったが，遺物は中期前半の入来式土器が出土した。口縁部のナデ調整や突帯の貼付けなど丁寧な作りで胎土は精良である。古墳時代の遺構としては土坑が２基検出された。どちらも中津野式段階と思われる成川式土器を伴っている。包含層の遺物においても，中津野式段階のものから笹貫式段階のものが出土している。器種は甕を中心として高坏や鉢，ミニチュア土器など様々であった。古墳時代の２つの土坑は比較的近い位置で検出された。

4　古代～中・近世

古代～中・近世の遺物は土師器・須恵器や青白磁・陶磁器類が出土した。土師甕や土師鍋の多くは252・256のように外面の刷毛目調整やヘラケズリ調整が丁寧なものと253のように粗雑なものとの差が大きいのが特徴である。259は雰囲気が異なるもので，口縁部外面・内面に丹塗を施しているものである。口縁部の厚みや胎土なども他と異なっており，従来の煮炊き用の甕とは違うものと思われる。また，250のように須恵器模倣の坏で文字が刻まれているものも出土した。細い線で浅く彫りこまれており線刻文字にもみえるが，何かの記号のようにもみえる。明確な解読は難しい状況であった。

中世の遺構では土坑墓が検出され，土師器の皿がほぼ完形で１点出土している。土坑墓は１基のみであったが，包含層遺物では青磁・白磁などが出土している状況がみられた。近世の遺物も同様に薩摩焼や焙烙などが出土している。

前原遺跡ではⅢ層，Ⅳ層ともに縄文時代中期から近世の遺物が混在している状況であり，遺構内の遺物も多時期にわたるため時期の特定が難しい状況であった。調査区の区画に沿うように検出された長い溝は25・26年度に検出されたものである。溝状遺構２・３号は溝の幅が大きく，断面はレンズ状に堆積している。出土遺物は縄文時代後期から中・近世の遺物が出土している状況であったため，遺物の流れ込みの可能性もあるが，それよりも古いと思われる溝状遺構１号の埋土中やその付近からは貝殻を廃棄したような状況が確認できた。こうした状況から明確な時期の判断は難しいが，そこで生活していた痕跡があったことは推測できる。

土坑４号は竪穴住居の可能性がある遺構である。掲載では土坑としたが，遺構内の埋土上面から出土した遺物などから，縄文時代晩期から古代にかかる遺構と考えられる。出土した土師器の坏は７世紀代のもので鹿児島県内では出土例が少ない。九州では主に熊本県宇土市での出土例が多い。出水市とは近い距離にあり遺物が持ち込まれた可能性が考えられる。

参考文献

桒拓良（2008）「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会

相美伊久雄（2011）「南九州の鷹島式土器・船元式土器」『南九州縄文通信』21　南九州縄文研究会

瀬口眞司（1997）「第10章　第２節　粟津第３貝塚における第Ⅰ群土器の検討」『粟津湖底遺跡第３貝塚』財団法人滋賀県文化財保護協会

増子康眞（2008）「北裏C～北屋敷Ⅱ式土器」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会

鹿児島県教育委員会（1987）『榎木原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（44）

鹿児島県立埋蔵文化財センター（1997）『干迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（22）

鹿児島県立埋蔵文化財センター（2010）『上水流遺跡４』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（150）

財団法人滋賀県文化財保護協会（1999）『粟津湖底遺跡Ⅱ』財団法人滋賀県文化財保護協会

写 真 図 版

図版1　中郡遺跡群

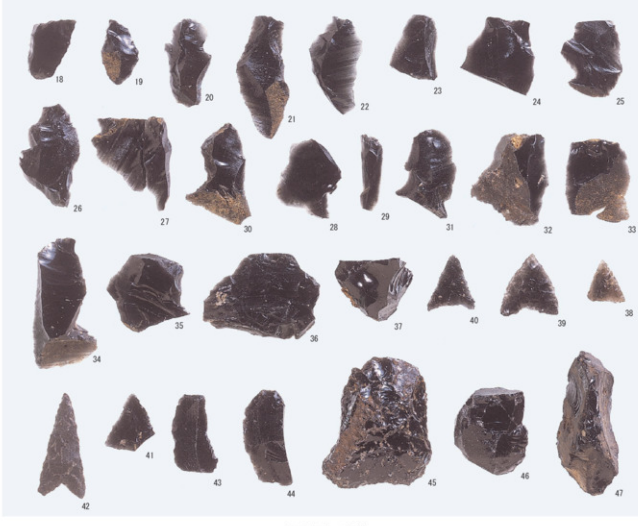
①土層断面　②作業風景　③・④遺構完掘状況

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

中郡遺跡群の遺物

①調査前風景　②土層断面　③～⑤土坑

1
13
17


18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
30
28
29
31
32
33
34
35
36
37
40
39
38
42
41
43
44
45
46
47

中尾遺跡の遺物

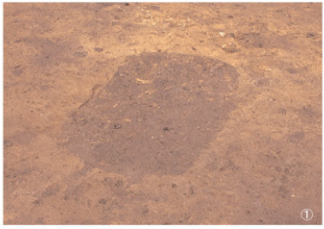
前原遺跡遠景

図版6　前原遺跡

①調査前風景　②・③土層断面　④作業風景

①・②土坑１号　③・④集石１号　⑤・⑥土坑２号　⑦・⑧土坑３号

図版8　前原遺跡



①～③中世土坑墓　④土坑４号　⑤掘立柱建物跡　⑥溝状遺構１・３号完掘状況

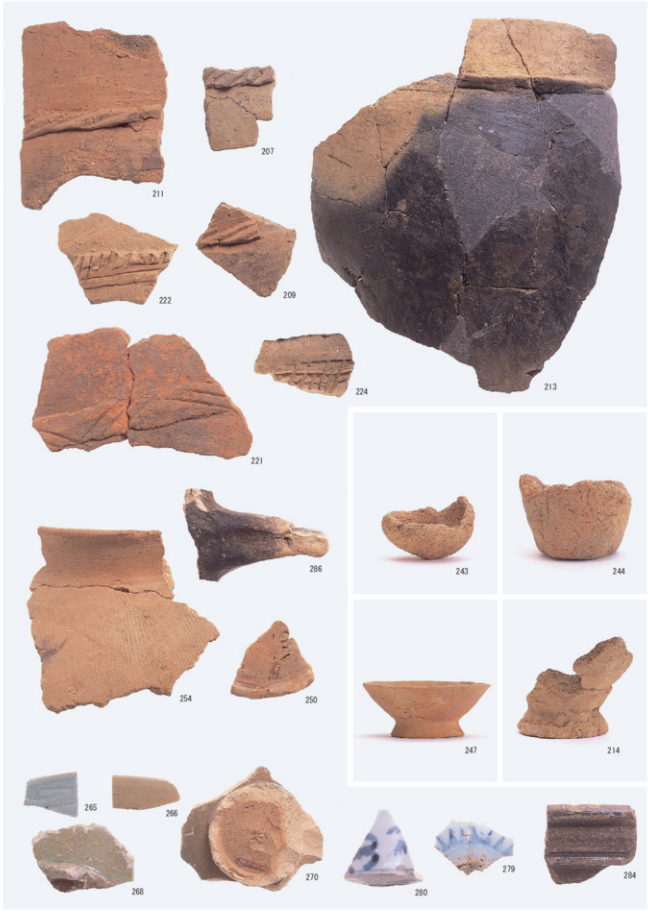
土坑1号出土　西平式土器

遺構内遺物　①～③土坑２号　④土坑３号　⑤中世土坑墓　⑥・⑦土坑４号

縄文時代中期～後期の土器

縄文時代後期の土器

縄文時代晩期・弥生時代の遺物



古墳時代，古代，中・近世の遺物

141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140

180
181
179

縄文時代の石器 1

縄文時代の石器２

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(10)
南九州西回り自動車道（出水阿久根道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中郡遺跡群Ⅱ・中尾遺跡・前原遺跡

発行年月　2016（平成28）年３月
発　　行　鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL 0995-70-0574　FAX 0995-70-0576
印　　刷　株式会社イースト朝日

鹿児島県